

さ こ う ち い せ き  
迫 内 遺 跡

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XV

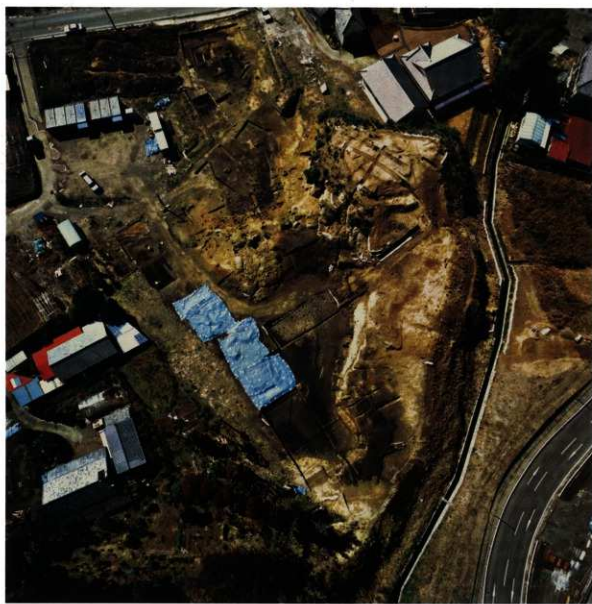
2 0 0 2

宮崎県埋蔵文化財センター

## 正誤表

訂正箇所	誤	正
本文目次 第4章	石塔群の復元と移設作業について 第2節 石塔群の移設作業	石塔群の復元と移転作業について 第2節 石塔群の移転作業
本文目次 付論①	骨蔵器内の骨の分析結果	蔵骨器内の骨の分析結果
本文 22頁 27行	遺構や骨蔵器は～	遺構や蔵骨器は～
本文 33頁 5行	遺構や骨蔵器は～	遺構や蔵骨器は～
61頁 第46図の番号	16 17	17 16
本文 68頁 27行	営まれたもの推定される	営まれたものと推定される
本文 170頁 9行	6～7本の	5～7本の
本文 170頁 右下写真	移転地遠来	移転地遠景

卷頭図版 1



迫内遭跡全景



A区 石塔群全景（垂直）



B区 磨崖板碑



移設した板碑

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第59集

さ こ う ち い せ き  
迫 内 遺 跡

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XV

2 0 0 2

宮崎県埋蔵文化財センター

## 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道西都～清武間建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成7年度から10年度にかけて実施して参りました。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した宮崎市所在の迫内遺跡は、平成9年度から10年度にかけて発掘調査を行ったものです。調査によって古墳時代前期の古墳と古墳時代後期の横穴墓、中世の石塔群・磨崖板碑・掘立柱建物跡を検出しました。

古墳は低丘陵を地山整形しており墳丘は崩落していましたが、周溝内から4・5世紀の土師器が出土しました。出土した土師器には、底部が穿孔されている二重口縁の壺があり、他にも底部が穿孔されている土師器が出土しています。横穴墓では、1基はすでに開口しており改変されていましたが、未開口の横穴墓を1基検出しました。磔床で須恵器や土師器が出土しています。

丘陵部の裾部にテラスを造成し石塔群は営まれていました。石塔群は廃棄されたために地輪のみが原位置を保ち、他は移動していました。また、非常に珍しい磨崖板碑が検出されました。これらの遺構が発掘調査されたことは墓制研究上極めて意義深いことです。

ここに報告する内容が学術面での資料や学校教育、生涯学習の場で多くの方々に活用されるとともに、今後の埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後になりましたが、現地での調査および報告書作成にあたって御協力いただいた多くの関係諸機関や地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼を申し上げます。

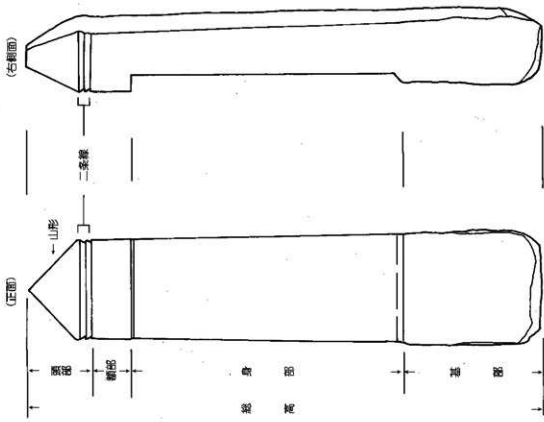
平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

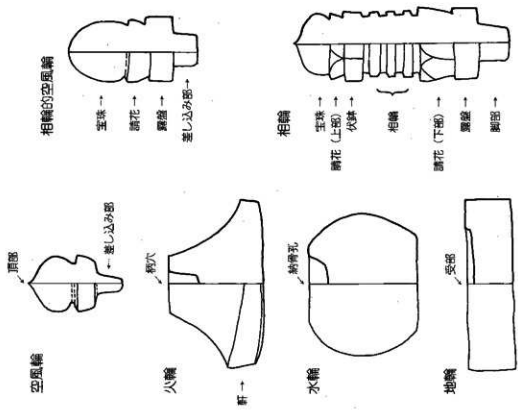
所長 矢野 剛

## 例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎市所在の迫内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は調査当初より「上箇遺跡」と呼称し、関連諸文書でもそのように扱ってきたが、調査区の全てが「大字迫内」に含まれることが確認できたので、遺跡名を「迫内遺跡」と変更した。
- 3 発掘調査は、日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 現地での実測等の記録は、主に高山富雄（現 申間市立北方中学校）、倉永英季（現 宮崎歴史文化館）、菅付和樹、山田洋一郎、小山博、橋本英俊が行い、一部を崎田一郎（現 宮崎県総合博物館）、日浅雅道（現 山之口町教育委員会）、福松東一、日高広人、和田理啓（現 文化課）、小山（旧姓田内）幸子ほか発掘作業員の協力を得た。石塔群・磨崖板碑の写真測量は朝日航洋株式会社に委託し、地形測量については宮崎県文化財調査・サポート協同組合に委託した。
- 5 石塔群の実測は、倉永・榎木和代・富田素子・長倉好子・浜砂妙子らが行った。
- 6 本書で使用した写真は小山・倉永・山田・菅付・橋本が撮影し、空中写真については株式会社スカイサーベイに委託した。
- 7 蔵骨器に納められていた火葬骨については、鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座助手峰和治氏、同竹中正巳氏に分析を依頼した。その結果は付論①として本書に掲載している。
- 8 検出した石塔群は、宮崎市の蓮ヶ池史跡公園「石塔のはらっぱ」に移設し、宮崎市教育委員会に移管した。移設作業は、菅付・倉永・鳥原孝仙（現 宮崎県御池少年自然の家）・竹井真知子（現 文化課）・小山が行い、検出時の地輪の配置に基づき配置した。また板碑の復元作業は、株式会社アクトの池之上見敏氏の指導のもとに、倉永・竹井・小山が行った。復元した板碑も宮崎市の蓮ヶ池史跡公園「石塔のはらっぱ」に移設した。
- 9 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、図面の作成、遺物実測、トレースは整理作業員の協力を得て菅付・橋本・小山が行った。
- 10 出土した鉄製の茶釜の保存処理及び分析は、御元興寺文化財研究所に委託し、2号横穴墓から出土した金属器の処理は、御吉田生物研究所に委託した。
- 11 本書では、日本道路公団作成の地形図と国土地理院発行の5万分の1の図を使用した。
- 12 土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の「新版標準土色帳」に拠った。
- 13 本書の執筆は、第3章第4節の一部を高木祐志・日高敬子が行ったほかは小山が行った。また陶磁器類の観察表については柳田晴子の協力を得た。編集は主として小山が行った。
- 14 本書で使用した方位は磁北である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海拔絶対高である。
- 15 本書で使用した遺構略号は次の通りである。  
SB…掘立柱建物跡 SC…土坑 SE…溝状遺構 SN…古墳 SL…周溝 SY…横穴墓
- 16 出土遺物その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。



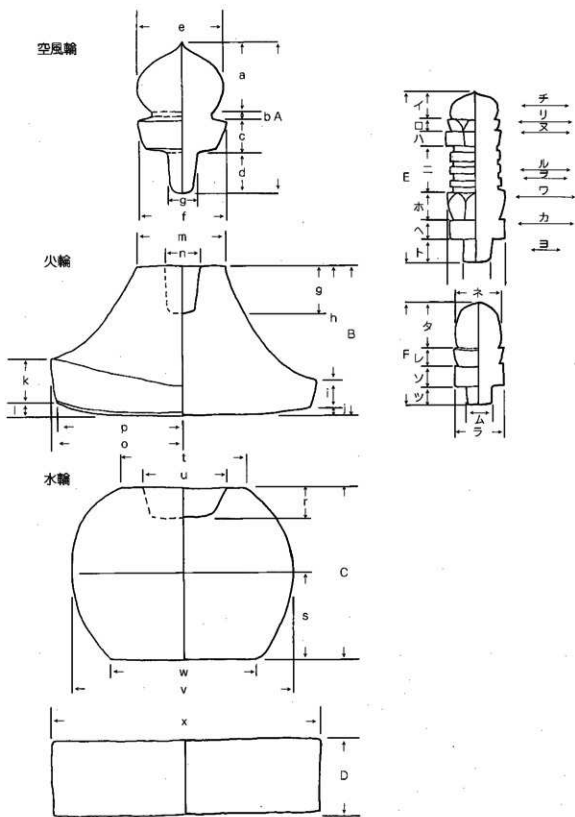
板碑の各部名称



石塔の各部名称

凡例1 石塔及び板碑の各部名称





凡例 2 五輪塔法量凡例

# 迫内遺跡本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の位置と環境	2
第2章	調査の概要	
第1節	調査区の設定	5
第2節	調査の概要	5
第3章	調査の記録	
第1節	A区の調査	
1.	調査の概要	10
2.	A区における層序	10
3.	A区における中世墓と遺物	
(1)	石塔群	10
(2)	出土遺物	33
第2節	B区の調査	
1.	調査の概要	68
2.	B区における中世の遺構	
(1)	掘立柱建物跡	68
(2)	磨崖板碑	73
(3)	横穴状遺構	73
(4)	出土遺物	79
第3節	C区の調査	
1.	調査の概要	95
2.	遺構と遺物	
(1)	溝状遺構	95
(2)	出土遺物	95
第4節	D区の調査	
1.	調査の概要	109
2.	遺構と遺物	
(1)	低丘陵部の古墳	111
(2)	横穴墓	121
(3)	出土遺物	126
第5節	E・F区の調査	
1.	調査の概要	140
2.	遺構と遺物	
(1)	祭祀状遺構	140
(2)	土坑	140
(3)	掘立柱建物跡	145
(4)	近世墓	145
(5)	出土遺物	150

第4章 石塔群の復元と移設作業について	
はじめに	169
第1節 板碑の復元作業	169
第2節 石塔群の移設作業	170
第5章 まとめ	
第1節 古墳時代の遺構と遺物	
(1) 低丘陵部の古墳	171
(2) 横穴墓	171
第2節 中世の遺構と遺物	
(1) 石塔群について	172
(2) 磨崖板碑と横穴状遺構について	175
(3) 掘立柱建物跡	176
(4) 出土遺物について	176
(5) まとめ—迫内石塔群に関する二・三の考察—	177
付論① 骨蔵器内の骨の分析結果	
第1節 宮崎市内迫内遺跡出土の骨蔵器内焼骨について	229

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 迫内遺跡周辺地形図	6
第3図 迫内遺跡遺構分布図	7
第4図 A区石塔群検出状況及び石塔配置図	11
第5図 A・B区遺構分布図	13
第6図 A区石塔群ベルト土層断面図	14
第7図 A区地輪配置図	15
第8図 A区石塔群コンタ図	17
第9図 A区石塔群グルーピング	19
第10図 A区Iグループ土層断面図	21
第11図 A区I aグループ平面図及び断面図	23
第12図 A区Iグループ板碑掘り込み面実測図	25
第13図 A区I bグループ平面図及び断面図	25
第14図 A区IIグループ土層断面図	21
第15図 A区II aグループ平面図及び断面図	27
第16図 A区II aグループ茶釜出土状況実測図	29
第17図 A区II aグループ蔵骨器出土状況実測図	29
第18図 A区II aグループSC1実測図	29
第19図 A区石組み蔵骨器検出状況	30
第20図 A区石製蔵骨器検出状況	30
第21図 A区IIグループ板碑掘り込み面実測図	31
第22図 A区和鏡出土状況及びSC2実測図	31
第23図 A区II bグループ平面図及び断面図	34
第24図 A区出土遺物	38

第25图	A区出土土器(1)	39
第26图	A区出土土器(2)	40
第27图	A区出土古銭	41
第28图	A区五輪塔(1)	43
第29图	A区五輪塔(2)	44
第30图	A区五輪塔(3)及び空風輪(1)	45
第31图	A区空風輪(2)	46
第32图	A区空風輪(3)	47
第33图	A区空風輪(4)及び火輪(1)	48
第34图	A区火輪(2)	49
第35图	A区火輪(3)	50
第36图	A区水輪(1)	51
第37图	A区水輪(2)	52
第38图	A区地輪(1)	53
第39图	A区地輪(2)	54
第40图	A区地輪(3)	55
第41图	A区地輪(4)	56
第42图	A区地輪(5)	57
第43图	A区地輪(6)及びB区空風輪・火輪、F区空風輪	58
第44图	A区板碑(1)	59
第45图	A区板碑(2)	60
第46图	A区復元した板碑(3)	61
第47图	B区土層断面図	69
第48图	B区SB1~3遺構実測図	70
第49图	B区SB4・5土層断面図	69
第50图	B区SB4・5断面及び雨落ち溝・排水溝断面図	71
第51图	B区SB4・5遺構実測図	72
第52图	B区磨崖板碑立面図及び平面図(1)	75
第53图	B区磨崖板碑立面図及び平面図(2)	77
第54图	B区磨崖板碑正面図(3)	74
第55图	B区横穴状遺構実測図	74
第56图	B区横穴状遺構壁面除刻文字	73
第57图	B区出土土師器(1)	82
第58图	B区出土土師器(2)	83
第59图	B区出土土師器(3)	84
第60图	B区出土土師器(4)	85
第61图	B区出土土師器(5)	86
第62图	B区出土遺物(1)	87
第63图	B区出土遺物(2)	88
第64图	C区遺構分布図	96
第65图	C区土層断面図	96
第66图	C区SE3・4土層断面図	96
第67图	C区遺物出土状況	97
第68图	C区出土土器(1)	98
第69图	C区出土土器(2)	99
第70图	C区出土陶磁器(1)	100
第71图	C区出土陶磁器(2)	101
第72图	C区出土陶磁器(3)	102
第73图	C区出土陶磁器(4)	103
第74图	C区出土陶磁器(5)	104

第75図	C区出土陶磁器(6)及び遺物	105
第76図	D区1号・2号・3号古墳墳丘実測図	110
第77図	D区1号古墳土層断面図	112
第78図	D区1号古墳1号周溝ベルト実測図	112
第79図	D区1号古墳1号周溝内出土土器実測図	113
第80図	D区1号古墳墓前祭祀遺構出土土器実測図	113
第81図	D区1号古墳土器埋設土坑内出土土器実測図(1)	114
第82図	D区1号古墳土器埋設土坑実測図(2)	115
第83図	D区2号古墳及び3号古墳ベルト土層断面図	116
第84図	D区2号古墳主体部実測図	117
第85図	D区2号古墳2号周溝内遺物出土状況	118
第86図	D区3号古墳主体部上出土遺物実測図	117
第87図	D区3号古墳主体部実測図	119
第88図	D区3号古墳4号周溝内出土土器実測図	120
第89図	D区1号横穴墓及び2号横穴墓分布図	122
第90図	D区1号横穴墓実測図	123
第91図	D区2号横穴墓実測図(1)	124
第92図	D区2号横穴墓実測図(2)	125
第93図	D区出土土器(1)	129
第94図	D区出土土器(2)	130
第95図	D区出土土器(3)	131
第96図	D区出土土器(4)	132
第97図	D区2号横穴墓内出土土器(1)	133
第98図	D区2号横穴墓内出土土器(2)及び遺物(1)	134
第99図	D区2号横穴墓内出土遺物(2)	135
第100図	D区2号横穴墓内出土遺物(3)及びD区出土古銭	139
第101図	E区遺構分布図	141
第102図	F区遺構分布図	142
第103図	F区土器出土状況実測図	144
第104図	E区土器実測図	141
第105図	F区祭祀状遺構実測図	142
第106図	F区SC1実測図	143
第107図	F区SC2実測図	143
第108図	F区SC3実測図	143
第109図	F区SC4実測図	143
第110図	F区SC5実測図	144
第111図	F区近世墓1検出状況実測図	146
第112図	E区近世墓2検出状況実測図	146
第113図	E区近世墓3~6検出状況実測図	146
第114図	E区近世墓(1)	147
第115図	E区近世墓(2)	148
第116図	E区近世墓(3)	149
第117図	E・F区出土土器(1)	151
第118図	E・F区出土土器(2)及び石	152
第119図	E・F区出土陶磁器(1)	153
第120図	E・F区出土陶磁器(2)	154
第121図	E・F区出土陶磁器(3)	155
第122図	E・F区出土陶磁器(4)	156
第123図	E・F区出土陶磁器(5)	157
第124図	E・F区出土陶磁器(6)	158

第125回	E・F区出土陶磁器(7)	159
第126回	E・F区出土陶磁器(8)及び遺物(1)	160
第127回	E・F区出土遺物(2)	161
第128回	E・F区出土遺物(3)	162
第129回	E・F区出土遺物(4)	163

## 表 目 次

第1表	A区出土骨藏器及び和鏡觀察表	41
第2表	A区出土土師器觀察表	41
第3表	A区出土須惠器觀察表	42
第4表	A区出土陶磁器觀察表	42
第5表	A区出土古銭計測表	42
第6表	A区空風輪法量表(1)	62
第7表	A区空風輪法量表(2)	63
第8表	A区相輪法量表	63
第9表	A区相輪の空風輪法量表	63
第10表	A区火輪法量表	64
第11表	A区水輪法量表	65
第12表	A区地輪法量表	66
第13表	A区板碑法量表	67
第14表	A区復元板碑法量表	67
第15表	B区掘建柱建物跡一覽表	73
第16表	B区出土土師器觀察表(1)	89
第17表	B区出土土師器觀察表(2)	90
第18表	B区出土土師器觀察表(3)	91
第19表	B区出土土師器觀察表(4)	92
第20表	B区出土土師器觀察表(5)	93
第21表	B区出土土師器觀察表	94
第22表	B区出土陶磁器觀察表	94
第23表	B区出土遺物觀察表	94
第24表	C区出土土師器觀察表(古墳時代)	99
第25表	C区出土陶磁器觀察表(1)	106
第26表	C区出土陶磁器觀察表(2)	107
第27表	C区出土焙烙觀察表	108
第28表	C区出土土師器觀察表(近世)	108
第29表	C区出土瓦器觀察表	108
第30表	C区出土古銭計測表	108
第31表	D区出土土師器觀察表	136
第32表	D区2号横穴墓内出土土師器觀察表	137
第33表	D区2号横穴墓内出土鉄鏃觀察表	138
第34表	D区2号横穴墓内出土鉄製品觀察表	138
第35表	D区2号横穴墓内出土装身具計測表	139
第36表	D区出土古銭計測表	139
第37表	E・F区近世墓法量表	149
第38表	E・F区出土土師器觀察表	164
第39表	F区祭祀状遺構出土土師器觀察表	164
第40表	F区祭祀状遺構出土石計測表	164

第41表	E・F区出土陶磁器観察表(1)	165
第42表	E・F区出土陶磁器観察表(2)	166
第43表	E・F区出土陶磁器観察表(3)	167
第44表	E・F区出土瓦質土器観察表	167
第45表	E・F区出土土器観察表	168
第46表	E・F区出土焙塔観察表	168
第47表	E・F区出土遺物観察表	168
第48表	E・F区出土古銭計測表	168
第49表	宮崎県および鹿児島県出土の焼骨	231

## 図 版 目 次

巻頭図版1	迫内遺跡全景	
巻頭図版2	石塔群全景、磨崖板碑、移設した板碑	
図版1	迫内遺跡全景、D区低丘陵部	181
図版2	発掘調査前の状況、A区石塔群検出及び作業状況	182
図版3	A区石塔群全景、Iaグループ及びIIaグループ	183
図版4	A区蔵骨器及び和鏡検出状況	184
図版5	B I区全景、B区SB1~3完掘状況、SB4・5検出及び完掘状況、磨崖板碑全景	185
図版6	B区磨崖板碑、横穴状遺構及び壁面、C区SE3・4検出状況、掘り込み状遺構検出状況	186
図版7	C区掘り込み状遺構完掘状況、D区発掘調査前の状況、1号古墳全景及び遺物出土状況	187
図版8	D区1号古墳遺物出土状況	188
図版9	D区土器埋設土坑完掘状況、2号・3号古墳全景	189
図版10	D区2号・3号土層断面、周溝内遺物出土状況	190
図版11	D区2号古墳溝内遺物出土状況	191
図版12	D区2号古墳溝内遺物完掘状況、主体部検出状況及び完掘状況、2号古墳と3号古墳の間の溝完掘状況	192
図版13	D区3号古墳主体部遺物出土状況及び検出状況、完掘状況、周溝内遺物出土状況	193
図版14	D区3号古墳溝内遺物出土及び完掘状況、1号横穴墓調査開始前の状況	194
図版15	D区1号横穴墓	195
図版16	D区2号横穴墓検出状況、閉塞石検出状況	196
図版17	D区2号横穴墓閉塞石及び玄室内検出状況	197
図版18	D区2号横穴墓玄室内の状況	198
図版19	D区2号横穴墓正面及び玄室内の状況、E・F区調査開始前及び完掘状況	199
図版20	E・F区遺物(中世)及び近世墓検出状況、完掘状況	200
図版21	F区土坑検出及び完掘状況	201
図版22	F区土坑検出及び完掘状況、遺物出土状況(古墳時代)、北側斜面の防空壕	202
図版23	A区石塔群(組み合わせ)①	203
図版24	A区石塔群(組み合わせ)②	204
図版25	A区石塔群(空風輪)③	205
図版26	A区石塔群(空風輪)④	206

図版27	A・B区石塔群（空風輪）⑤	207
図版28	A区石塔群（火輪）⑥	208
図版29	A区石塔群（火輪）⑦	209
図版30	A区石塔群（火輪）⑧	210
図版31	A・B区石塔群（火輪及び水輪）⑨	211
図版32	A区石塔群（水輪）⑩	212
図版33	A区石塔群（水輪及び地輪）⑪	213
図版34	A区石塔群（地輪）⑫	214
図版35	A区石塔群（地輪）⑬	215
図版36	A区石塔群（地輪）⑭	216
図版37	A区石塔群（地輪）⑮	217
図版38	A区石塔群（石製藏骨器及び板碑）⑯	218
図版39	A区石塔群（板碑）⑰	219
図版40	A・B区出土遺物	220
図版41	B・C区出土遺物	221
図版42	D区出土遺物①	222
図版43	D区出土遺物②	223
図版44	D区出土遺物③	224
図版45	D区出土遺物④、F区出土遺物	225
図版46	C・E・F区出土遺物	226
図版47	E・F区近世墓	227
図版48	A区復元した板碑	228
図版49	A区石塔群焼骨写真①	233
図版50	A区石塔群焼骨写真②	234
図版51	A区石塔群焼骨写真③	235
図版52	A区石塔群焼骨写真④	236



# 第I章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は平成元年2月に基本計画がなされ、西都～清武間については平成3年12月に整備計画路線となっている。西都～清武間は、平成5年11月に建設大臣から日本道路公団へ施工命令が出され、公団では平成6年から事業に着手している。その間、県教育委員会文化課では、平成3年度に西都～清武間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成7年度は文化課で、平成8年度からは、宮崎県総合博物館から分離・独立した宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

宮崎市大字富吉字迫内周辺の工事区には五輪塔の一部が確認され、寺があったとの地元の伝承により、遺跡名を「上園遺跡」とし発掘調査を行うことになった。本調査に先立って平成8年に確認調査を実施し、横穴状遺構、石塔群を確認した。発掘調査は調査対象面積を4,400㎡として、第1次調査を平成9年9月18日～平成10年3月12日、第2次調査を平成10年5月18日～平成11年3月31日まで実施した。

調査を進める中で、丘陵上に古墳、丘陵の裾部に新たに横穴墓が検出され、掘立柱建物跡に伴う造成面が確認された。なお、遺跡名を遺跡の性格やその推定範囲などから、平成10年度の第2次調査時から字名の「迫内遺跡」に変更している。

## 第2節 調査の組織

迫内遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長

岩切 重厚（平成9年度）

笹山 竹義（平成10～12年度）

岩切 正憲（平成13年度～）

文化課長

仲田 俊彦（平成9～11年度）

黒岩 正博（平成12年度～）

埋蔵文化財係長

北郷 泰道（平成9～11年度）

石川 悦雄（平成12年度～）

主査（調整担当）

柳田 宏一（平成9年度）

主任主事（調整担当）

重山 郁子（平成10年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

藤本 健一（平成9年度）

田中 守（平成10～11年度）

矢野 剛（平成12年度～）

副所長

岩永 哲夫（平成9年度、平成12年度～）

	江口 京子 (平成11年度)
	菊地 茂仁 (平成12年度～)
調査第一課長	面高 哲郎 (平成12年度～)
調査第一係長	面高 哲郎 (平成9～11年度、12年度兼務)
ク	谷口 武憲 (平成13年度～)
主 査 (調整担当)	菅付 和樹 (平成9～11年度)
主 査 (調査担当)	高山 富雄 (平成9年度)
主 査 (ク)	山田 洋一郎 (平成9～10年度)
主 査 (ク)	倉永 英季 (平成9～10年度)
主 査 (ク)	菅付 和樹 (平成10年度)
主 事 (ク)	橋本 英俊 (平成10年度)
主任主事 (ク・編集担当)	小山 博 (平成9～13年度)
主 査 (整理担当)	菅付 和樹 (平成9～11年度)
主 査 (ク)	倉永 英季 (平成12年度)
主任主事 (ク)	小山 博 (平成13年度)

なお、次の方々に調査及び報告書作成の指導・協力をいただいた。記して謝意を表したい。

柳沢一男 (宮崎大学教授)、藤澤典彦 (大谷女子大学教授)、田代都夫 (東国歴史考古学研究所長)、吉井敏幸 (天理大学教授)、家田淳一 (佐賀県立九州陶磁文化館)

### 第3節 遺跡の位置と環境 (第1図)

迫内遺跡は宮崎市大字富吉字迫内に所在する。富吉地区は宮崎市の中央部を流れる大淀川と支流である本庄川の合流する柳瀬町の上流の右岸に位置し、西は大淀川を境に高岡町に接する。遺跡は富吉地区を通る旧国道10号線と、大淀川の右岸に隣接する市道富吉小松線に挟まれた標高29mの低丘陵地と標高20mの低丘陵、その低丘陵の南側の裾野にある住宅地である。地元では江戸時代に寺が存在したとの伝承がある。また低丘陵の南斜面の竹林には五輪塔の一部が残っていた。遺跡の周辺には、古墳と中世城郭などが分布している。

#### 〔古墳時代〕

迫内遺跡のある大淀川下流域には高塚古墳や横穴墓が多数分布している。迫内遺跡の所在する富吉地区には、岩穴の前横穴墓群 (2基)、山下横穴墓が分布している。東方にある跡江台地には国指定史跡の生目古墳群があり、丘陵上に22基 (前方後円墳7基・円墳15基) と裾部に4基 (円墳) が残存している。また横穴墓も5基確認されており、地下式横穴墓も7基確認されている。更に周辺には迫田横穴墓 (宮崎市大塚町)、曾井横穴墓 (宮崎市大字恒久)、天神山横穴墓 (宮崎市大字大淀)、大淀川をはさんで対岸には城ヶ峰横穴墓群 (高岡町)、妙戸岩横穴墓 (宮崎市大字糸原)、七ツ坂横穴墓 (同)、岩坂横穴墓群 (同) が分布している。

## 〔古 代〕

迫内遺跡のある富吉地区に位置する友尻遺跡では、古代の水田跡が検出されている。また余り田遺跡では流路状の遺構と9世紀後半の土師器や多数の墨書土器が出土した。その他に9世紀後半頃の土師質土器の焼成遺構や土坑が検出された炭野遺跡や11世紀後半から12世紀前半頃の土壙墓が検出された八尾遺跡、古代から中世の遺物の出土した学頭遺跡が分布している。

## 〔中世以降〕

迫内遺跡の周辺には中世の石塔群や城跡が分布する。余り田遺跡では、五輪塔62基、板碑11基、石塔1基で構成される石塔群が確認された（現在は移転）。更に、14世紀後半以降の五輪塔、板碑など1,237基より構成される市指定史跡妙円寺石塔群が所在している。小村薬師堂では寛喜4年（1232）の銘をもつ五輪塔ほか六面石幢や層塔などが106基確認されている。末香寺跡では天文11年（1542）の銘をもつものを含む五輪塔65基、天正9年（1581）の銘をもつものを含む板碑35基が確認されている。中福良墓地は「日向の金石文」において天正10年銘のものを含む板碑4基が収録されているが、現在はその所在を確認できない。

中世山城としては、大字浮田に石塚城、高蟬城が、大塚町には蓬萊山城、大字有田に白糸城、対岸には大字糸原に倉岡城、大字瓜生野に竹篠城、今城、池内町に宮崎城が所在する。

## （参考文献）

- (1) 「宮崎県の地名」 【郷土歴史大事典 日本歴史地名体系】平凡社 1997年
- (2) 「宮崎県宮崎市池内所在池内横穴墓群発掘調査整理報告書」宮崎県教育委員会、池内横穴墓群調査整理委員会 1997年
- (3) 「余り田遺跡」【宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集】宮崎県教育委員会、1997年
- (4) 宮崎県教育委員会【宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ詳細編】 1991年



- |          |            |          |                 |           |
|----------|------------|----------|-----------------|-----------|
| 1 迫内遺跡   | 2 岩穴の前横穴墓群 | 3 山下横穴墓  | 4 生目古墳群         | 5 城ヶ鼻横穴墓群 |
| 6 妙戸岩横穴墓 | 7 セツ坂横穴墓   | 8 岩板横穴墓群 | 9 友尻遺跡          | 10 余り田遺跡  |
| 11 藤野遺跡  | 12 八尾遺跡    | 13 芋頭遺跡  | 14 妙円寺石塔群       | 15 小村兼師堂  |
| 16 末香寺跡  | 17 中福遺跡    | 18 石塚城   | 19 高蟬城          | 20 白糸城    |
| 21 倉岡城   | 22 竹篠城     | 23 今城    | 24 宮崎城          | 25 塚原遺跡   |
| 26 中別府遺跡 | 27 倉岡第二遺跡  | 28 町屋敷遺跡 | 29 内宮田・塚田・清田泊遺跡 |           |

第1図 迫内遺跡位置図 (1/50,000)

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 第1節 調査区の設定(第2図)

平成9年3月12日に1回目の確認調査が行われた。市道富吉小松線より北で大淀川の右岸にあたる箇所にてレンチを3カ所入れたが、遺構や遺物は確認されず、当初調査対象とされた大淀川右岸は除外された。平成9年5月12日～19日に2回目の確認調査が行われ、市道富吉小松線より南、旧国道10号線より北の箇所に8カ所トレンチを入れた。丘陵を境に北部では遺構や遺物が確認されず、調査対象から除外した。丘陵より南では、一部家屋の移転が終わっていないため、家屋のある南側を除いたが、東側の丘陵の裾部に石塔群、西側の丘陵に横穴が開いた状態で確認された。平成9年度の本調査では、石塔群が検出された丘陵の裾部を中心に調査を行った。平成10年度では、石塔群と丘陵部、前年度調査でできなかった南側を家屋の移転後調査した。この調査では新たに丘陵部の上部から古墳と西側の丘陵の下部から未開口の横穴墓を検出した。

なお、調査区をA～Fの7区に分け調査を行った。

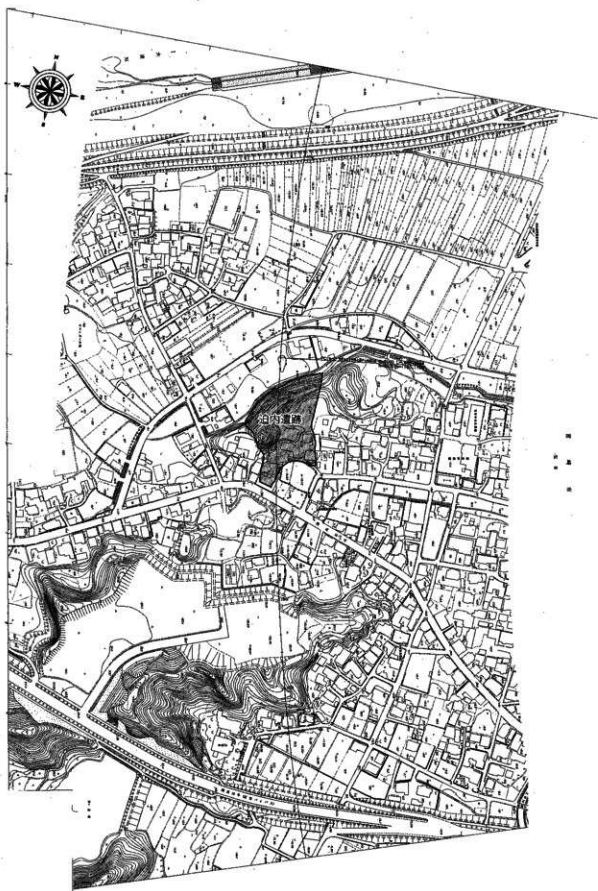
### 第2節 調査の概要(第3図)

先に述べたように、調査区を7区に分けて調査を行ったが、遺構としては古墳・横穴墓と中世の石塔群・掘立柱建物跡・磨崖板碑などが検出された。以下、それぞれについて概要を記すことにする。

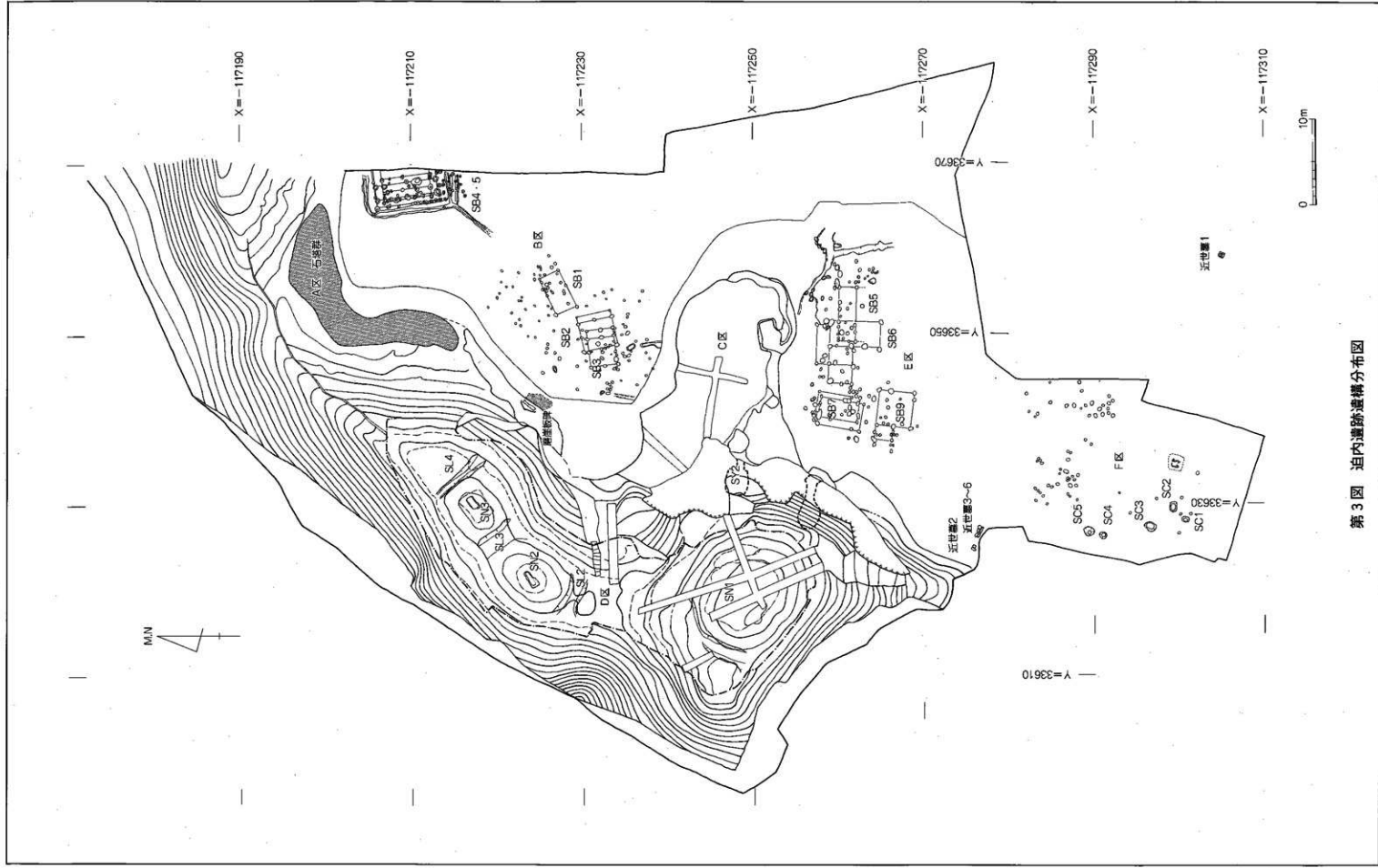
#### 古墳・横穴墓

西側の標高29mの丘陵頂上の北側で周溝とみられる溝が検出され、溝から須恵器片と土師器が出土した。溝の北側から墓前祭祀に使用されたとみられる須恵器の坏・壺の破片が出土した。そこでこの低丘陵を1号古墳とし、頂上部にトレンチを入れたが、丘陵の頂上は耕作のため削平されており、墳丘や主体部などは確認できなかった。頂上の東側から土師器の壺が埋没された状態で出土している。北側の標高20mの低丘陵の尾根部分に、鞍部を周溝で区切り、低墳丘と考えられる古墳が2基築かれていることが確認された。古墳は、西側から2号古墳と3号古墳で、2号古墳は長径9m・短径8mの楕円形状の円墳で、3号古墳は9m×8mの方墳である。地山整形とみられるが、墳丘部は崩落している。2号古墳と3号古墳は周溝で区画されており、溝内からは、4～5世紀のものと考えられる土師器が出土した。また3号古墳の主体部直上で土師器の高坏などが出土した。2号古墳の主体部は210cm×50cmの長方形であり、3号古墳の主体部は150cm×75cmの長方形で副葬品として鉄剣が1点出土している。

西側の丘陵の斜面からは横穴墓が2基検出された。1号横穴墓はすでに開口しており改変されていたが、2号横穴墓は未開口であった。1号横穴墓は開口していたため、遺物は残存していない。羨門部分に2段の飾り縁と考えられるものがある。天井はドーム状であり一部に工具痕が残存している。2号横穴墓は、東方向に開口する。閉塞は石閉塞で、上部は完全に塞がれておらず土砂が覆いかぶさっていた。玄室は妻入りで隅丸方形に近い平面プランを呈する。天井は寄せ棟で、幅約2cmの軒線が側壁から奥壁へ巡る。床面には排水溝が中央部と周囲の壁に沿って設けられており、中



第2圖 追内遺跡周辺地形圖 (1/2,000)



第3图 追内遺跡遺構分布图

央の溝は羨門中央部を経て前庭部まで延びている。床面には扁平な河原石を敷き詰め礎床としており、奥壁側にはやや大きい長楕円の石が使用されている。天井や羨門から土砂が流れ込んでおり人骨は残っていなかった。遺物は、玄室内で須恵器、土師器、鉄鏝などの鉄製品、耳環・玉などの装身具が出土している。

#### 石塔群・独立柱建物跡・磨崖板碑ほか

東西の丘陵地に挟まれた窪地にL字状のテラスを設け、五輪塔群が営まれていた。五輪塔は地輪を中心に45基検出し、3基または2基を単位とする配置である。テラスの中央を境に東西に板碑を伴う大型地輪3基がそれぞれ配置され、墓地の中心的人物の墓と考えられる。これらの大型地輪の周囲には、それぞれ地輪と水輪を伴う1～2基を単位とする小型の五輪塔が配置されていた。板碑はそれぞれ5本と7本が根本から折れた状態で検出した。ほとんど上部を欠損していたが、東側の7本のうち2本は上部が残っており接合復元した。出土遺物は、土師器の坏・皿類と西側の大型地輪の下から蔵骨器として使用された古瀬戸の瓶子、鋳物の茶釜がそれぞれ1点づつ出土し、その近くの土坑から和鏡が1面出土した。

石塔群の近くから独立柱建物3軒と磨崖板碑が検出された。4・5号独立柱建物跡は、基壇を造成し、雨落ち溝が巡る建物で、調査では建物の半分が検出された。規模は推定であるが3間ないし4間×4間の大きさである。土師器の坏や皿の破片が造成土の中に含まれ、また柱穴からも土師器の坏・皿が出土した。石塔群（墓地）に近く、祭祀や供養のための施設と考えられる。また、全長17.5m、高さ4.5mの宮崎層群の岩盤にひな壇を造り出し、板碑を7本浮き彫りにした磨崖板碑が検出された。雨水を切るためか、あるいは覆い屋などの施設のためのものか溝が彫られていた。その下には高さ0.9m、幅0.65m、奥行き2.5mの横穴状の遺構が確認された。その入り口の前面から河原石と五輪塔の一部が検出された。これらの遺構は石塔群（墓地）に関連する施設と考えられる。



## 第二章 調査の記録

### 第1節 A区の調査

#### 1. 調査の概要(第4・5・9図)

A区は本遺跡の北側に位置する。北西部の標高20mの低丘陵と北東側に広がる丘陵に挟まれた南側の斜面に、L字状のテラスを造成し、石塔群が営まれていた(第5図)。このテラス部は東端、南端を造成することにより拡張し、墓域を拡げた状況が伺える。検出時には、五輪塔を構成する空風輪、火輪、水輪が散乱していたが、調査により地輪のほとんどは動いておらず原位置であることが確認された。一部、水輪と地輪の組み合わせが残っていることも確認された(第4図)。また、大型地輪の配置された2カ所から板碑の基部が5本と7本とままとめて立てられていることなども確認された。最終的に空風輪61基、火輪25基、水輪33基、地輪57基、板碑13基が検出された。

石塔群は、地輪と板碑の配置及び墓道、地山整形面などにより、2つの群で構成されていることが考えられる(第9図)。出土した遺物は、蔵骨器として転用された古瀬戸の瓶子と鋳物の茶釜が各1点、副葬品と考えられる和鏡が1点、土師器の坏・皿がそれぞれ出土している。遺物の年代より、石塔群はおおむね14世紀～16世紀後半まで継続的に造営されたものと考えられる。

#### 2. A区における層序(第6図)

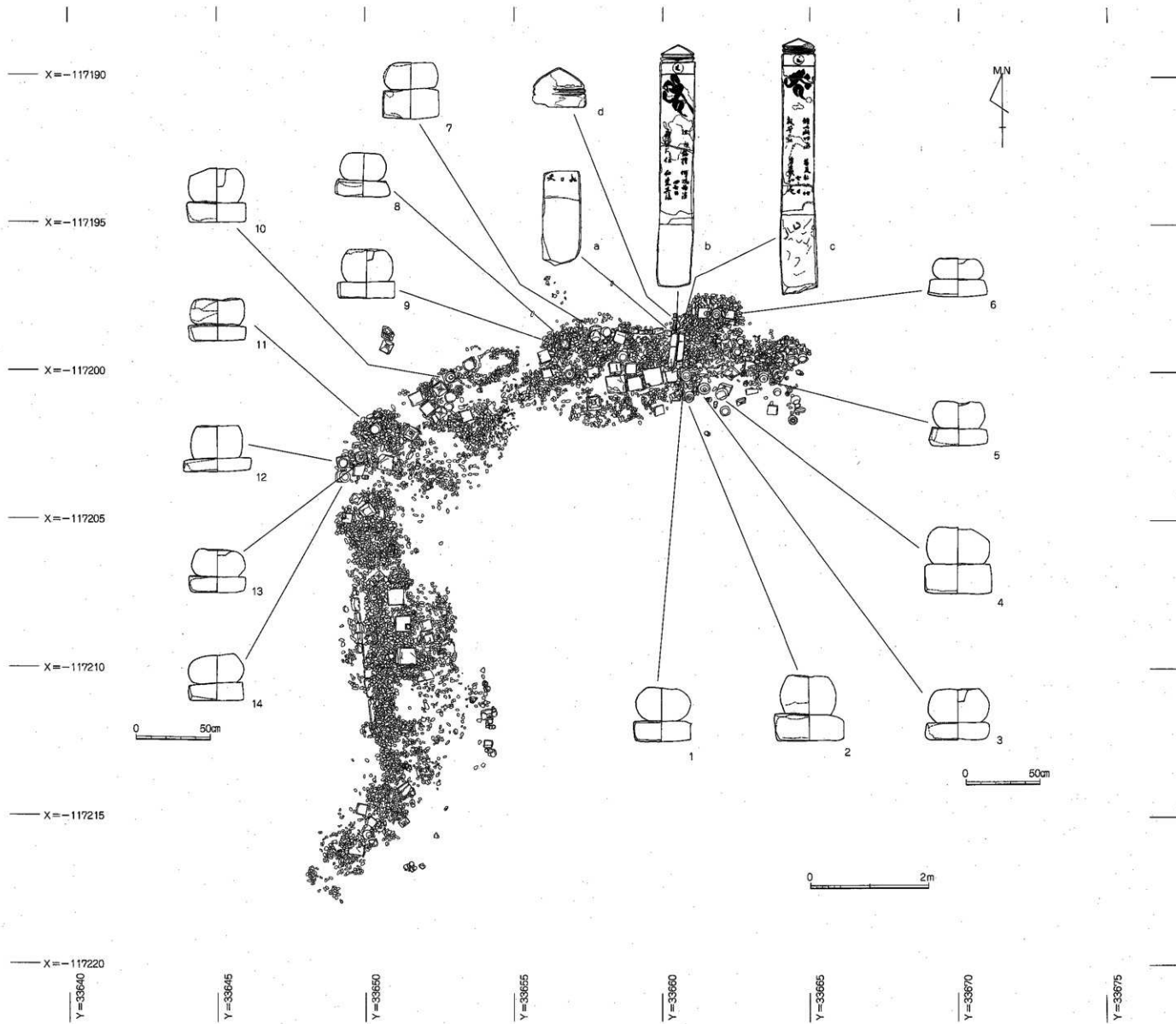
第6図は石塔群の東端と南端のベルトの土層断面である。石塔群の東端に位置するベルトの断面を観察すると、地山が露出しており、造成土と考えられる第1層が下方に流れ込んでいる。地山を削り、造成土で平坦面を造り出していたと考えられるが、雨水などにより造成土が崩落したものとみられる。石塔群の南端に位置するベルトの断面を観察すると、第1～第3層は、地山の砂岩を含んでいることから造成土と考えられる。特に第3層の上面に河原石が置かれていたことから、地山を掘削し、土を盛って平坦面を造り出し、その上に河原石を敷いたことが考えられる。造成した土は、石塔群が破壊されたか、埋没していくなかで崩落していったものと推定される。

#### 3. A区における中世墓と遺物

##### (1) 石塔群

##### 概要(第7～8図)

石塔群はL字状のテラスに、2ないし3基の五輪塔を単位に配置されている。地輪の配置をみると、一辺約55～65cmの大型地輪2基とその間にある一辺が約40～50cmの地輪3基の組み合わせが、2カ所あり、それぞれの背後には板碑の基部が5本・7本とままとめて立っている。このことから3基の大型地輪の組み合わせが石塔群の中心と考えられる。また、石塔群の中央部に河原石の無い空間があり、墓を区画する空間か墓道と考えられる。これらのことから、3基の大型地輪の配置されている2カ所を中心にして、大まかに2つのグループに分けることができる。以下各群について詳細に述べていく。

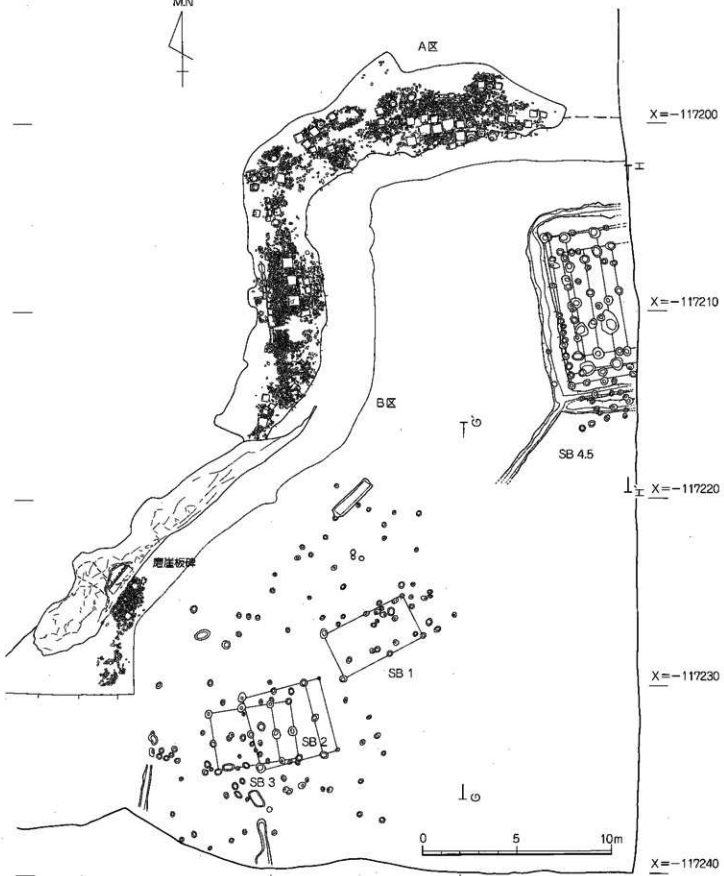


第4図 石塔群検出状況及び石塔配置図

X=33640

X=33650

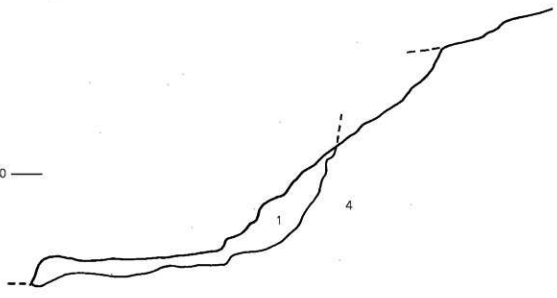
X=33660



第5図 A・B区 遺構分布図

15.0 A A' 15.0m

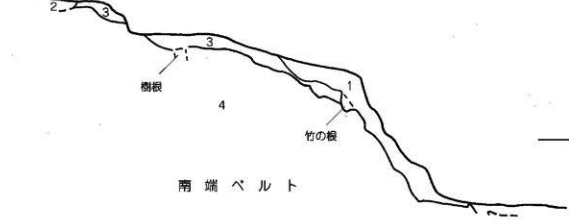
10.0



東端ベルト

13.9 B B' 13.9m

11.9m



南端ベルト

(注)

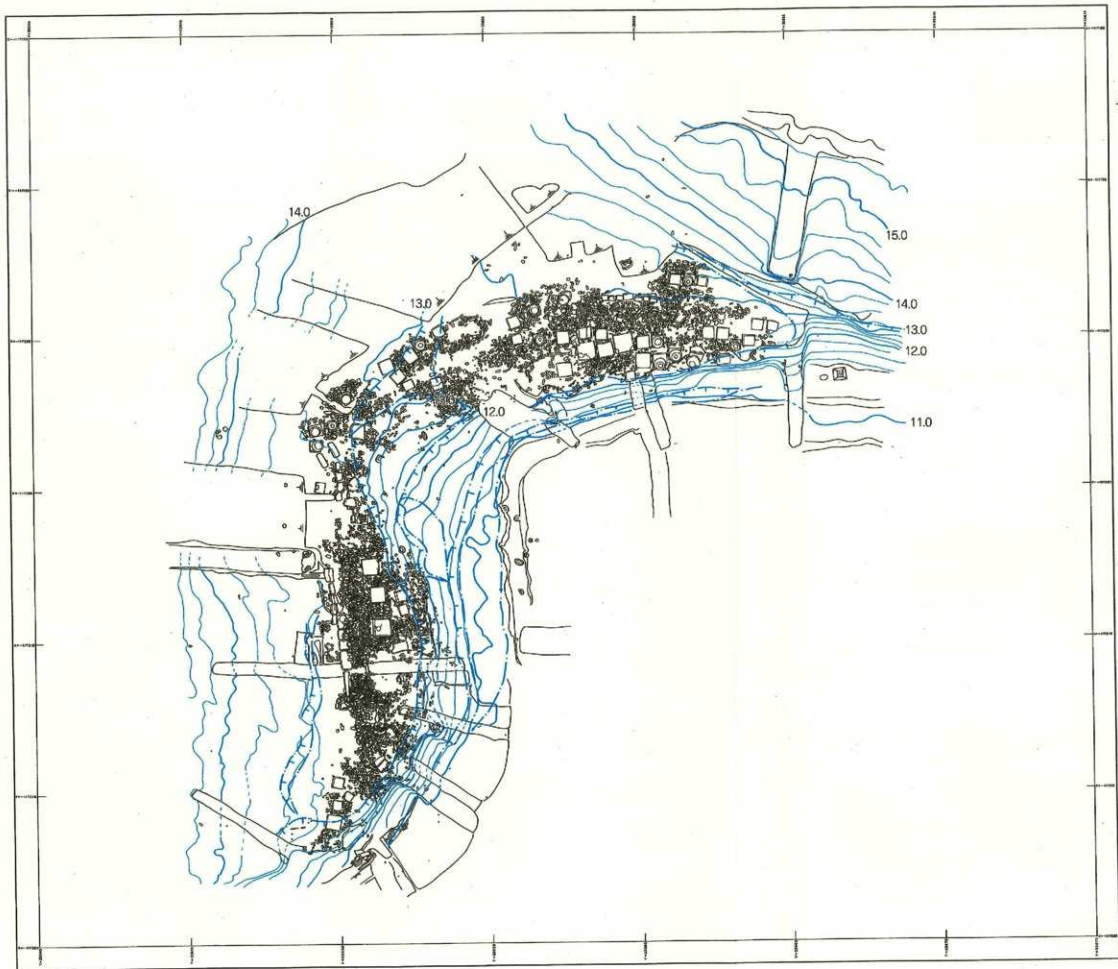
- 1 暗褐色土 (Hue 10YR 3/2) やわらかくさらさらしている。  
2mm~1cm大の地山の砂岩を多く含む。
- 2 黒色土 (Hue 10YR 2/1) やわらかくさらさらしている。粘性はない。  
1~2mm大のスコリアを少量含む。地山の砂岩を少量含む。
- 3 褐色土 (Hue 10YR 4/4) やわらかくや粘性がある。  
5mm~3cm大の地山の砂岩を多く含む。
- 4 黄褐色土 (Hue 2.5YR 5/4) 地山



第6図 A区 ベルト土層断面図 (S=1/50)



第7图 A区 地輪配置图



第8図 A区 石塔群コンタ図



第9図 A区 石塔群グループ

## Iグループ (第10図)

Iグループは石塔群の東側に位置し、水輪と地輪の組み合わせが10基、地輪のみが26基、板碑の基部が8本から成る。丘陵の裾部の地山または平場の黒色土に造成土でテラス部を造り出し、石塔群を配置している。一部崩落している箇所があり、石塔群に影響を与えている(第10図)。地輪の位置と密集度、河原石の広がりからIグループをさらに2つの小グループに分けることができる。便宜上、I aグループとI bグループとに分けて述べていくことにする。

### I aグループ (第11図)

I aグループは、Iグループの中央部から東端に位置する。検出時には、東端に火輪・水輪が積み重なっており、空風輪も散乱していた。ほぼ中央部では2本の板碑が背面を上にして倒れており、板碑の頂部も1基転がっていた。移動している五輪塔や河原石を取り除いたところ、水輪と地輪の組み合わせ9基と地輪のみの20基がほぼ原位置にあることがわかった。ほぼ中央に位置する1辺約65cmの大型地輪2基とその間にある1辺約50cmの地輪の3基を中心に、小型地輪が2～3基の単位で集中している。背後には板碑の基部が7本立っており、また河原石に埋もれた状態で板碑の基部が1基出土した。以下、原位置にある地輪などを、便宜上、地輪の並び方により遺構番号を振り分け、それぞれについてみていくことにする。

遺構1は、地輪2基の配置である。検出時は、火輪や水輪が積み重ねられており、それらと動いていると考えられる河原石を取り除いたところ、地輪が2基並んでいることが確認された。地輪の下には河原石は無かったが、骨粉が検出された。地輪を直接造成面に設置し、その周囲に河原石を敷いている。これらの状況から2基の単位と考えられる。なお、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

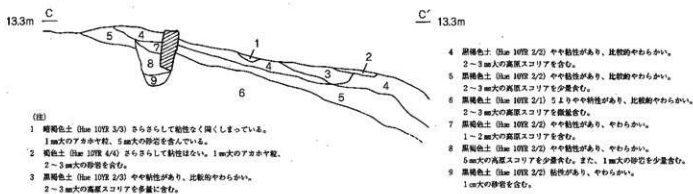
遺構2は、地輪1基と地輪と水輪の組み合わせ1基の合計2基の配置である。造成面の崩落の影響により地輪の位置がずれている。地輪の下から河原石がまばらな状態で検出されたことから、河原石などで造成した後、地輪を設置し周囲に河原石を敷いている。2基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構3は、地輪2基の配置である。造成面の崩落の影響で傾斜地である。地輪の下から河原石がまばらな状態で検出されたことから、河原石を敷きその上に地輪を設置し、河原石を敷いている。2基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構4は、地輪1基と水輪と地輪の組み合わせ1基の合計2基の配置である。造成面の崩落の影響を直接受けており、原位置から少なからず動いていると考えられる。地輪の下には河原石などは確認されなかったことから、造成面に直接地輪を設置し、その周囲に河原石を敷いている。2基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構5は、地輪1基と地輪と水輪の組み合わせ2基の合計3基の配置である。地輪下から河原石が検出され、ある程度同じレベルで並んでいることから、造成面に河原石を敷き詰め、その上に地輪を設置し周囲に河原石を敷いている。3基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

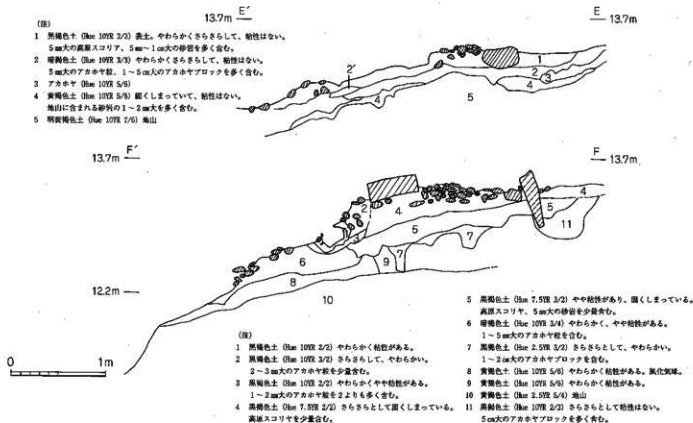




(注)

- 1 暗褐色土 (土名 10YR 3/3) さらにさらして粘性なく固くしまっている。1mm大のアカハヤ粒、5mm大の砂岩を含んでいる。
- 2 暗色土 (土名 10YR 4/4) さらにさらして粘性はない。1mm大のアカハヤ粒、2~3mm大の砂岩を含む。
- 3 黒褐色土 (土名 10YR 2/3) やや粘性があり、比較軟やわらかい。2~3mm大の高原スコリアを多量を含む。
- 4 黒褐色土 (土名 10YR 2/2) やや粘性があり、比較軟やわらかい。2~3mm大の高原スコリアを含む。
- 5 暗褐色土 (土名 10YR 2/2) やや粘性があり、比較軟やわらかい。2~3mm大の高原スコリアを少量含む。
- 6 黒褐色土 (土名 10YR 2/1) よりやや粘性があり、比較軟やわらかい。2~3mm大の高原スコリアを微量含む。
- 7 黒褐色土 (土名 10YR 2/2) やや粘性があり、やわらかい。1~2mm大の高原スコリアを含む。
- 8 黒褐色土 (土名 10YR 2/2) やや粘性があり、やわらかい。5mm大の高原スコリアを少量含む。また、1mm大の砂岩を少量含む。
- 9 黒褐色土 (土名 10YR 2/2) 粘性があり、やわらかい。1cm大の砂岩を含む。

第10図 A区 Iグループ土層断面図 (S=1/40)



(注)

- 1 黒褐色土 (土名 10YR 2/3) 表土、やわらかくさらさらして、粘性はない。5mm大の高原スコリア、5mm~1cm大の砂岩を多く含む。
- 2 暗褐色土 (土名 10YR 3/3) やわらかくさらさらして、粘性はない。1~5mm大のアカハヤ粒、1~5mm大のアカハヤブロックを多く含む。
- 3 アカハヤ (土名 10YR 5/6)
- 4 黄褐色土 (土名 10YR 5/6) 固くしまっていて、粘性はない。地中に含まれる砂岩の1~2mm大を多く含む。
- 5 明黄褐色土 (土名 10YR 7/6) 地山

(注)

- 1 黒褐色土 (土名 10YR 2/2) やわらかく粘性がある。
- 2 黒褐色土 (土名 10YR 3/2) さらにさらして、やわらかい。2~3mm大のアカハヤ粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 (土名 10YR 2/2) やわらかくやや粘性がある。1~2mm大のアカハヤ粒を2よりも多く含む。
- 4 黒褐色土 (土名 7.5YR 2/2) さらにさらして固くしまっている。高層スコリアを少量含む。
- 5 黄褐色土 (土名 7.5YR 3/2) やや粘性があり、固くしまっている。高層スコリア、5mm大の砂岩を少量含む。
- 6 暗褐色土 (土名 10YR 3/4) やわらかく、やや粘性がある。1~5mm大のアカハヤ粒を含む。
- 7 黒褐色土 (土名 2.5YR 3/2) さらにさらして、やわらかい。1~2mm大のアカハヤブロックを含む。
- 8 暗褐色土 (土名 10YR 5/6) やわらかく粘性がある。炭化灰。
- 9 黄褐色土 (土名 10YR 5/6) やわらかく粘性がある。
- 10 黄褐色土 (土名 2.5YR 5/4) 地山
- 11 黒褐色土 (土名 10YR 2/2) さらにさらして粘性はない。5cm大のアカハヤブロックを多く含む。

第14図 A区 IIグループ土層断面図 (S=1/40)

遺構6は、地輪1基の配置である。造成面の崩落の影響を受けている。地輪下から河原石が検出され、河原石などで造成した面に地輪を配置し、周囲に河原石を敷いている。1基単独と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構7は、地輪1基と地輪と水輪の組み合わせ1基の合計2基の配置である。地輪の下には河原石が密に敷かれており、造成面に河原石を密に敷き詰めその上に地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。2基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構8は、地輪3基の配置である。地輪の下には河原石が密に敷かれており、造成面に河原石を密に敷き詰めその上に地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。3基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構9は、地輪3基の配置である。東側の2基と西側の1基の間に河原石が無いことから東側2基が1つの単位と考えられる。西側の1基は、近くの遺構11と2基の単位である可能性が高い。地輪下から河原石が検出され、河原石などで造成した面に地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構10は、地輪1基の配置である。地輪下から河原石がまばらな状態で検出され、河原石などで造成しその面に直接地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。1基単独と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構11は、地輪と水輪の組み合わせ1基の配置である。地輪下から河原石が検出され、河原石などで造成し、河原石を敷き詰めその上に地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構12は、地輪2基の配置である。地輪下より河原石が検出され、河原石などで造成し、その造成面に直接地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。2基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構13は、地輪と水輪の組み合わせ1基の配置である。地輪下から河原石は検出されず、造成面に直接地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。1基単独と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

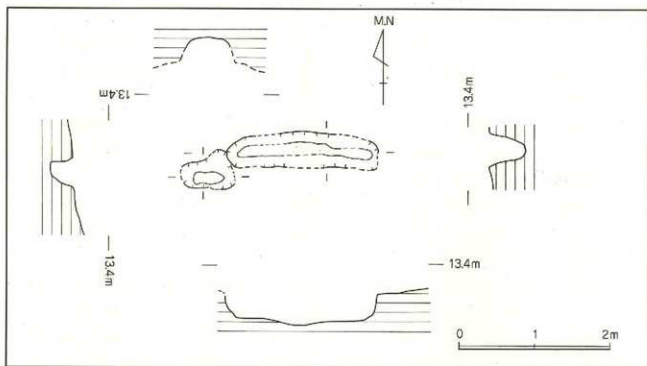
遺構14は、地輪と水輪の組み合わせ1基の配置である。地輪下から河原石は検出されず、造成面に直接地輪を設置している。1基単独と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構15は、地輪2基と地輪と水輪の組み合わせ1基の合計3基の配置である。地輪下から河原石などは検出されず、造成面に直に地輪を設置している。3基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

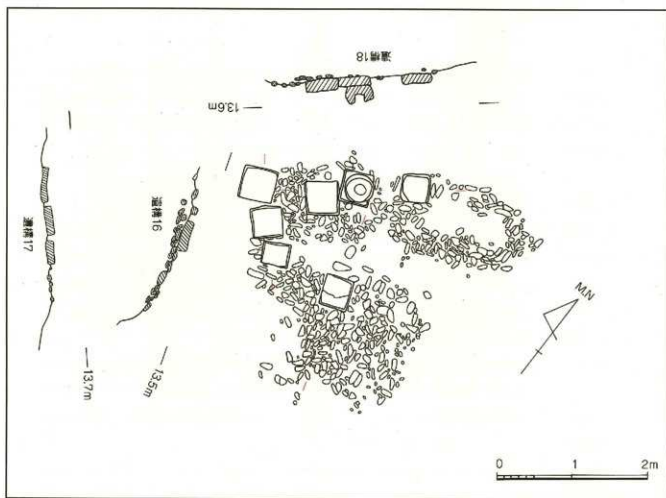
その他に、幅約38cmの板碑の基部1基と幅約35cmを中心に幅約24～26cmの板碑の基部が3基ずつ合計7本並んだ状態で検出された。7本の板碑の基部のうち東側の3本の板碑の基部で、2本が上部が倒れた状態で検出され、墨書が明瞭に残っていた。残り1基にも墨書が残っていた。板碑を設置するための掘り込みが確認され（第12図）、切り合い関係から最初に幅約38cmの板碑が1本設置され、その後7本の板碑が設置されたと考えられる。



第11図 A区 Iaグループ平面図及び断面図



第12図 A区 Iグループ板碑掘り込み面



第13図 A区 Ibグループ平面図及び断面図

## I bグループ (第13図)

I bグループは、Iグループの西端に位置する。水輪と地輪の組み合わせが1基で、地輪のみが6基から成る。以下、原位置にある地輪などを、便宜上、地輪の並び方により遺構番号を振り分け、それぞれについてみていくことにする。

遺構16は、地輪1基の配置である。地輪下に河原石が密に敷かれており、造成面に河原石を敷き詰めその上に地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。1基単独と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構17は、地輪3基の配置である。地輪下からは河原石は検出されなかった。造成面に直接地輪を配置し、周囲に河原石を敷き詰めている。3基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構18は、地輪2基と地輪と水輪の組み合わせ1基の合計3基の配置である。地輪の配置から西側の2基は1つの単位と考えられ、残り1基の地輪は河原石の広がりを見ると、中央に河原石が無い空間があり、この場所に地輪が配置されていたと推定できる。地輪の大きさから少なくとも2基の配置が考えられ、地輪3基の単位と考えられる。地輪下から河原石がまばらに検出され、河原石などで造成した面に地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

## IIグループ

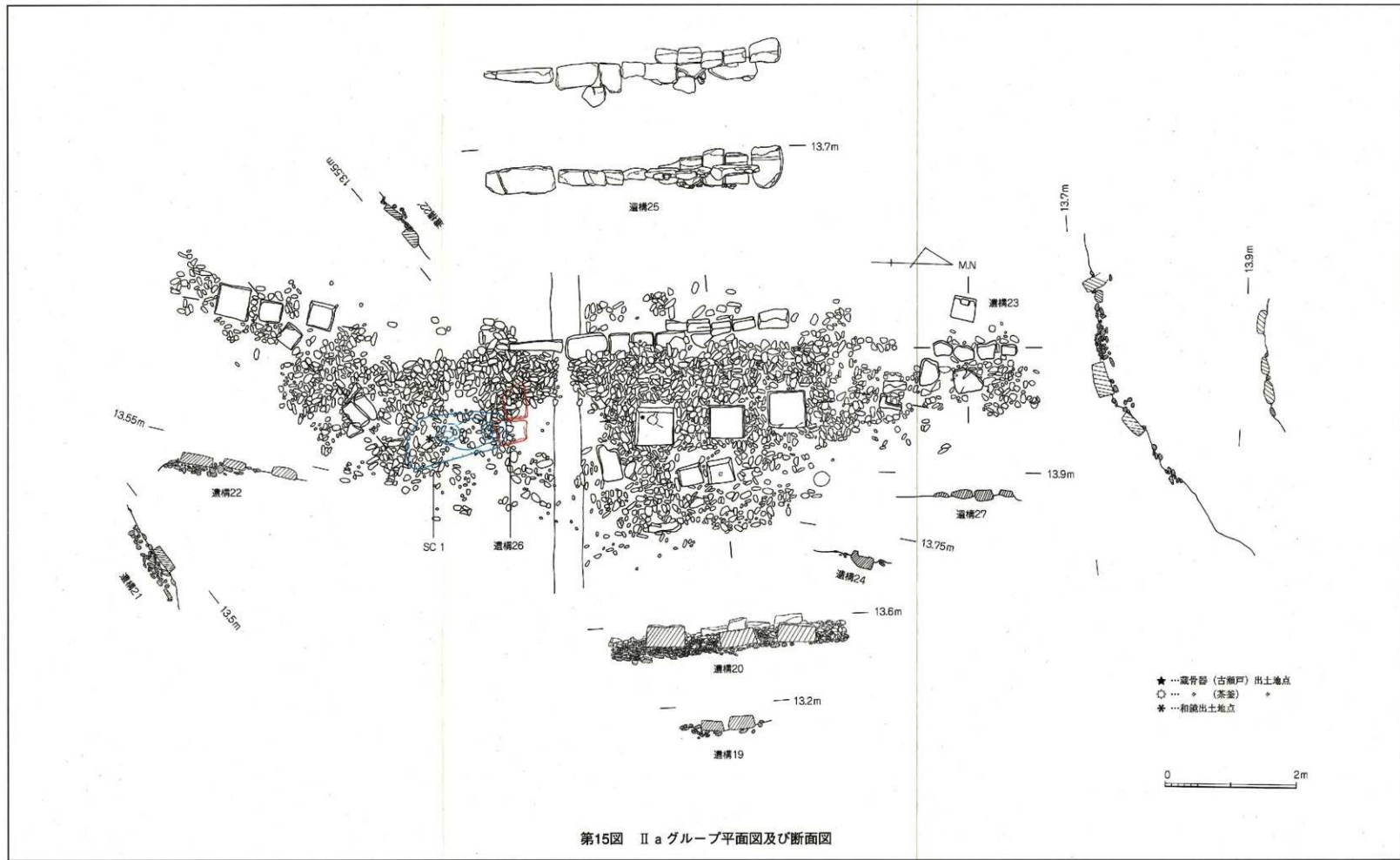
IIグループは、石塔群の西南部に位置し、地輪と水輪の組み合わせ4基と地輪のみの11基から成る。第14図はIIグループの土層断面である。地山を削り造成土でテラス部を造り出し、五輪塔を配置している。地輪の位置と密集度、河原石の広がりからIIグループをさらに2つの小グループに分けることができる。便宜上、II aグループとII bグループとに分けて述べていくことにする。

## II aグループ (第15～22図)

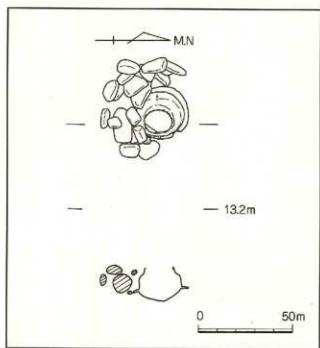
II aグループは、IIグループの南部に位置し、地輪のみ10基と板碑の基部5基、火輪1基、石製蔵骨器1基から成る(第15図)。1辺が約50～60cmの大型地輪3基とその手前の一辺が約37cmの地輪2基を中心とし、その背後に板碑の基部が5本、その他加工痕のある石造物が区画のためか設置されている。また土坑が2基検出された。以下、原位置にある地輪などを、便宜上、地輪の並び方により遺構番号を振り分け、それぞれについてみていくことにする。

遺構19は、地輪2基の配置である。北側の地輪下より蔵骨器と考えられる鉢物の茶釜が1点出土した(第16図)。掘り込みは確認できなかったが、茶釜を直接埋めて地輪で蓋をしていた。残りの1基の地輪下より河原石が検出され、河原石などで造成しその造成面に地輪を設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。2基の単位と考えられる。

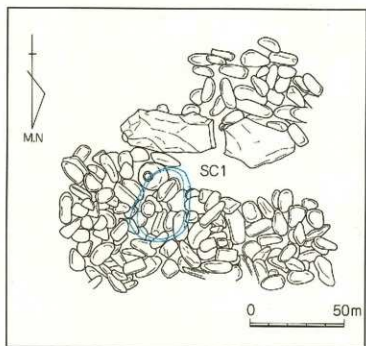
遺構20は、1辺が約50～59cmの大型地輪3基の配置である。南端の地輪下から蔵骨器である古瀬戸の瓶子が1点出土した。河原石を取り除くと掘り込み面が確認でき、長径40cm×短径30cmの楕円形の土坑に瓶子が据えられ、河原石で固定していることが確認された。瓶子には蓋はなく、河原石



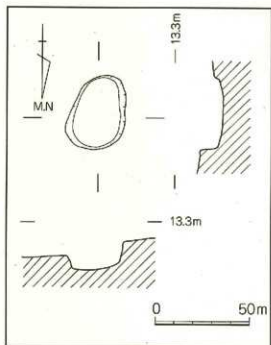
第15図 II a グループ平面図及び断面図



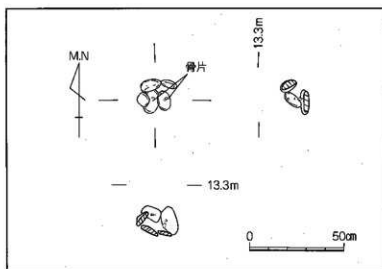
第16图 A区 茶釜検出状況



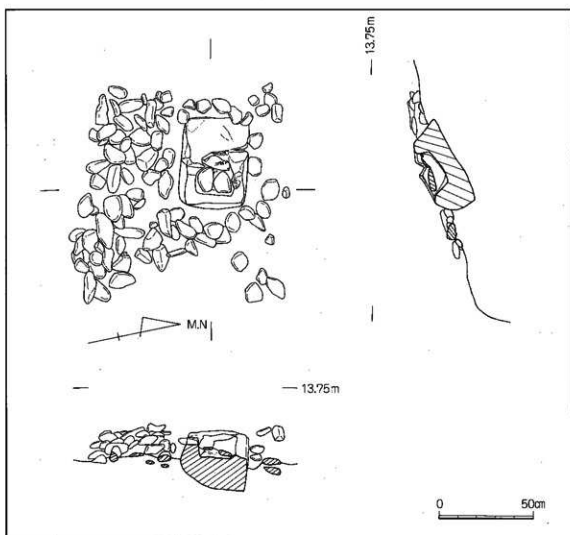
第17图 A区 藏骨器出土状況



第18图 A区 SC1 实测图

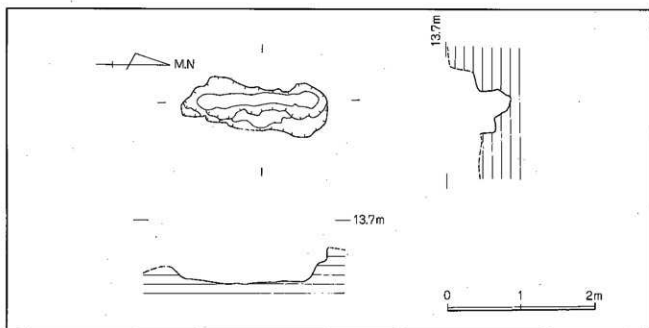


第19図 A区 石組み蔵骨器検出状況

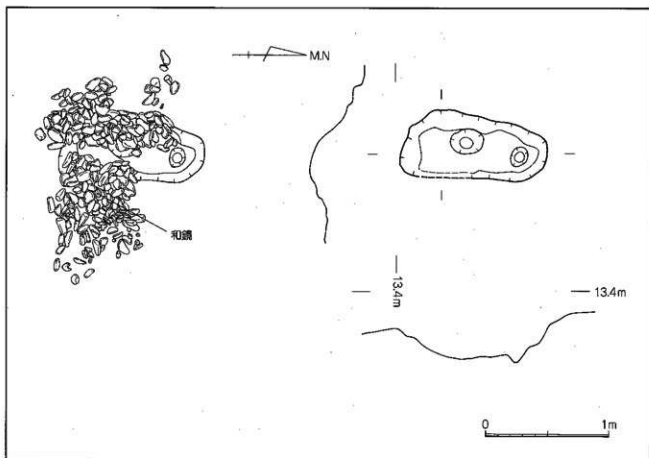


第20図 A区 石製蔵骨器検出状況





第21図 A区 IIグループ板碑掘り込み面



第22図 A区 和鏡検出状況及びSC2実測図

が蓋として用いられており、大きさは約30cmの凝灰岩が2個地輪下に設置されていることも確認された(第17・18図)。また、中央の地輪下からは骨片が多量に検出され、一辺が10cmほどの河原石を組み合わせて蔵骨器として使用していることも確認された(第19図)。地輪下からは河原石が敷き詰められた状態で検出され、造成面に河原石を敷き詰め、その上に地輪を配置し、周囲に河原石を敷き詰めている。3基の単位と考えられる。

遺構21は、地輪1基の配置である。中央部で割れており、竹の根が多く、影響を受けている。地輪下から河原石が検出され、造成面に河原石を敷き詰め地輪を配置し、周囲に河原石を敷き詰めている。1基単独と考えられるが移動している可能性もある。土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構22は、地輪3基の配置である。中央の地輪の前にある石塔は、火輪がひっくり返っていることが確認された。この火輪は地輪に転用した可能性もあるが、下部から河原石なども確認できず、周囲にも河原石の広がりが見られないことから、何らかの原因で火輪がひっくり返ったと考えられる。地輪下から河原石が検出された部分と検出されなかった部分があり、河原石などを用いて造成し、その造成面に地輪を設置し河原石を敷き詰めている。3基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構23は地輪1基であるが、地輪下からは河原石などは検出されず、周囲に河原石もみられないことから、地輪が移動している可能性が高い。

遺構24は、石製の蔵骨器である。検出時にはすでに2つに割れていた。中央部に22cm×20cmの窪みがあり、河原石で蓋をした状態で検出された(第20図)。骨粉とみられる白色の粉と炭化物が中央の窪みで観察された。下部からは河原石は検出されず、造成面に直に設置している。

遺構25は、板碑と区画のために設置されたと考えられる凝灰岩の石造物の配石遺構である。板碑は上部が欠損し基部のみであるが、幅約30～46cmの凝灰岩を加工しており、うち1本に陰刻されているが判別できない。板碑を設置するための掘り込み面が確認され(第21図)、板碑は5本まとめて設置されたと考えられる。

遺構26は、遺構20の南側の河原石が密集していた箇所、河原石を散り除いたところ検出された。凝灰岩であるが風化が激しく、器種は不明であるが板碑などの石造物が墓地の造り替えなどで埋められたとも推測できる。

遺構27は、配石遺構である。検出時は河原石が一面に敷かれており、それらを取り除いたところ、凝灰岩が並んだ状態で検出された。この配石遺構については性格は不明である。

その他に、遺構26の近くで和鏡が出土し、その箇所を精査したところ、長軸1.5m、短軸0.7mの長方形の土坑が検出された(第22図)。深さは浅く底部に2つのピットがある。埋土は、褐色土と河原石が入り込んでいた。和鏡は副葬品と見られることから、土壌墓であった可能性が高い<sup>(1)</sup>。近くに遺構21の地輪があり移動している可能性があることから、この土坑の上面に五輪塔が配置されていたと推定される。

## II b グループ (第23図)

II b グループは、II グループの北部に位置し、地輪と水輪の組み合わせ4基と地輪のみ1基の合計5基から成る。

遺構28は、地輪の1基の配置であり、地輪下から河原石などは検出されなかった。造成面に直接設置しているか、移動している可能性もある。土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構29は、地輪と水輪の組み合わせ3基の配置である。地輪下から河原石などは検出されず、地輪を直接造成面に設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。3基の単位と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

遺構30は、地輪と水輪の組み合わせ1基の配置である。地輪下から河原石などは検出されず、地輪を直接造成面に設置し、周囲に河原石を敷き詰めている。1基単独と考えられるが、土壌などの遺構や蔵骨器は検出されなかった。

## (2) 出土遺物 (第24~26図)

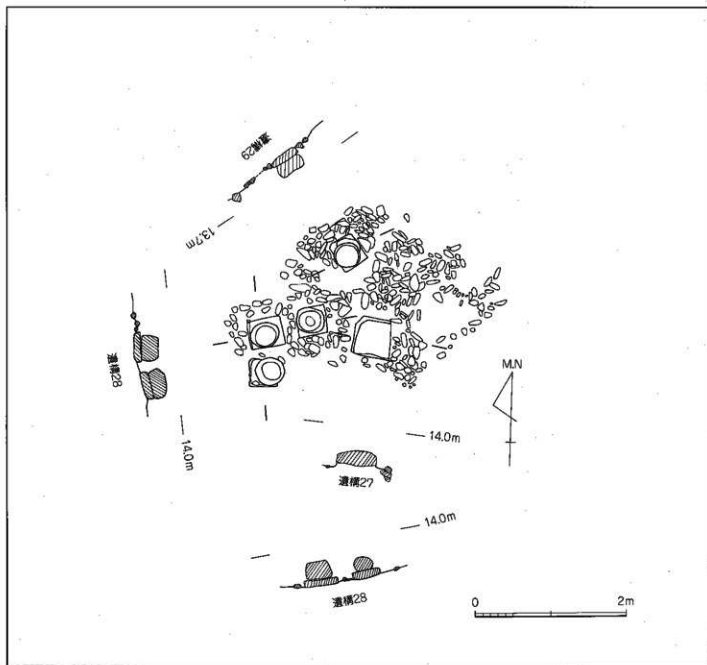
A区からは石塔群に関連する中世の遺物と多量の石塔類、その他に古代の遺物、近世以降の陶磁器類や貨幣が出土している。これらのものを以下使用目的及び器種ごとに分け説明を行っていくことにする。

### ①蔵骨器及び副葬品について (1~4)

石塔群からは、蔵骨器として陶器製1点、金属製1点、石製1点の合計3点と、副葬品と考えられる和鏡を1点確認した

1は完形の古瀬戸の瓶子である。IIグループの中心的な人物の墓と思われる3基の大型地輪のうち南端の地輪下から、直立に近い状態で出土した。瓶子の周囲は河原石で敷き詰められており、蓋は検出されなかったが河原石を用いたと考えられる。内部には焼骨が残っており(付論①参照)、蔵骨器として使用されていた。瓶子の形状は締り腰型で、粘土経輪積み成形で、頸部はロクロ成形されている。頸部はやや開きながら立ち上がり、端部は外側に折り返して頸部に密着させ、外面上方が浅く凹み、突帯状となっている。胴部の形状は、頸部下端からやや肩が張って膨らみ、下方にかけて直線的にすぼまる。胴部外面は、ヘラナデ調整されている。平底で底部外面は未調整で石痕が残る。頸部から肩部にかけては自然釉がみられるが剝離している。藤沢良祐氏の編年表<sup>12)</sup>によると、13世紀後半代と考えられる。

2は鍔物の茶釜である。IIグループの大型地輪の前方にあった小型地輪2基のうち南側の地輪の直下から出土した。地輪をはずすと茶釜の口が開いた状態であった。土壌は確認できなかったが、茶釜を土と河原石で固定し地輪で蓋をしていた。出土状況から蔵骨器とみられる。内部に土などが残っており、分析を行ったが骨は残っていなかった。形状については、体部は上膨らみの球形で、底部は平底である。口縁部は内傾気味に立ち上がる。肩部に一对の耳(銀付)をもち、胴部のやや中央に羽(鐔)が巡る。蓋は出土しなかった。鍔物は再び溶かして作り直すことが多く、現存する例は少ない。また発掘調査で出土する例も少ないことから茶釜の時期を明らかにすることは困難で



第23図 II b グループ平面図及び断面図

ある。茶の湯が盛行するのが15世紀から16世紀といわれていることから、この時期のものと考えられる。

3は石製の蔵骨器である。縦59.6cm、横35.2cm、高さ22cmで、中央部に縦約22cm、横約20cm、深さ12cmの孔が彫られている。石材は凝灰岩である。孔には河原石が壺のように置かれ、埋土中に骨粉らしき白色の粒子や炭化物がみられた。土壌などの掘り込みや上部の施設は確認できなかった。

4は和鏡である。Ⅱグループの大型地輪の近くで河原石をはずしているときに出土した。鏡面を上向きにして置かれた状態であった。近くからは土坑が1基検出された。鏡の口径は84mmで界圏をもち、周縁の幅は3mmで外傾気味に立ち上がる。鏡面の厚さは非常に薄い。文様は菊花双鳥、鈕は花形座鈕である。文様鑄出しが浅く、既存の鏡を用いてその反転型をとる「踏み返し」技法で製作されたものとみられる<sup>(1)</sup>。時期は平安末～鎌倉の頃（11世紀末～12世紀）と考えられる。

## ②土師器（5～21）

石塔群を検出したA区では包含層から土師器の坏・皿が出土した。5～8は坏である。5は坏の底部から口縁部である。Ⅱグループの大型地輪の近くから出土した。底部切り離し技法は、ヘラ切りと思われる。体部上面で一段凹み、口縁部は外方に広がる。底を故意に割り孔をあけているようである。山内石塔群から出土しているものに類似したものがあり、14～15世紀のものと考えられる。6～8の底部切り離し技法は糸切りであり、Ⅱグループから出土した。6は完形で、底部からの立ち上がりは高台を有する感があり、体部は直線的で、口縁部が尖り気味である。見込み部の調整は軽くナデている。7は、底部から口縁部で、体部がやや丸みをもって張り出している。回転ナデによる調整痕が明瞭である。8は口径と底径に比して器高が低く浅いタイプで、色調は灰白色系である。底部から高台を有する感じで立ち上がり、口縁部から体部にかけて1ヶ所に煤が付着しており、灯明用に使った可能性がある。9～21は小皿であり、完形のものはない。9の底部切り離し技法はヘラ切りである。底部は丸みをもち、ヘラによる整形の痕跡が明瞭である。見込み部の調整も軽くナデており、粘土の高まりが残る。10～21の底部切り離し技法は糸切りである。10は底部が厚く高台を有する感じで、体部は直線的に上部にのびる。11・12は体部が外反する感じであり、12の見込み部中央は凸である。13～21は口径・底径の割りに器高が低く浅いタイプである。17の見込み部中央は凹んでいる。

## ③古代の遺物（22）

石塔の検出作業中に古代の須恵器が出土した。22は須恵器の壺の底部である。

## ④陶磁器（23～30）

陶磁器類はほとんど表採したものである。23・24は摺り鉢の口縁部で、肥前系である。23は焼き締めで、24は全面を施釉している。25は鉢の口縁～頸部、26は鉢の胴部～底部である。25と26は同一個体と思われる。蛇の目高台で底部外面は無釉、見込みに砂目が残る。産地は石見か。27は鉢の胴部～底部で、外面には白土による刷毛目がみられ、内面は鉛釉で施釉されている。薩摩系である。28は皿の胴部～底部である。胴部の内外面に白土を施す。見込み、高台は無釉で、高台内部に炭化

物が付着している。産地は不明である。29・30は壺である。29は胴部で自然軸がみられる。30は口縁部～底部で、肩部に3条の沈線と波状の沈線、体部に3本の沈線がみられる。内外面にタタキ痕があり、底部に砂目が3つある。18～19世紀の肥前系である。

#### ⑤貨幣 (31～34)

31～34は、石塔群の表土中より出土した。いずれも「寛永通宝」である。32の背面に「元」の文字があり、元文年間 (1736～1740) に铸造されたものである。34は銭が2枚密着しており、1枚は判別ができないほど腐食していた。

#### ⑥五輪塔 (第27～42図)

追内遺跡からは少なくとも40基近くの石製五輪塔の造立が予想されるが、地輪以外は原位置を保っておらず、持ち出されたためか紛失しているものもある。そのうち、今回実測可能であったものは、空風輪51点、火輪26点、水輪17点、地輪41点の計135点であった。これらは凝灰岩製のものである。

紙幅の関係から法量等は表にして、各部分に一括して取り扱うこととした。なお、地輪と水輪が組み合わさった状態で検出されたものはその状態で実測・写真撮影している。

また考察は第5章第2節で行っているので参照されたい。

#### ⑦板碑 (第43～45図)

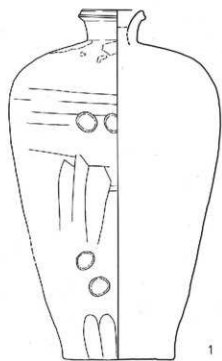
五輪塔とともに、板碑が15点検出された。うち完形のもの2点のみで、他は基部が12点、頂部が1点である。完形の2点も検出時は、基部から倒れ2・3ヵ所で折れた状態であった。

1～9はI aグループから、10～15はII aグループからそれぞれ検出された。いずれも凝灰岩製である。1～7はI aグループの中心となる大型地輪を中心に小型地輪が集中している背後に位置し、7本並んだ状態で検出された。1と2は、板碑の基部から体部の下部で、体部の上部から頂部にかけては倒れた状態で検出された。それらは調査終了後、接合し復元した (第4章参照)。復元した板碑については後に詳しく述べる。3は体部の下部から上は欠損しており、現存高63.2cm、幅26cm、厚さ18.3cmを測る。塔身正面は平滑に整形され、「我」「日」「来」の墨書が残る。背面は荒削りのままである。4は基部の上半から欠損し、現存高65.2cm、幅34.6cm、厚さ21.4cmを測る。整形は荒削りで工具痕が明瞭に残る。5～7は体部の下部から上半を欠損している。5は現存高44.9cm、幅24.4cm、厚さ17.3cmを測る。整形は荒削りで工具痕が明瞭に残る。6は現存高53.0cm、幅25.6cm、厚さ17.6cmを測る。整形は荒削りである。7は現存高45.0cm、幅24.6cm、厚さ17.8cmを測る。8は遺構9の背後の河原石を取り外す作業中に検出した。体部から上部は欠損し基部のみであるが、現存高30.1cm、幅38.1cm、厚さ16cmを測り、工具痕が残る。9は板碑の頂部から額部である。現存高24.2cm、幅35cm、厚さ20cmを測る。全体的に風化しているが、頭部は山形で二条線を影り込み、額部を整形している。体部以下は欠損している。10～15はII aグループの中心となる3個の大型地輪の背後で検出された。10は体部上半から欠損しており、現存高68.2cm、幅46cm、厚さ24.1cmを測り大型である。塔身正面を平滑に整形している。基部の削りは粗く、背面に向けて斜めに削り尖り気

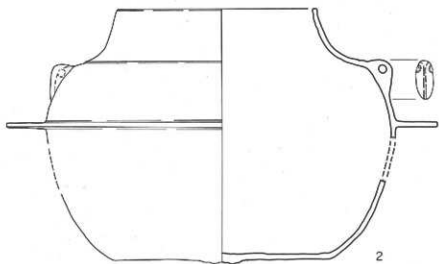
味である。11は体部下部から上半を欠損し、現存高47.6cm、幅36.7cm、厚さ17cmを測る。基部は全面平滑に整形され角張っており、塔身正面を一段下げて整形している。12～14は基部から上半は欠損している。12は現存高60.9cm、幅32.9cm、厚さ17.5cmを測る。13は現存高43.6cm、幅34.6cm、厚さ20.4cmを測る。14は風化が著しく、現存高35.2cm、幅33.4cm、厚さ17.9cmを測る。15は体部下部から上半を失っており、塔身正面を平滑に整形し、文字らしきものを除刻しているが判読できない。現存高20.1cm、幅38.2cm、厚さ20.1cmを測る。復元した板碑16と17は頭部を山形に整形し、額部上面に二条の線を彫り墨で黒く塗り、額部を突出させるように整形されている（第46図）。塔身正面は平滑に整形され、墨書が残っている。背面は荒削りのままで、基部は角張り、工具痕が明瞭に残る。16の高さは復元値ではあるが175.2cm、幅25.2cm、厚さ17.5cmを測る。墨書で額部に大日如来の梵字と、塔身部正面の上面に薬師如来の梵字を窺書きし、その下に偈頌「<sup>いつこ</sup>願以此功德 普及於一切 我等与□□（衆生カ） 皆共成仏道」と「七々日」を墨書している。17の高さは復元値であるが161.3cm、幅24.8cm、厚さ17.9cmを測る。墨書で額部に大日如来の梵字と、塔身部正面の上面に毘沙門天の梵字を窺書きし、下部に偈頌「□□應捨 何況兆法 應無所従 而生其後」と「四七日」を墨書している。16の偈頌は「法華経」の「化城喻品第七」であり、17の偈頌は「金剛経」に似たものがある<sup>(4)</sup>が出典は不明である。

(注)

- (1) 杉山 洋「唐式鏡の出土」（『日本の美術』No393〈古代の鏡〉1999年、至文堂）
- (2) 藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」（瀬戸市埋蔵文化財センター『研究紀要第5輯』1997年）
- (3) 久保智康「鋳型からみた鏡作りの歴史」（『日本の美術』No394〈中世・近世の鏡〉1999年、至文堂）
- (4) 歴史考古学研究会編『俣頌』（川勝政太郎講述）1984年、言叢社

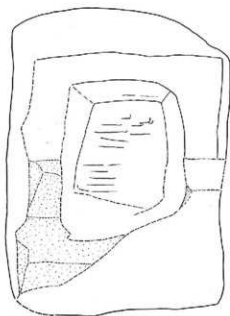


1



2

0 10cm



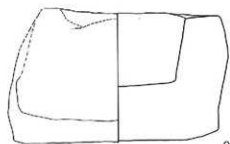
3



4



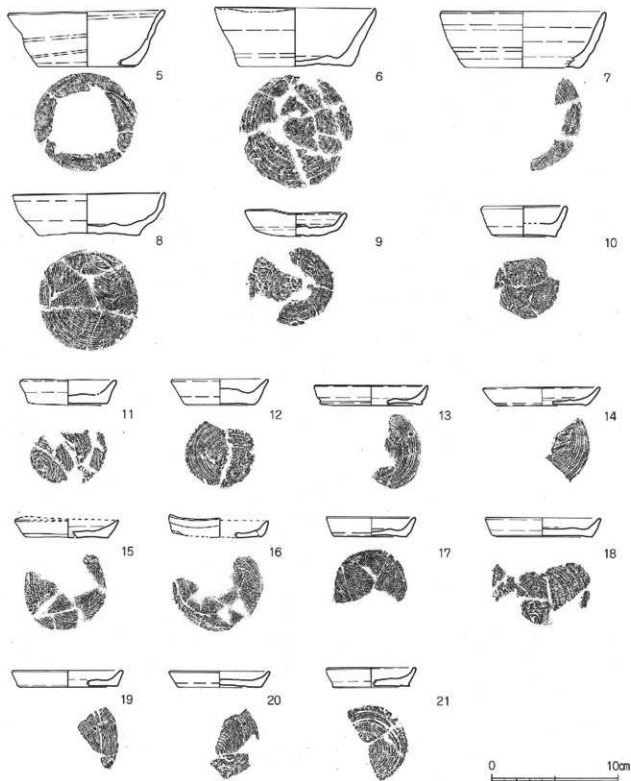
0 10cm



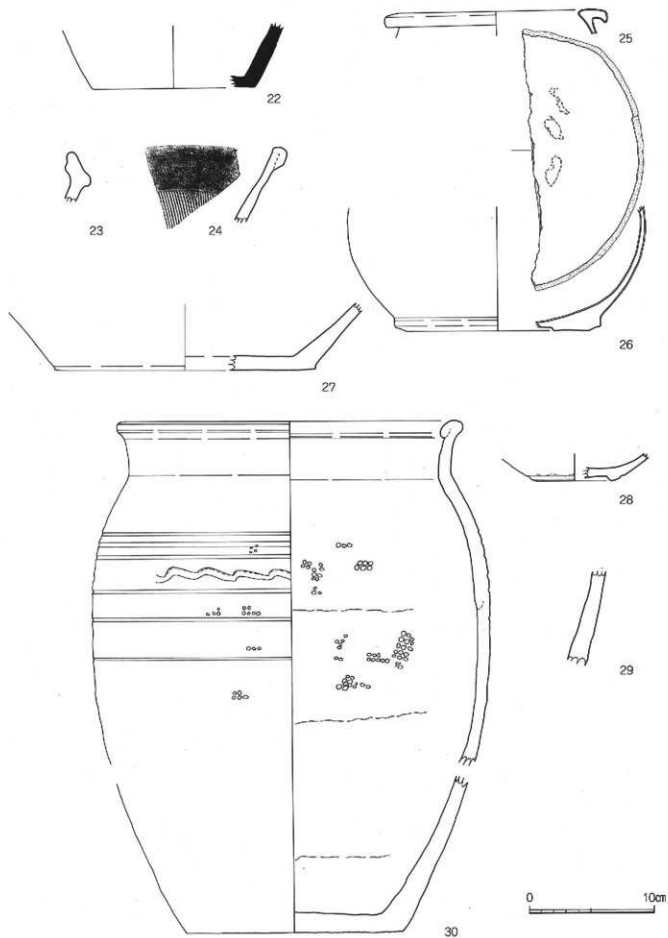
0 10cm

第24図 A区 出土遺物





A区 出土土器 (1)



第26图 A区 出土土器(2)



31



32



33



34



## 第27図 A区出土古銭

### 第1表 A区出土蔵骨器及び和鏡観察表

遺物番号	器種・部位	区分	出土地点	注量 (cm)				胎付・釉	胎土調	特 徴			産地・製作年代	備考	
				口径	器高	高台径	底径			文様・模様	装 飾	部・破損部			
1	椀形 底形	陶器	Ⅱaグループ 大塚地輪下	4.8	27.9		8.7	自然釉	灰白色			底部外面無釉	輪郭み後 ロウ成形	古瀬戸 13世紀末	
2	茶釜	陶器	Ⅱaグループ 地輪下	15.8	20.3		17					磚有り。 1対の耳(瀬付)。			
3	蔵骨器	石製品	Ⅱbグループ (長輪)	48.8	21.8		34.4					埋納孔有り。			
4	和鏡	金属器	Ⅱaグループ	8.4	0.3							磨花双鳥文。 花形座鏡。	磨み返し 技法	11世紀末 ~12世紀	

### 第2表 A区出土土師器観察表

\* ( ) は推定値。

遺物番号	器種・部位	出土地点	注量 (cm)				平手・内面		色 調		胎土の特徴	底 部	備考
			口径	器高	外面	内面	外面	内面	外面	内面			
5	土師器 杯 口縁~ 底形部	A区	12.3	7.85	4.49	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 7/4)	にぶい黄 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色・黒色の粒子を含む。 3mm程度の茶褐色の粒子を含む。厚部に5mmほどの高細小管がみられる。	へう切り		
6	土師器 杯 口縁~ 底形部	A区	12.7	9.9	4.65	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 7/4)	にぶい黄 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色・黒色の粒子を含む。	糸切り	形状がいびつである。	
7	土師器 杯 口縁~ 底形部	A区 (12.9)	(9.2)	4.65	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (10R 7/4)	浅黄橙 (10R 5/3)	にぶい黄 (10R 7/4)	2mm以下の黒・灰色の粒を少し含む。	糸切り		
8	土師器 杯 口縁~ 底形部	A区	11.9	7.9	3.4	胎転ナテ	胎転ナテ	浅黄橙 (10R 8/3)	浅黄橙 (10R 5/3)	1mm以下の赤褐色の粒子・濃褐色の斑色の砂粒を含む。	糸切り	浅鉢口縁 が壊れ、 残存。	
9	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区	7.7	6.6	2.15	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (10R 7/4)	にぶい黄 (10R 7/4)	3mm以下の茶褐色の斑粒と黒色の斑粒を含む。 1mm以下の赤褐色・黒色の粒子を含む。厚部に2mm程度の高細小管がみられる。	へう切り		
10	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区	6.5	5.1	2.45	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 6/4)	にぶい黄 (7.5R 6/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒。1mm以下の灰色・黒褐色の粒を含む。	糸切り		
11	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (7.2)	(6.1)	(2.0)	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 7/4)	にぶい黄 (7.5R 7/4)	1mm~3mm位の赤褐色の粒子が見られる。	糸切り	形状がいびつである。		
12	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (7.6)	(5.6)	(2.1)	胎転ナテ 粒の上 れがある。	胎転ナテ	粒	粒	2mm以下の茶褐色の粒が一つ。1mm以下の黒・濃褐色・赤褐色の斑粒を含む。厚部に2mmほどの高細小管がみられる。	糸切り			
13	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (9.0)	(8.0)	(1.6)	胎転ナテ	胎転ナテ	浅黄橙 (10R 8/4)	浅黄橙 (10R 8/4)	1mm以下の黒色の砂粒を含む。	糸切り			
14	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (9.1)	(6.9)	(1.45)	胎転ナテ	胎転ナテ	浅黄橙 (10R 8/4)	浅黄橙 (10R 8/4)	1mm以下の黒色・赤褐色の粒子を含む。	糸切り			
15	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (8.1)	(6.5)	(1.45)	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 7/3)	にぶい黄 (7.5R 7/3)	磨丸。1mm以下の黒・赤褐色の粒子を含む。	糸切り後、 へうによる 切り直し	黒化加味		
16	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区	7.75	7.1	1.35	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (10R 7/4)	にぶい黄 (10R 7/4)	1mm以下の光沢のある粒子を含む。0.5mm以下の赤褐色粒子をわずかに含む。	糸切り	形状がいびつである。	
17	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区	7	5.8	1.6	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 6/4)	にぶい黄 (7.5R 7/4)	3mm以下の赤褐色の粒子。1mm以下の半透明・黒色の光沢粒を含む。底部に2mmほどの高細小管がみられる。	糸切り		
18	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (8.9)	(7.9)	1.5	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 6/4)	粒 (7.5R 6/5)	2mm以下の黒・灰・褐色の粒子を含む。	糸切り	黒化加味		
19	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (8.6)	7.9	1.35	胎転ナテ	胎転ナテ	浅黄橙 (7.5R 6/4)	浅黄橙 (7.5R 6/5)	1mm以下の茶・黒色の粒子を含む	糸切り			
20	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (7.7)	(6.4)	(1.3)	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (7.5R 7/4)	にぶい黄 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の粒子・キラキラ光る粒子が見られる。	糸切り			
21	土師器 小皿 口縁~ 底形部	A区 (7)	(6.2)	(1.6)	胎転ナテ	胎転ナテ	にぶい黄 (10R 7/4)	にぶい黄 (10R 7/4)	1mm以下の黒色・赤褐色の粒子を含む。	へう切り			

第3表 A区出土須恵器観察表

遺物番号	種類	器種・部位	法量 (cm)				手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
22	須恵器	壺 底面～胴部		12.2		横ナデ	刷ナデ	灰 (5YR 5/1)	灰 (5YR 6/1)	1mm大の黒色の粒を含む。	古代	

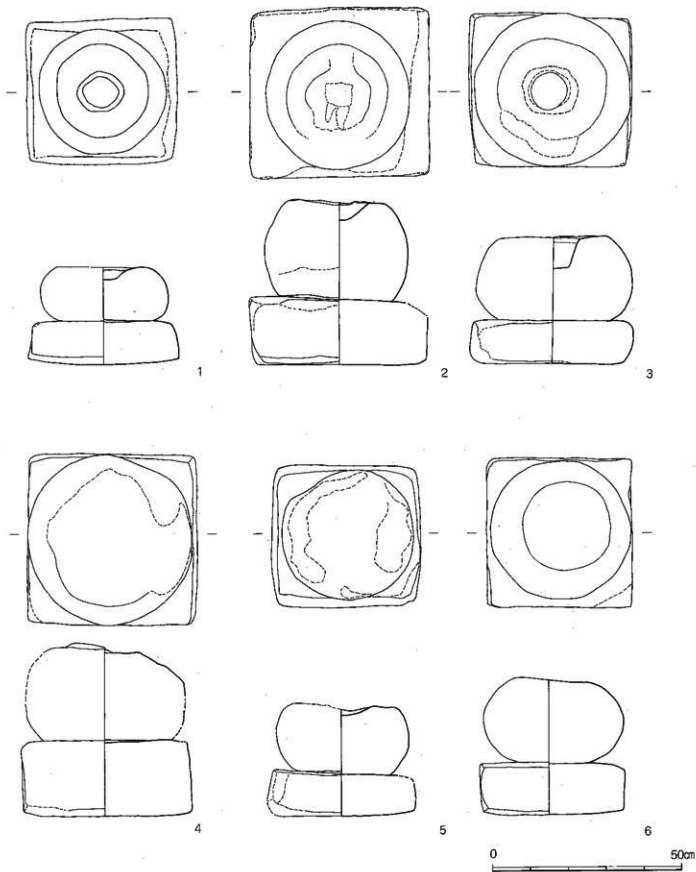
第4表 A区出土陶磁器観察表

\* ( ) は推定値。

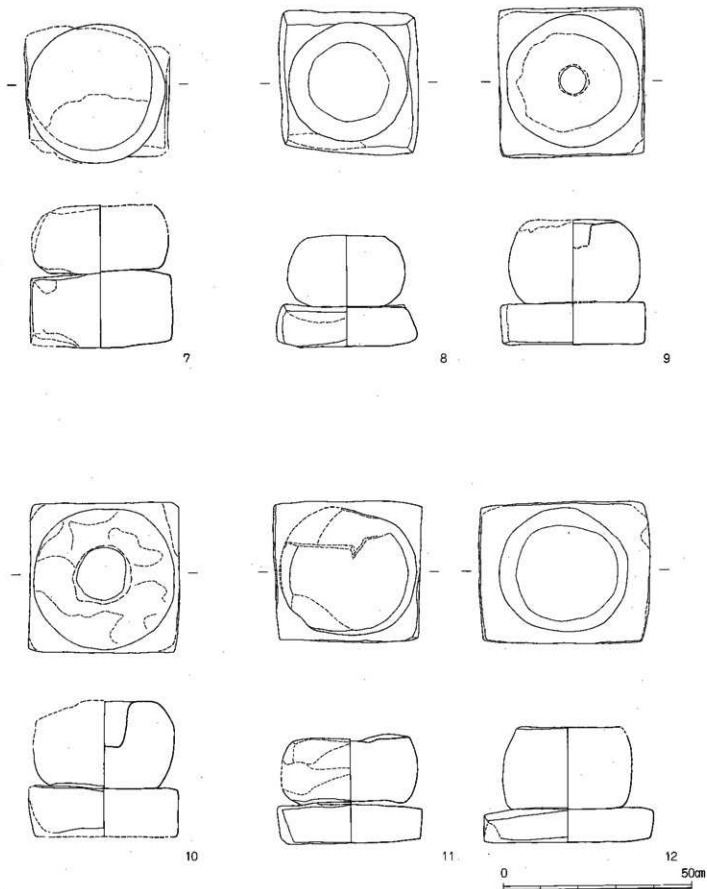
遺物番号	器種・部位	区分	法量 (cm)				絵付・胎	胎土調	特 徴			産地・製作年代	備考
			口径	器高	高台径	底径			文様・輪割	裝飾	成形・焼成技法		
23	甕鉢 口縁部						滑り磨の 外面：にぶい 赤褐色。 内面：灰色					甕前か? (16～17世紀)	
24	甕鉢 口縁部						黒緑。赤褐色。	金網彫飾。		輪割み後ロクロ 成形		甕前か? (18～19世紀)	
25	鉢 口縁～ 胴部	陶磁	(15.4)				透明釉。灰色。	全体に貫入有り。				甕前か? 灰1片- 磁石か?	
26	鉢 胴部～ 底面	陶磁			(14.6)		透明釉。灰色。	全体に貫入有り。				甕前か?	
27	鉢 胴部～ 底面	陶磁				(21.0)	内：黒釉。 にぶい赤褐色。	外周白土による刷毛目。底面 外周は無釉。				龍泉系か?	
28	皿? 胴部～ 底面	陶磁				(7.0)	透明釉。黒灰色。	内・外面胴部に白土を施す。 見込み・高台無釉。		高台内部に灰化 物付着。		産地時期不明	
29	甕 胴部	陶磁					オリブ 灰色。	灰黄濁 (10YR 4/2)	自然釉。			甕前か?	
30	甕 口縁～ 底面	陶磁	(26.0)			(17.2)	黒緑。暗赤褐色。	写部に3本の比喩と波状の比 喩。体部に比喩が3本。				甕前 (18～19世紀)	

第5表 A区出土古銭計測表

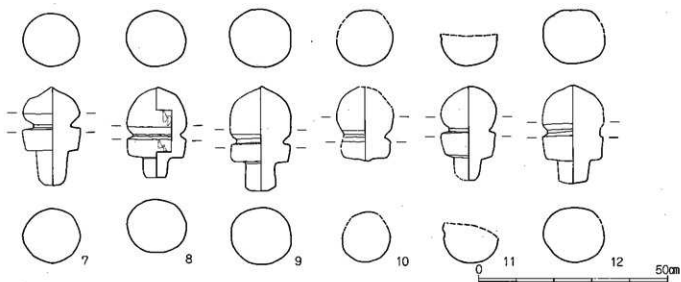
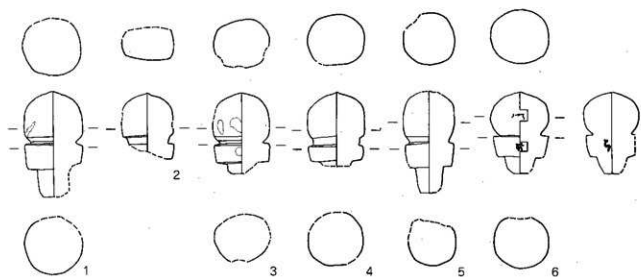
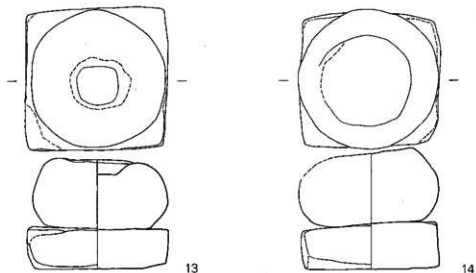
番号	銭 名	出土地点	直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備 考
1	寛永通宝	表土	2.29	0.99	0.68	2.10	
2	寛永通宝	表土	2.16	1.21	0.71	2.10	背に「元」の文字有り。
3	寛永通宝	表土	2.30	1.14	0.60	2.40	
4	寛永通宝	表土	2.36	1.56	0.65	5.0	1枚付着。



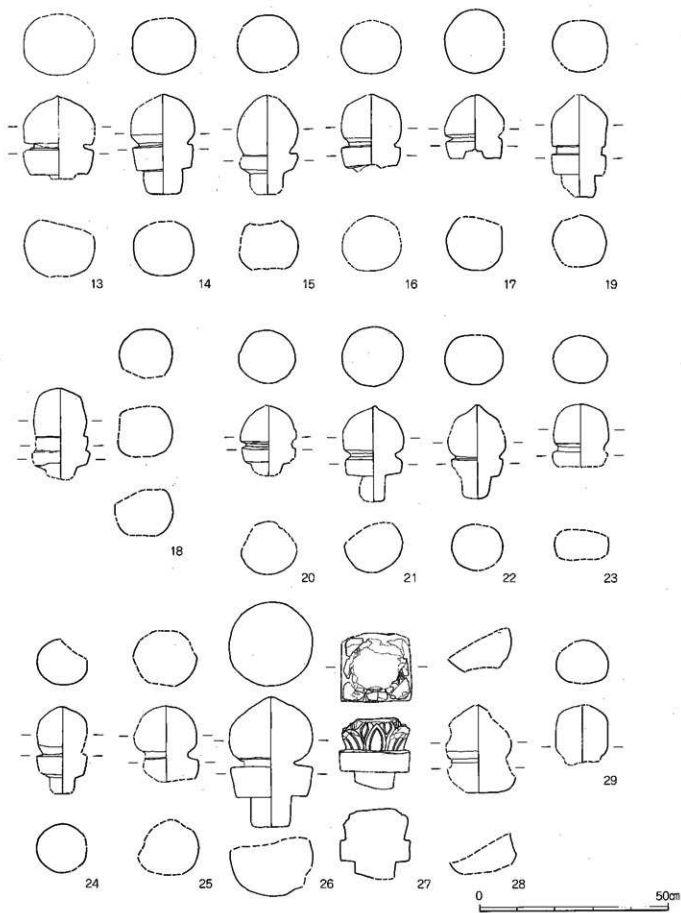
第28图 A区 五輪塔 (1)



第29图 A区 五輪塔(2)

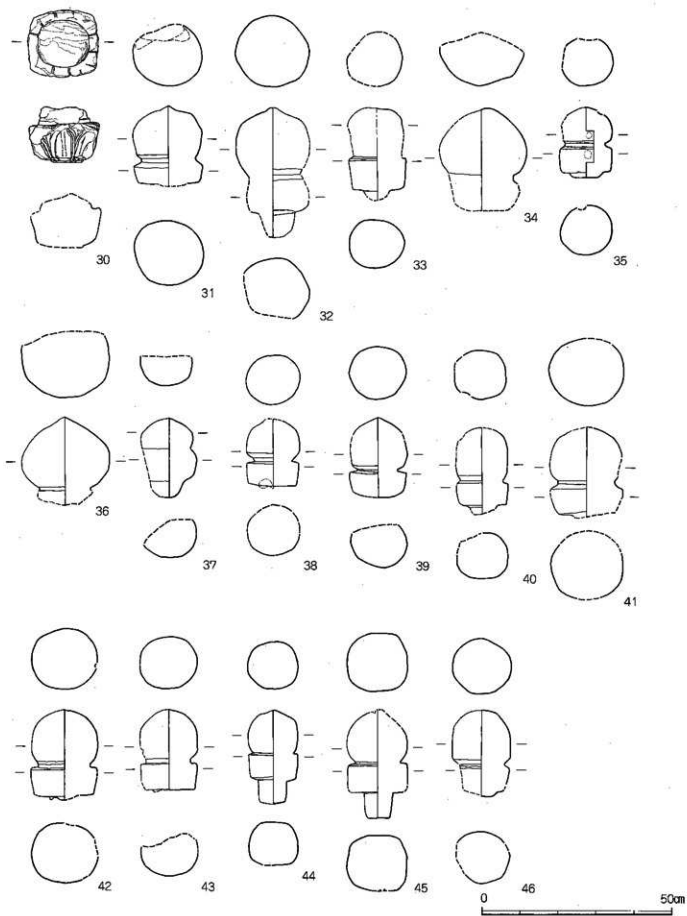


第30图 A区 五輪塔(3)及び空風輪(1)

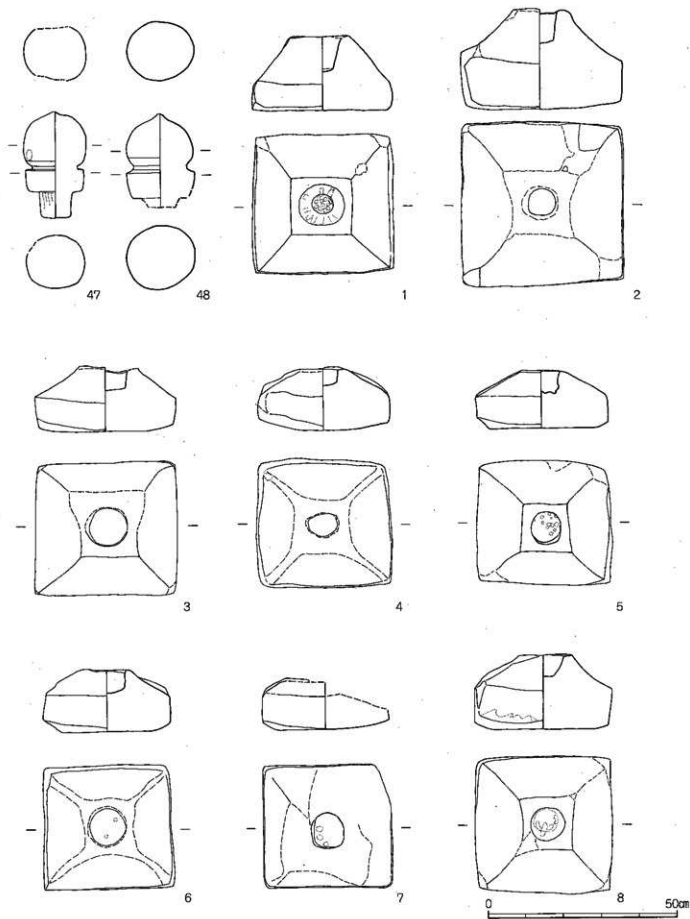


第31图 A区 空风轮 (2)

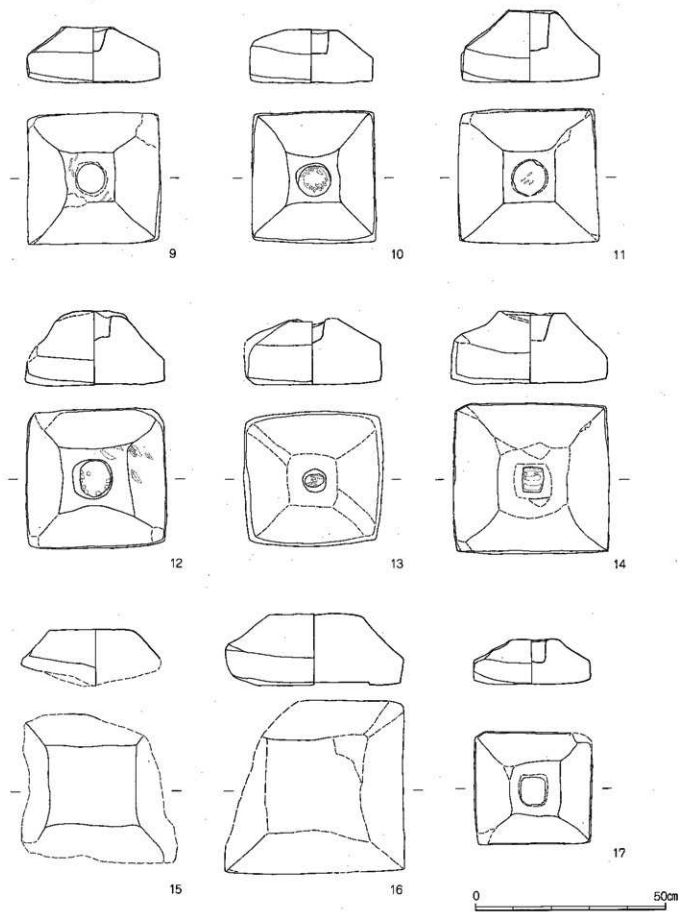




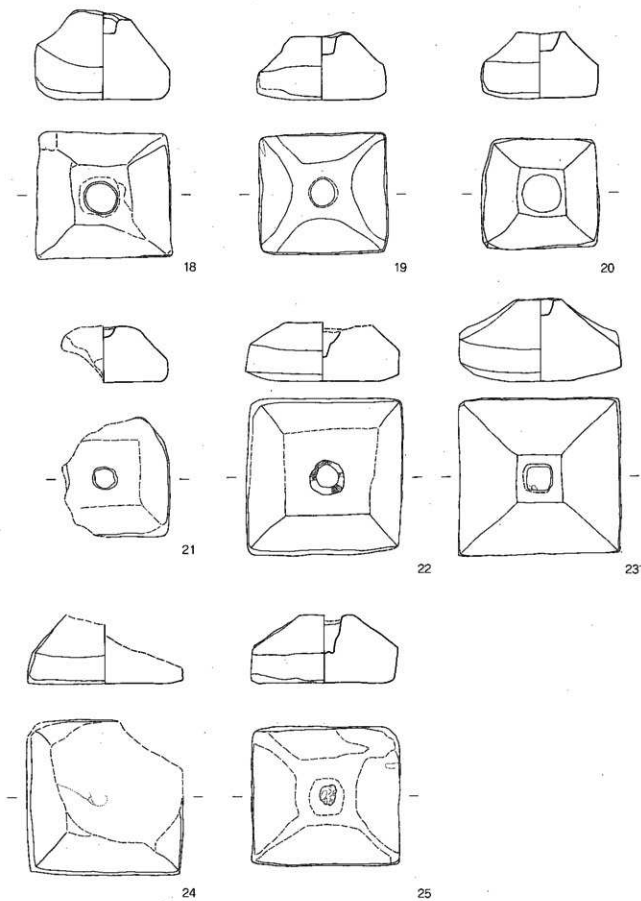
第32図 A区 空風輪 (3)



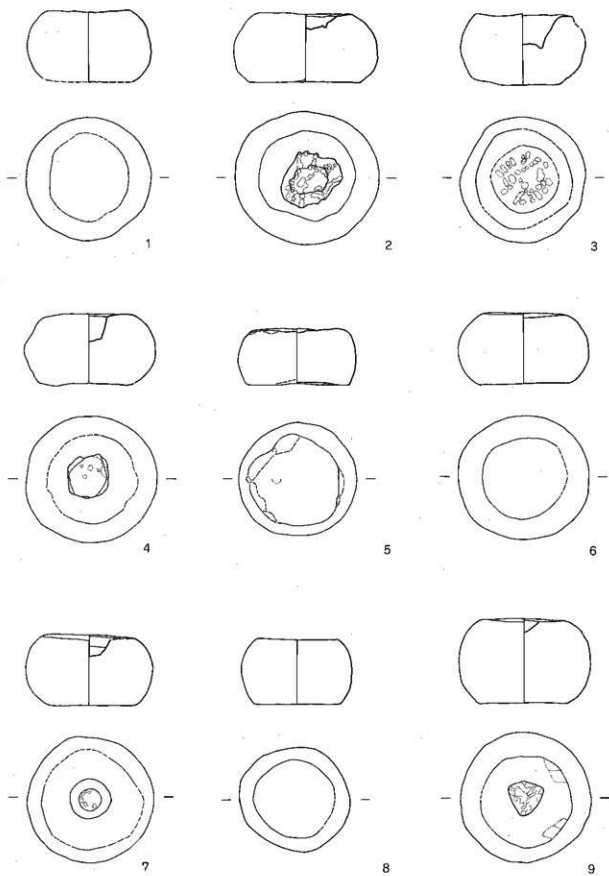
第33図 A区 空風輪（4）及び火輪（1）



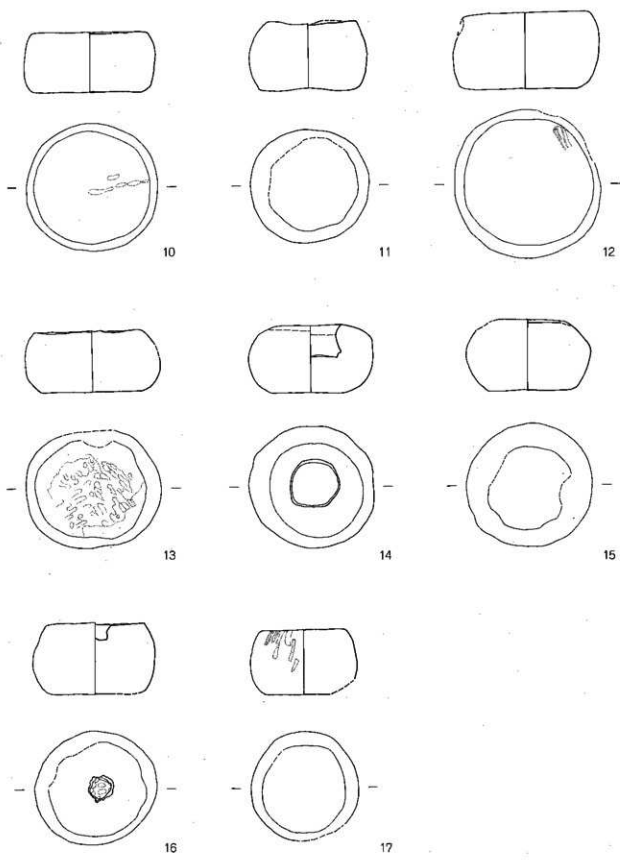
第34图 A区 火輪 (2)



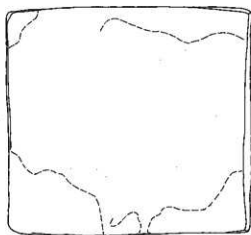
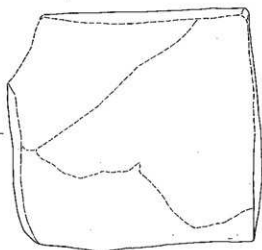
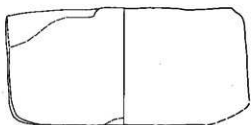
第35図 A区 火輪 (3)



第36図 A区 水輪 (1)

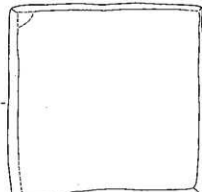
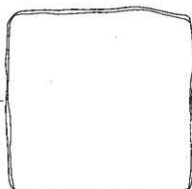
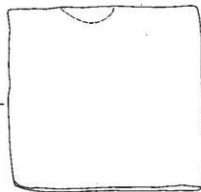
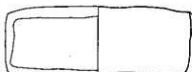


第37図 A区 水輪 (2)



1

2



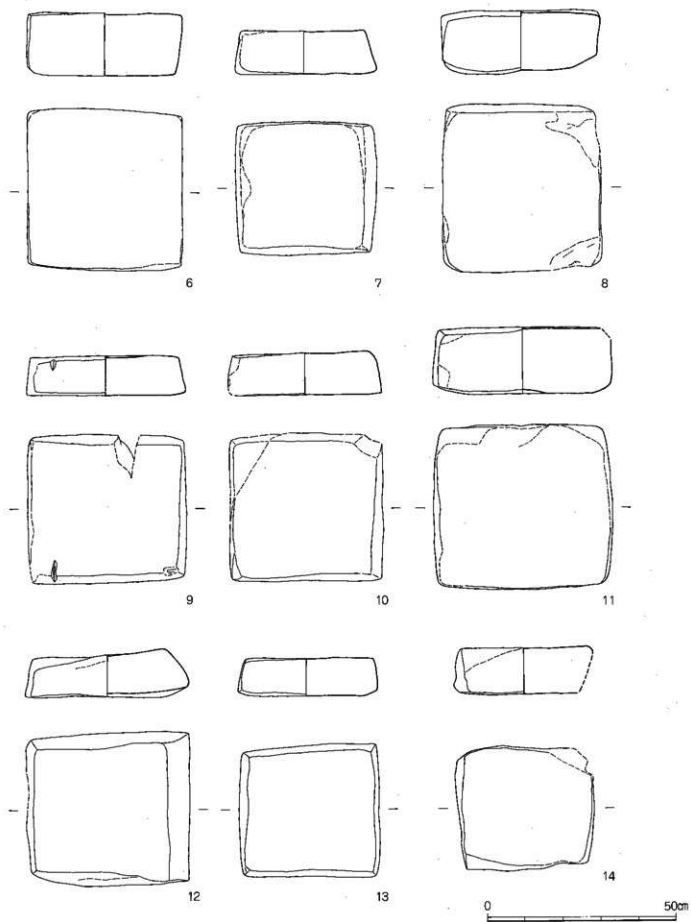
3

4

5

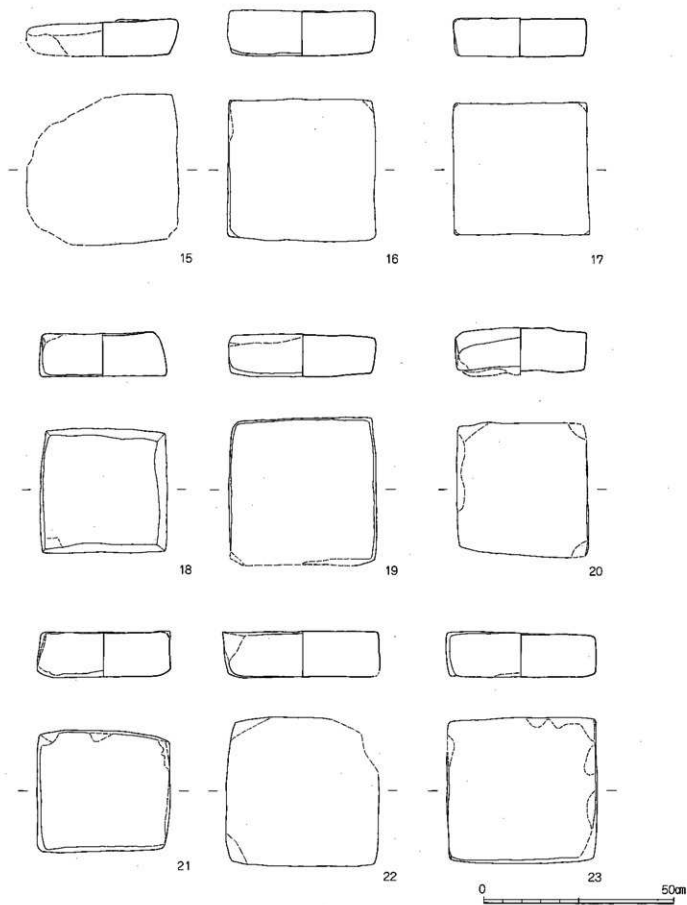
0 50mm

第38图 A区 地輪 (1)

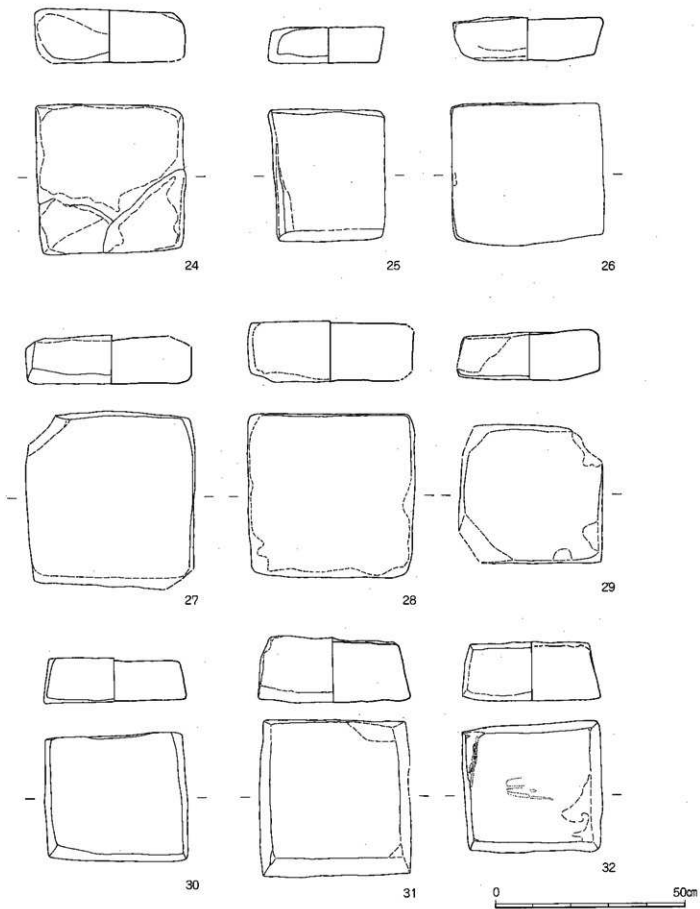


第39图 A区 地輪 (2)

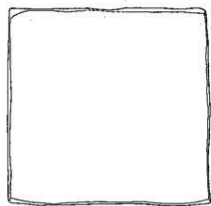
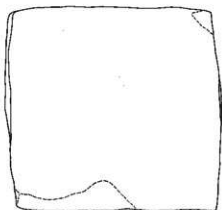
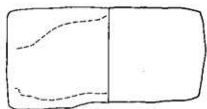




第40图 A区 地輪 (3)

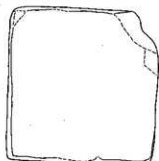
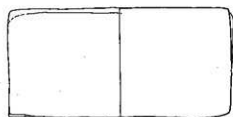


第41图 A区 地輪 (4)

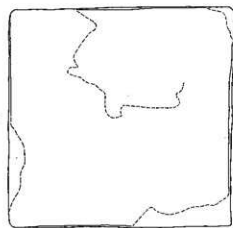


33

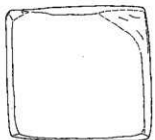
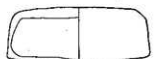
34



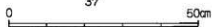
36



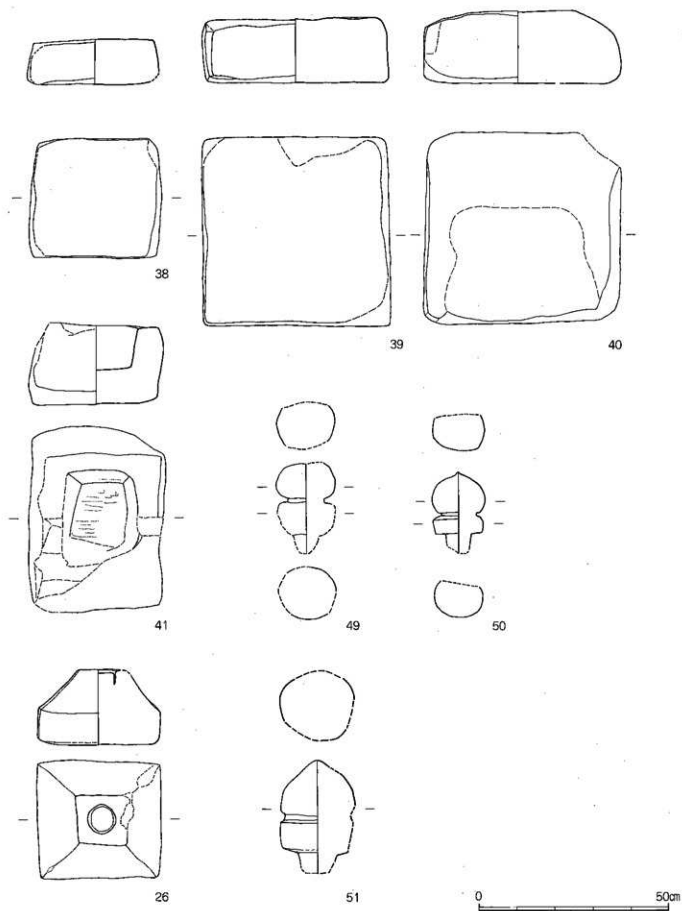
35



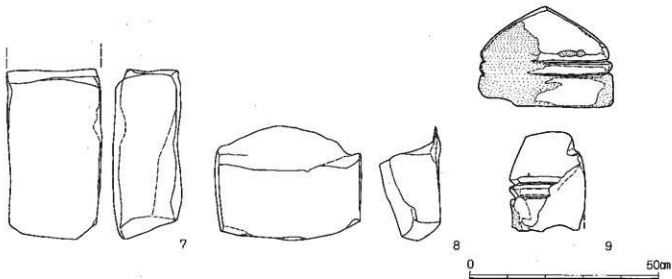
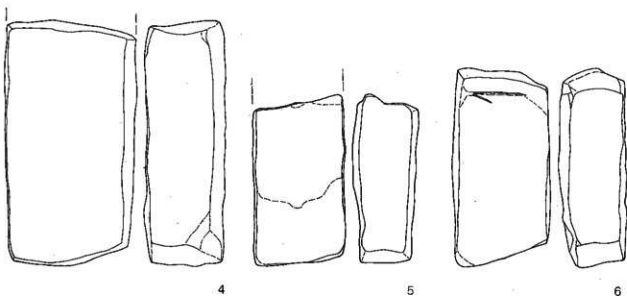
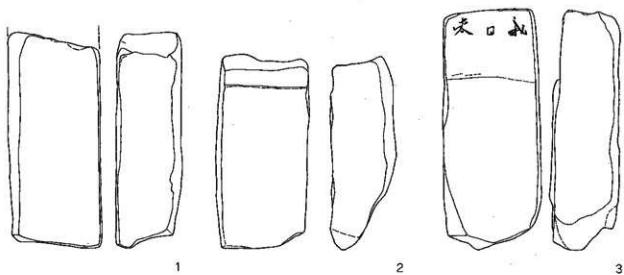
37



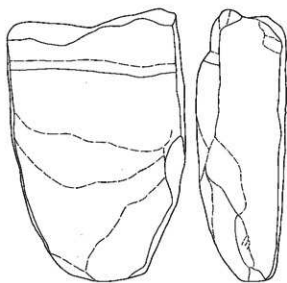
第42図 A区 地輪 (5)



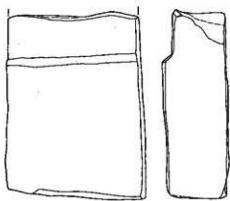
第43図 A区 地輪(6)及びB区空風輪・火輪・F区空風輪



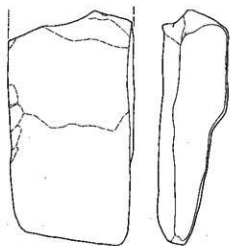
第44图 A区 板碑 (1)



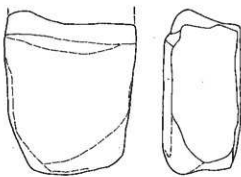
10



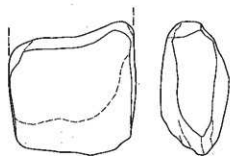
11



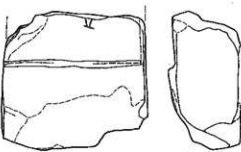
12



13



14



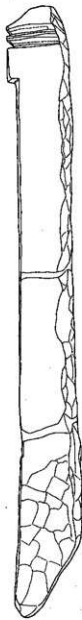
15



第45图 A区 板碑 (2)



17



16



第46図 A区 復元した板碑(3)

第6表 空風輸送量表 (1)

区・番号	グループ	回風番号	回風番号	法量 (単位cm)										注量比(D/a+b+c)	注量比2(B/C)	石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g	h	i				
A・ク1	Ia	第30回-1	回風25-1	22	12	0.6	6.6	—	15.6	15.3	—	8.8	1.15	1.82	凝灰岩		
A・ク2	Ia	第30回-2	回風25-2	17.4	11.2	2.1	—	—	—	13.6	—	—	—	—	凝灰岩		
A・ク3	Ia	第30回-3	回風25-3	21.4	12.4	0.9	5	—	14.8	14.5	8	1.17	2.48	凝灰岩			
A・ク4	Ia	第30回-4	回風25-4	—	9.9	2.2	3.7	—	15	14.5	8.6	—	2.68	凝灰岩			
A・ク5	Ia	第30回-5	回風25-5	27	12	0.4	6.3	—	6.9	13.6	12.8	7.2	1.44	凝灰岩			
A・ク6	Ia	第30回-6	回風25-6	21.7	11.2	—	6	—	4.2	15.3	14.5	8	1.26	凝灰岩			
A・ク7	Ia	第30回-7	回風25-7	26	19	0.8	6	—	9.2	15	15.2	8.4	1.95	凝灰岩			
A・ク8	Ia	第30回-8	回風25-8	24	12.5	0.8	4.8	—	5.3	15.7	15.5	7	1.33	凝灰岩			
A・ク9	Ia	第30回-9	回風25-9	27.8	13.6	1	4.5	—	7	16	15.4	7.7	1.46	凝灰岩			
A・ク10	Ia	第30回-10	回風25-10	19.5	11.5	1.1	4.4	—	14.9	12.8	14.8	7.4	1.08	凝灰岩			
A・ク11	Ia	第30回-11	回風25-11	24.8	12.2	0.8	6.2	—	6	14.6	14.4	7.4	1.36	凝灰岩			
A・ク12	Ia	第30回-12	回風25-12	26	11	1.1	6	—	6	15.9	15.8	8.6	1.44	凝灰岩			
A・ク13	Ia	第31回-1	—	(12.6)	—	—	6.4	—	—	18.8	18.4	—	—	凝灰岩	積合		
A・ク14	Ia	第31回-14	回風25-14	24.5	13	0.6	6.5	—	6.4	16.6	15.8	10	1.22	凝灰岩			
A・ク15	Ia	第31回-15	回風25-15	26.2	15.3	—	5.5	—	5.5	16	—	9	1.26	凝灰岩			
A・ク16	Ia	第31回-16	回風25-16	24	13.6	0.8	4.3	—	—	15.6	15	9.4	1.28	凝灰岩			
A・ク17	Ia	第31回-17	回風25-17	16.8	10.1	—	4.4	—	—	15.8	14.8	—	1.16	凝灰岩			
A・ク18	Ia	第31回-18	回風25-18	27	13.8	1.8	5.6	—	5.6	14.6	14.6	8.8	1.27	凝灰岩			
A・ク19	Ia	第31回-19	回風25-19	24.7	9.6	1.4	4.6	—	3.1	14.5	14	8	1.2	凝灰岩	表探		
A・ク20	Ia	第31回-20	回風25-20	18.7	9.6	0.6	4	—	6.6	15.8	15	6.8	1.55	凝灰岩	表探		
A・ク21	Ia	第31回-21	回風25-21	25.4	11.8	—	6	—	—	14.5	14.5	7.1	1.31	凝灰岩	表探		
A・ク22	Ia	第31回-22	回風25-22	24.7	14	0.7	4.2	—	5.8	10.3	13.5	—	0.93	凝灰岩	表探		
A・ク23	Ia	第31回-23	回風25-23	16.6	11.4	1.4	5	—	—	14.4	14.3	—	—	凝灰岩			
A・ク24	Ia	第31回-24	回風25-24	23	12.5	7	5.5	—	4.5	13.2	13.2	6.7	0.92	凝灰岩			
A・ク25	Ia	第31回-25	回風25-25	19.5	12.5	1	—	—	—	15.8	—	—	—	凝灰岩			
A・ク26	Ia	第31回-26	—	(34.4)	17.8	—	8.2	—	8.2	21.8	21.6	10.6	—	凝灰岩	表合		
A・ク27	Ia	第31回-27	回風25-27	23	14	1.1	—	—	—	—	—	—	—	凝灰岩			
A・ク28	Ia	第31回-28	回風25-28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	凝灰岩	下部大洞		
A・ク29	Ia	第31回-29	回風25-29	15.7	13.3	—	—	—	13.5	—	—	—	1.18	凝灰岩			
A・ク30	Ia	第32回-30	回風25-30	21.4	13.1	0.9	4.2	—	—	17.8	18	—	1.18	凝灰岩			
A・ク31	Ia	第32回-31	回風25-31	34.2	17.6	—	10	—	6.2	19.4	—	—	1.24	凝灰岩			
A・ク32	Ia	第32回-32	回風25-32	24.3	12.8	1.1	8	—	2.5	14.3	14.7	7	—	凝灰岩			
A・ク33	Ia	第32回-33	回風25-33	27	17	—	—	—	—	23	—	—	—	凝灰岩			
A・ク34	Ia	第32回-34	回風25-34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	凝灰岩			
A・ク35	Ia	第32回-35	回風25-35	18.4	9.4	1	6	—	—	—	13.5	8.8	1.12	凝灰岩			
A・ク36	Ia	第32回-36	回風27-36	23.5	18.6	1	—	—	—	23	—	—	—	凝灰岩			
A・ク37	Ia	第32回-37	—	21	8	—	—	—	—	13.6	—	—	—	凝灰岩	風化著しい		
A・ク38	Ia	第32回-38	回風27-38	18.3	10.4	1	6.4	—	—	14	13.6	—	1.03	凝灰岩			
A・ク39	Ia	第32回-39	回風27-39	21	11.8	0.4	6.9	—	—	15	15	—	1.1	凝灰岩			
A・ク40	Ia	第32回-40	回風27-40	23	14	6	5.6	—	—	13.6	13.5	6.8	0.9	凝灰岩			
A・ク41	Ia	第32回-41	回風27-41	—	14.5	2.1	—	—	—	—	18.5	—	—	凝灰岩			
A・ク42	Ia	第32回-42	回風27-42	24	14.6	0.9	7	—	—	17.4	—	—	1.07	凝灰岩			



第7表 空風輸法量表(2)

区・番号	グループ	回風番号	法量(単位cm)										石質	備考
			A	a	b	c	d	e	f	g	法量比(1/amb-c)	法量比2(b/c)		
A・ク43	I b	第32区-43	21.6	13.2	1	7	-	15	14.8	7.4	1.03	1.89	凝灰岩	
A・ク44	II b	第32区-44	25	10.7	-	6	5.6	12.8	12.5	6.1	1.5	1.78	凝灰岩	
A・ク45	I b	第32区-45	29	13.8	0.6	8	6.8	15.8	15.8	7.6	1.29	1.73	凝灰岩	
A・ク46	II b	第32区-46	23	14.2	6	6	-	15.3	-	-	0.68	2.37	凝灰岩	
A・ク47	I b	第33区-47	28	14.3	0.9	6.2	6.6	16.4	15.1	8.6	1.31	2.31	凝灰岩	致密
A・ク48	II b	第33区-48	26.8	13.8	1	6.5	-	17.5	18	10	1.26	2.12	凝灰岩	灰味
A・ク49	I b	第43区-49	24.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A・ク50	I b	第43区-50	21.5	10.6	0.8	4.6	-	13.8	13.1	6.8	1.34	2.3	凝灰岩	
A・ク51	I b	第43区-51	29.8	14.8	1.4	7.2	-	19.4	-	10.2	1.27	2.06	凝灰岩	

第8表 相輪法量表

区・番号	グループ	回風番号	法量(単位cm)														相輪の形状	附花	備考		
			ア	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	ヲ	ワ				カ	コ
A・ク27	II a	第31区-27	18.7	-	-	-	-	-	8.5	5.5	-	-	-	-	-	-	-	10.8	-	-	-
A・ク30	II a	第32区-30	14.7	-	-	-	-	-	10.1	-	-	-	-	-	-	-	-	18.2	-	-	-

第9表 相輪的空風輸法量表

区・番号	グループ	回風番号	法量(単位cm)										石質	備考		
			F	ク	カ	コ	ソ	ツ	チ	セ	テ	ネ				
A・ク18	I a	第31区-18	24.3	12.8	3.8	3.6	3.8	4.3	3.5	3.5	14	8.4	8.4	15.2	凝灰岩	

第10表 火輪法量表

区・番号	プラーフ	回所番号	頭版番号	B	b	i	j	k	l	法量(単位cm)	口	o	p	q	法量比(B/comp)	判穴	石質	備考
A・方1	I a	第33回-1	頭版28-1	19.6	12.6	6	6	7	2.4	15.8	10	35.4	34.8	3.2	0.54	丸	凝灰岩	
A・方2	I a	第33回-2	頭版28-2	25.9	13.3	10.6	2	—	2.5	14.9	9.5	—	36	8.6	0.72	丸	凝灰岩	
A・方3	I a	第33回-3	頭版28-3	16.6	8	6.6	2	5.3	3	14.9	11	37.2	36.4	5.8	0.45	丸	凝灰岩	
A・方4	I a	第31回-4	頭版28-4	16.8	7.5	7.3	2	5.6	4.5	14.4	8.8	28	29	2.3	0.58	丸	凝灰岩	
A・方5	I a	第33回-5	頭版28-5	15.3	6.5	7	1.5	5.6	3	12.4	7.6	34.6	33.8	5.4	0.44	丸	凝灰岩	
A・方6	I a	第33回-6	頭版28-6	16.2	7.3	6.9	2.2	6.5	2.6	12.8	10	31.6	33.6	5.8	0.48	丸	凝灰岩	
A・方7	I a	第33回-7	頭版28-7	13.6	—	—	2.5	—	—	—	—	33	24.6	—	—	丸	凝灰岩	
A・方8	I a	第33回-8	頭版28-8	19.4	9.1	9.2	1	—	3.6	13.9	9	—	33	5.3	0.59	丸	凝灰岩	
A・方9	I a	第34回-9	頭版29-9	14.6	6.7	6.8	1.2	4.8	3	13	8.4	34	33.2	5.8	0.43	丸	凝灰岩	
A・方10	I a	第34回-10	頭版29-10	14	7.3	6	0.8	7.5	1.5	13.2	9.2	31	31.2	6.5	0.45	丸	凝灰岩	
A・方11	I a	第34回-11	頭版29-11	19	11.6	5.8	1.6	6	3.1	13.7	9.4	36.4	36.4	10.2	0.52	丸	凝灰岩	
A・方12	I a	第34回-12	頭版29-12	19.6	12.9	5.7	1	—	3.3	17.1	10.4	—	35	6.3	0.56	角	凝灰岩	
A・方13	I b	第34回-13	頭版29-13	17.6	7.2	9.2	1	8.6	2	13.2	6.3	33.6	30	—	0.52	丸	凝灰岩	
A・方14	I b	第34回-14	頭版29-14	18.6	13	4.6	1.2	8.2	2.8	17.4	11.2	41.2	38.8	7.4	0.45	角	凝灰岩	
A・方15	II a	第34回-15	頭版29-15	15	—	—	—	—	—	22.7	—	—	—	—	—	—	凝灰岩	
A・方16	II a	第34回-16	頭版29-16	18	12.3	6.1	0.6	8	3	—	—	48	42.6	—	0.38	—	凝灰岩	
A・方17	II a	第34回-17	頭版29-17	12	6.1	4.6	1.3	4.3	1.6	13	7.3	29.6	30.4	5.8	0.39	角	凝灰岩	
A・方18	II a	第35回-18	頭版30-18	22.8	12.8	6	2.5	6.2	6	15.4	8	35.8	34	6.4	0.64	丸	凝灰岩	
A・方19	II a	第35回-19	頭版30-19	17.8	8.8	7	2	5.5	2	15.8	7.8	32.2	33.4	4.8	0.53	丸	凝灰岩	
A・方20	II a	第35回-20	頭版30-20	17.4	8.9	7.7	0.8	7.6	1.5	12.6	10.2	30.8	26.8	4.6	0.56	丸	凝灰岩	
A・方21	II a	第35回-21	頭版30-21	15	9	5	1	—	—	18.7	6.6	—	—	2.8	—	丸	凝灰岩	
A・方22	II b	第35回-22	頭版30-22	14.5	7	6	2	7.3	11.5	8.8	6	38	43	—	0.34	丸	凝灰岩	
A・方23	II b	第35回-23	頭版30-23	21.8	12.8	5.2	3.8	6	5.4	11.7	7.6	42	42.4	4.2	0.51	角	凝灰岩	
A・方24	—	第35回-24	頭版30-24	—	—	—	—	7.2	1.4	—	—	39.6	36.8	—	—	—	凝灰岩	集積
A・方25	—	第35回-25	頭版31-25	17.9	8.6	8	1.3	6.6	2.4	16	9	37.4	38.4	10.2	0.47	角	凝灰岩	集積
B・方25	—	第34回-25	頭版31-26	20	11.4	7.6	1	7.8	1.5	—	7.4	32	31	4	0.63	丸	凝灰岩	道橋仁取層

第11表 水輸法置表

区・番号	グループ	回線番号	列線番号	C	r	s	t	u	v	w	法量比(B/corp)	法量比(B/corp)	給養孔	石質	備考
A・セ1	Ia	第28回-1	回線23-1	14.1	3.4	6.3	6.2	6.2	33.4	22.5	0.42	0.42	丸	凝灰岩	
A・セ2	Ia	第28回-2	回線23-2	26.3	5.5	13.2	17	25.6	37.8	30.2	0.7	1.99	丸?	凝灰岩	
A・セ3	Ia	第28回-3	回線23-3	24	8.8	9.5	28.6	14.2	40.9	29.2	0.59	0.59	丸	凝灰岩	
A・セ4	Ia	第28回-4	回線23-4	25.8	-	11.7	-	-	41.8	34.8	0.62	2.21	-	凝灰岩	
A・セ5	Ia	第28回-5	回線23-5	18.2	-	8.4	-	-	34.6	24.6	0.53	2.17	-	凝灰岩	
A・セ6	Ia	第28回-6	回線23-6	22.3	-	10.6	22.4	-	36.6	18.5	0.61	2.1	-	凝灰岩	
A・セ7	Ia	第29回-7	回線24-7	17.4	-	-	-	-	-	29.1	-	2.49	-	凝灰岩	
A・セ8	Ia	第29回-8	-	21.9	6.4	8.8	-	6.7	34.1	26.7	0.64	2.49	-	凝灰岩	
A・セ9	Ia	第29回-9	回線24-8	18.8	-	7	21.3	-	31.3	18.4	0.6	2.69	丸	凝灰岩	
A・セ10	Ib	第29回-10	回線24-9	22.9	12	13.1	-	12.7	37	28	0.62	1.75	丸?	凝灰岩	
A・セ11	Ib	第29回-11	回線24-10	15.5	-	10.4	31.1	-	36	26	0.43	1.49	-	凝灰岩	
A・セ12	Ib	第29回-12	回線24-11	21.4	-	10.8	-	-	33.4	28	0.64	1.96	-	凝灰岩	
A・セ13	Ib	第30回-13	-	18.8	4.6	7.7	16	10.8	35.6	27.6	0.53	2.44	角?	凝灰岩	
A・セ14	Ib	第30回-14	回線24-14	19.6	-	8.8	-	-	36.6	28.2	0.54	2.23	-	凝灰岩	
A・セ1	Ia	第36回-1	回線31-1	18.6	-	9	21.3	-	32.2	-	0.58	2.07	-	凝灰岩	
A・セ2	Ia	第36回-2	回線31-2	18	3.7	8	25.2	15.4	37.6	28.8	0.48	2.25	丸?	凝灰岩	
A・セ3	Ia	第36回-3	回線31-3	19	8.4	10	25.6	18	33	17.2	0.38	1.9	丸	凝灰岩	
A・セ4	Ia	第36回-4	回線31-4	18.2	7.1	-	24	10.3	34.3	-	0.53	-	角	凝灰岩	
A・セ5	Ia	第36回-5	回線31-5	14.8	-	7.4	25.7	-	30.8	26.4	0.48	2	-	凝灰岩	
A・セ6	Ia	第36回-6	回線31-6	18.7	-	10	22.4	-	34.4	23.5	0.54	1.87	-	凝灰岩	
A・セ7	Ia	第36回-7	回線32-7	18.8	5.6	10	24	11.2	33.4	20.6	0.56	1.88	丸	凝灰岩	
A・セ8	Ia	第36回-8	回線32-8	17.6	-	8.6	23.2	-	29	22.2	0.51	2.05	-	凝灰岩	
A・セ9	Ia	第36回-9	回線32-9	22.4	3.2	10	23.7	7.8	34.2	23	0.65	2.24	三角	凝灰岩	
A・セ10	Ia	第37回-10	回線32-10	16	-	10	30.4	-	34.3	28.3	0.47	1.6	-	凝灰岩	
A・セ11	Ib	第37回-11	回線32-11	18.4	-	9.5	23.5	-	30.8	23.5	0.6	1.94	-	凝灰岩	
A・セ12	Ib	第37回-12	回線32-12	20.4	-	11	34	-	38.4	30.2	0.53	1.85	-	凝灰岩	
A・セ13	Ia	第37回-13	回線32-13	16.3	-	9	29.2	-	35.4	26.3	0.46	1.81	-	凝灰岩	
A・セ14	Ia	第37回-14	回線32-14	18	8.6	9	24.6	13	32.8	19.4	0.55	2	角?	凝灰岩	
A・セ15	Ia	第37回-15	回線33-14	18.6	-	10	-	-	33	21.6	0.56	1.86	-	凝灰岩	
A・セ16	Ia	第37回-16	回線33-14	18.4	4.2	9	25.7	-	32	20.4	0.58	2.04	丸?	凝灰岩	花斑
A・セ17	Ia	第37回-17	回線33-14	17	-	8	21.8	-	27.6	20	0.62	2.13	-	凝灰岩	花斑

第12表 地輪法量表

区・番号	グループ	図面番号	図版番号	法量 (単位cm)			石質	備考
				D	x	法量比(D/x)		
A・セ1	I a	第28図-1	図版23-1	11.8	39.7	0.3	凝灰岩	
A・セ2	I a	第28図-2	図版23-2	17.2	47	0.37	凝灰岩	
A・セ3	I a	第28図-3	図版23-3	11.7	42.8	0.27	凝灰岩	
A・セ4	I a	第28図-4	図版23-4	20	45	0.44	凝灰岩	
A・セ5	I a	第28図-5	図版23-5	10.8	38.8	0.28	凝灰岩	
A・セ6	I a	第28図-6	図版23-6	13.8	38	0.36	凝灰岩	
A・セ7	I a	第29図-7	図版24-7	20.6	37.2	0.55	凝灰岩	
A・セ8	I a	第29図-8	—	11.4	36.4	0.31	凝灰岩	
A・セ9	I a	第29図-9	図版24-8	11.2	38	0.29	凝灰岩	
A・セ10	I b	第29図-10	図版24-9	13	39	0.33	凝灰岩	
A・セ11	II b	第29図-11	図版24-10	10.8	38.1	0.28	凝灰岩	
A・セ12	II b	第29図-12	図版24-11	9.2	43.6	0.21	凝灰岩	
A・セ13	II b	第30図-13	—	10.4	37.2	0.28	凝灰岩	
A・セ14	II b	第30図-14	図版24-14	12.5	36.2	0.35	凝灰岩	
A・チ1	I a	第38図-1	図版33-1	27.4	65.5	0.42	凝灰岩	
A・チ2	I a	第38図-2	図版33-2	31	64	0.48	凝灰岩	
A・チ3	I a	第38図-3	図版33-3	18.4	51.2	0.36	凝灰岩	
A・チ4	I a	第38図-4	図版33-4	15.9	48.3	0.33	凝灰岩	
A・チ5	I a	第38図-5	図版33-5	16.6	51.6	0.32	凝灰岩	
A・チ6	I a	第39図-6	図版34-6	15.8	37	0.43	凝灰岩	
A・チ7	I a	第39図-7	図版34-7	11.8	37	0.32	凝灰岩	
A・チ8	I a	第39図-8	図版34-8	16	41.7	0.38	凝灰岩	
A・チ9	I a	第39図-9	図版34-9	9.1	38.5	0.24	凝灰岩	
A・チ10	I a	第39図-10	図版34-10	11.2	40	0.28	凝灰岩	
A・チ11	I a	第39図-11	図版34-11	17.4	47.1	0.37	凝灰岩	
A・チ12	I a	第39図-12	図版34-12	11	32.7	0.34	凝灰岩	
A・チ13	I a	第39図-13	図版34-13	10.2	36.6	0.28	凝灰岩	
A・チ14	I a	第39図-14	図版35-14	12.3	36.6	0.34	凝灰岩	
A・チ15	I a	第40図-15	図版35-15	9.2	39.4	0.23	凝灰岩	
A・チ16	I a	第40図-16	図版35-16	8.4	39.4	0.21	凝灰岩	
A・チ17	I a	第40図-17	図版35-17	10	34.8	0.29	凝灰岩	
A・チ18	I a	第40図-18	図版35-18	11.9	33.3	0.36	凝灰岩	
A・チ19	I a	第40図-19	図版35-19	11.4	38.6	0.3	凝灰岩	
A・チ20	I a	第40図-20	図版35-20	8.8	33.1	0.27	凝灰岩	
A・チ21		第40図-21	図版35-21	9.9	35	0.28	凝灰岩	表採
A・チ22		第40図-22	図版36-22	11.8	39.8	0.3	凝灰岩	表採
A・チ23		第40図-23	図版36-23	11.5	26.3	0.44	凝灰岩	表採
A・チ24	I b	第41図-24	図版36-24	13	38.6	0.34	凝灰岩	
A・チ25	I b	第41図-25	図版36-25	8.2	29	0.28	凝灰岩	
A・チ26	I b	第41図-26	図版36-26	11.4	39.4	0.29	凝灰岩	
A・チ27	I b	第41図-27	図版36-27	12.8	43.4	0.29	凝灰岩	
A・チ28	I b	第41図-28	図版36-28	15.3	43.4	0.35	凝灰岩	
A・チ29	I b	第41図-29	図版36-29	9.3	37.4	0.25	凝灰岩	
A・チ30	II a	第41図-30	—	9.5	36.9	0.26	凝灰岩	
A・チ31	II a	第41図-31	図版37-31	15	40	0.38	凝灰岩	
A・チ32	II a	第41図-32	図版37-32	15	36.2	0.41	凝灰岩	
A・チ33	II a	第42図-33	図版37-33	24.8	56.8	0.44	凝灰岩	
A・チ34	II a	第42図-34	図版37-34	25.4	53.3	0.48	凝灰岩	
A・チ35	II a	第42図-35	図版37-35	29	58.6	0.49	凝灰岩	
A・チ36	II a	第42図-36	—	12.2	34.4	0.35	凝灰岩	
A・チ37	II a	第42図-37	図版37-37	14.8	37.4	0.4	凝灰岩	
A・チ38	II a	第43図-38	図版37-38	12	34.2	0.35	凝灰岩	
A・チ39	II a	第43図-39	図版37-39	17	48.8	0.35	凝灰岩	
A・チ40	II b	第43図-40	—	18.9	51.8	0.36	凝灰岩	
A・チ41	II a	第43図-41	図版38-41	21.8	34.4	0.63	凝灰岩	露骨部

第13表 板碑法量表

区・番号	グループ	図面番号	図版番号	法量 (単位:cm)			厚さ	石質	部位	備考
				全長	幅	高さ				
A・イ1	Ia	第44図-1	図版38-1		24.4	17.3	凝灰岩	基部	工具痕有。復元	
A・イ2	Ia	第44図-2	図版38-2		24.4	17.3	凝灰岩	基部	工具痕有。復元	
A・イ3	Ia	第44図-3	図版38-3		26	18.3	凝灰岩	基部	磨擦有り	
A・イ4	Ia	第44図-4	図版38-4		34.6	21.4	凝灰岩	基部	工具痕有。	
A・イ5	Ia	第44図-5	図版38-5		24.9	17.3	凝灰岩	基部	工具痕有。	
A・イ6	Ia	第44図-6	図版38-6		25.6	17.6	凝灰岩	基部	工具痕有。	
A・イ7	Ia	第44図-7	図版38-7		24.6	17.8	凝灰岩	基部		
A・イ8	Ia	第44図-8	図版38-8		33.1	16	凝灰岩	基部		
A・イ9	Ia	第44図-9	図版39-9		35	20	凝灰岩	頂部		
A・イ10	Ia	第44図-10	図版39-10		46	24.1	凝灰岩	基部		
A・イ11	Ia	第44図-11	図版39-11		36.7	17	凝灰岩	基部		
A・イ12	Ia	第44図-12	図版39-12		32.9	17.5	凝灰岩	基部		
A・イ13	Ia	第44図-13	図版39-13		34.6	20.4	凝灰岩	基部		
A・イ14	Ia	第44図-14	図版39-14		33.4	17.9	凝灰岩	基部	全体の白変 一絶縁層有り	
A・イ15	Ia	第44図-15	図版39-15		38.2	20.1	凝灰岩	基部		

第14表 復元板碑法量表

区・番号	グループ	図面番号	図版番号	法量 (単位:cm)							石質	備考	
				a	b	c	d	e	f	g			h
A・イ16	Ia	第46図-16	図版46-1	(175.2)	25.2	17.5	10.2	7.8	104	14.6	12.3	凝灰岩	磨擦有り
A・イ17	Ia	第46図-17	図版46-2	(161.3)	24.8	17.9	11.7	8.4	98.2	42	16.5	凝灰岩	磨擦有り

\* ( ) は復元値。

## 第2節 B区の調査

### 1. 調査の概要

B区は、調査区の北東部、石塔群を検出したA区と、西側の丘陵部に挟まれた低地に位置する。表土を剥いだ後、掘り下げを行ったところ、第2層の黒色層から土師器の坏・皿とピット群が検出された。また東南部では凝濺じりの層が一面に広がり、ベルトの土層断面（第47図）から造成面であることが確認された。出土した遺物から中世のものと考えられる。ただピットなどの遺構は確認できなかった。石塔群を検出したA区に近い東北部では、地山の礫と土師器の破片が混ざっている箇所が検出された。土層断面を検討したところ、墓壇などの造成面であることが判明し、柱穴も検出され、掘立柱建物跡であることが確認された。また西側の丘陵の裾野にあたる所でも、ピット群が検出され、その並び方より2軒ないし3軒の掘立柱建物跡であることが確認された。丘陵の裾野部には宮崎層群から成る岩盤があり、調査前にはその岩盤が一部露出しており、掘り込みとみられる窪みと横穴状の遺構が開口していた。調査では、その岩盤を完全に露出させた。窪みの部分は、岩盤を掘り込んでひな壇を造り出していること、その上部に7本の板碑の形が刻まれていることが確認された。また開口していた横穴状の遺構は、当初は防空壕と考えられていた。内部に工具痕が残っており、入り口から天井・側面・床面などの工具痕と奥の部分の工具痕とを比較したところ、奥の部分の工具痕は新しいものであり、拡張されていることが確認された。さらにその前面を掘り下げたところ、河原石と五輪塔の一部が検出された。このことから、何らかの横穴状の遺構が、防空壕として拡張され使用されたと考えられた。

### 2. B区における中世の遺構

#### (1) 掘立柱建物跡（第5・48～51図）

掘立柱建物跡は、合計4軒検出された。B区の南西部の低地（磨崖板碑の正面）から3軒、石塔群の近くの東北部で1軒検出した（第5図）。その規模、主軸方向等については第15表に示したとおりである。南西部では掘立柱建物跡の柱穴以外にピットが数十個検出された。南西部の掘立柱建物跡の上層は包含層であり、遺物は中世の土師器の坏・皿が出土しているが、柱穴からは遺物は出土していない。この下層は粘質であり、遺物を含んでいないことから、この掘立柱建物跡は中世に営まれたもの推定される（第48図）。また東北部の掘立柱建物跡は、地山の褐色の礫層が混入した土が広がり、土師器の坏・皿の破片も一面に広がっていた。土層断面から建物の墓壇と考えられる。地山の礫と黒色土を混ぜた土に、土師器の皿・坏の破片を混ぜて、建物の墓壇を造成している（第49図）。また柱穴内からも土師器の坏・皿類が出土していることから中世の掘立柱建物であり、柱穴の深さや並び方から同じ位置で少なくとも2回の建て替え行われていると考えられる（第51図）。一部の柱穴内からは根石と考えられる石が検出され、一時期礎石をもつ建物が建っていたと考えられる。調査では建物の半分が検出されたためその規模は不明であるが、雨落ち溝と排水溝も検出された。排水溝の底部からは砂利が検出され、砂利が敷き詰められていたことが推定できる。排水溝は途中から確認できなかった。

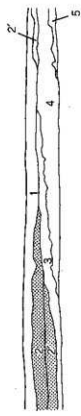
— L = 11.01m



(H)

- 1 表土
- 2 黒色 (Hue 7.5R 1/1) 起子が細かく、褐色のプロットが多く含む。土層の薄片を含む。
- 2' 黒色 (Hue 7.5R 1/1) 起子が細かく、褐色のプロットが多く含む。
- 3 黒色 (Hue 7.5R 2/1) 起子が細かく、褐色のプロットが多く含む。
- 4 黒色 (Hue 10R 2/1) 起子の起子が多く、サツマシロしている。
- 5 褐色 (Hue 10R 4/1) 遺物 (中葉の土層) の包含層。

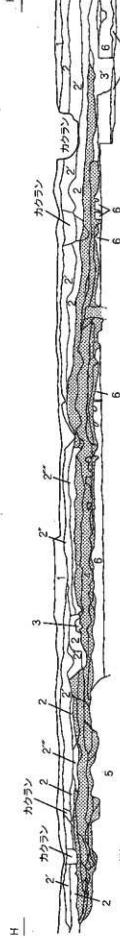
G' — L = 11.01m



0 1 2m

第47図 B区 土層断面図

H' — L = 11.40m

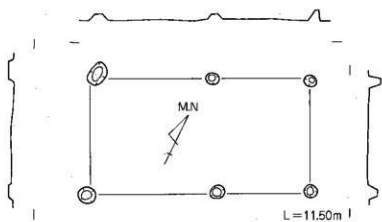


(H)

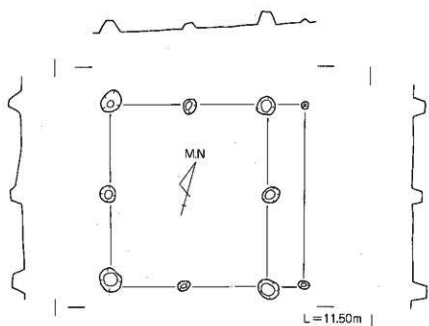
- 1 表土
- 2 褐色 (Hue 10R 4/1) 破葉でレキのプロットをまばらに含む。竹の葉が入る。
- 2' 褐色 (Hue 10R 4/6) 破葉でレキをまばらに含む。
- 2'' 褐色 (Hue 10R 4/1) 中や破葉で、まばらに炭化物とレキの小プロットを含む。土層片が含まれる。
- 3 褐色 (Hue 10R 4/6) 破葉で、まばらに炭化物とレキの小プロットを含む。土層片を含む。遺物層と含まれる。
- 4 褐色 (Hue 10R 4/6) 破葉でレキの破片と褐色の起子を含む。
- 5 褐色 (Hue 10R 3/2) 破葉でレキのプロットを含む。土層を含む。
- 6 褐色 (Hue 10R 3/2) 破葉でレキのプロットを含む。
- 7 褐色 (Hue 10R 1/1) 粘質。葉山層。

0 1m

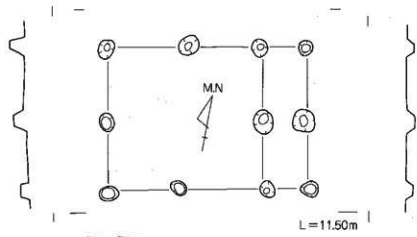
第49図 SB4・5 ベルト土層断面図



SB1



SB2



SB3



第48図 SB1・2・3 遺構実測図

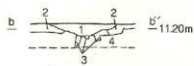




(注)

- 1 黒褐色 (Sho 7.5IX 3/2) 硬質でレキのブロックを含む。  
高層スコリアと思われる粒子を含む。
- 2 黒褐色 (Sho 10IX 3/2) 硬質でレキの小ブロックを含む。  
高層スコリアと思われる粒子を含む。  
土砂片を含む。
- 3 黒褐色 (Sho 7.5IX 3/2) 硬質でレキの粒子を少量含む。  
高層スコリアと思われる粒子を含む。
- 4 黒褐色 (Sho 7.5IX 3/2) 硬質で高層スコリアと思われる粒子を少量含む。
- 5 黒色 (Sho 10IX 2/1) 硬質で粘性がある。混入物はない。

第①図 SB 4・5 断面図

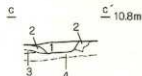


(注)

- 1 黒褐色 (Sho 10IX 3/2)  
硬質でレキの小ブロックを含む。  
高層スコリアと思われる粒子を含む。  
土砂片を含む。
- 2 黒褐色 (Sho 10IX 3/2)  
硬質でレキのブロックを含む。  
高層スコリアと思われる粒子を含む。
- 3 黒褐色 (Sho 10IX 3/2)  
硬質で高層スコリアと思われる粒子を少量含む。  
小レキの粒子を含む。
- 4 黒色 (Sho 10IX 2/1)  
硬質で粘性がある。混入物はない。



第②図 雨落ち溝断面図

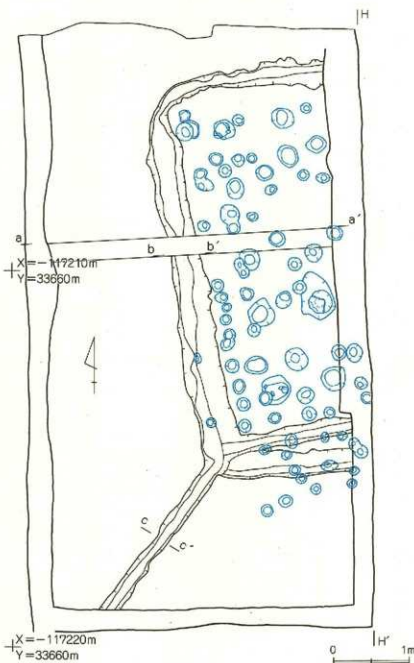


(注)

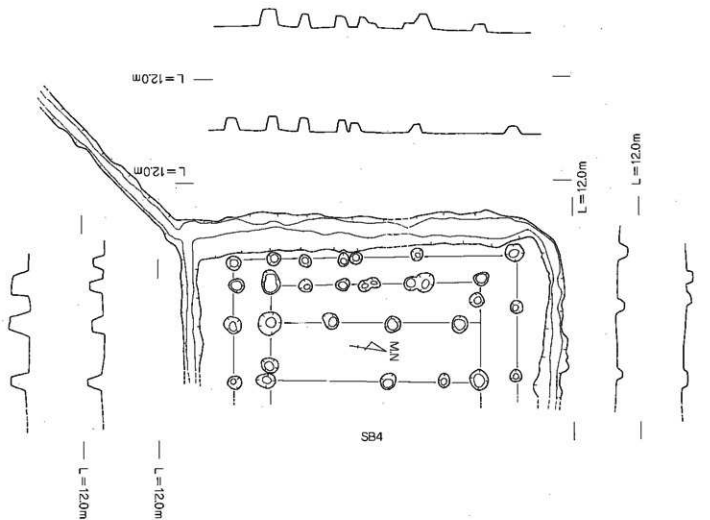
- 1 黒褐色 (Sho 10IX 3/2)  
硬質で小レキを少量含む。
- 2 黒褐色 (Sho 10IX 3/2)  
硬質で小レキを多量に含む。
- 3 黒褐色 (Sho 10IX 3/2)  
硬質で小レキブロックを含む。  
粘性がある。
- 4 黒色 (Sho 10IX 2/1)  
硬質で粘性がある。混入物はない。



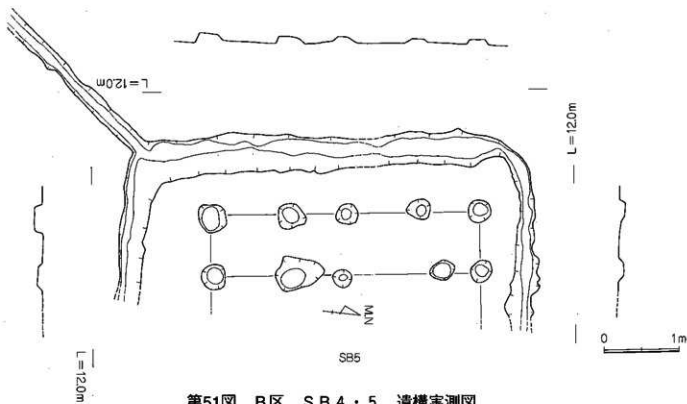
第③図 排水溝断面図



第50図 B区 SB 4・5 断面及び雨落ち溝・排水溝断面図



SB4



SB5

第51图 B区 SB4·5 遺構実測図

第15表 B区堀立柱建物跡一覧表

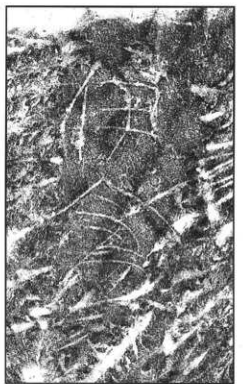
建物番号	柱間	桁行 (m)	梁行 (m)	法屋 (cm)		主軸方向	備 考
				桁行 (m)	梁行 (m)		
SB 1	2間×1間	2.4	1.2	1.2	1.2	N67° E	
SB 2	2間×2間	1.9	1.7	0.9	0.8	N75° E	
SB 3	2間×2間	1.7	1.6	0.8	0.8	N80° E	
SB 4	4間×(2+a)間	2.8	-	0.8	0.6	N84° E	建物規模不明
SB 5	4間×(2+a)間	3.6	-	1.0	0.9	N84° E	建物規模不明

(2) 磨崖板碑 (第52~54図)

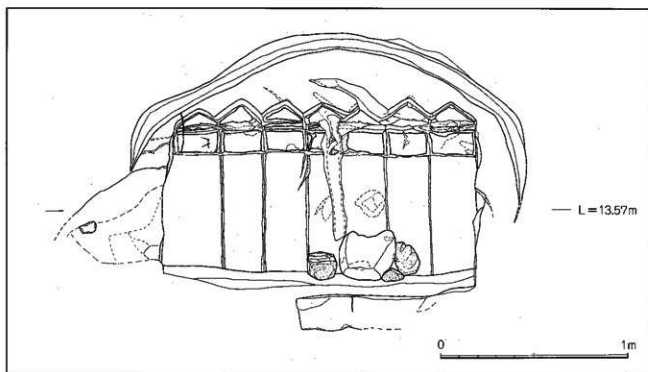
磨崖板碑とは、岩盤に板碑を彫ったものである。磨崖仏などの石仏を刻むことは奈良時代から行われており、中世になると五輪塔や板碑をも刻むようになる<sup>(1)</sup>。北側の標高20mの低丘陵部の裾野部に位置し、全長17.5m、高さ(最大高)4.5mの三角形の形に宮崎層群と呼ばれる岩盤を露出させ、ひな壇を造り出し、板碑を7本彫っている。上部には水切りのため、または覆い屋などの施設のためのものか不明であるが三角形の掘り込みがみられる。ひな壇は幅約170cm、奥行き約40cmあり、幅約25cmで高さ約95cmの板碑を7本彫っている。板碑の形状は、上部は三角形で二条線を彫り込み、額と呼ばれる部分が突出する九州独特の形状である。表面は風化の影響を強く受けており、墨書などは確認できなかった。7本の板碑が彫られていることから、「七本塔婆」<sup>(2)</sup>とよばれる供養のための施設と考えられる。岩盤には工具痕が明瞭に残っている部分が見られる。

(3) 横穴状遺構 (第55~56図)

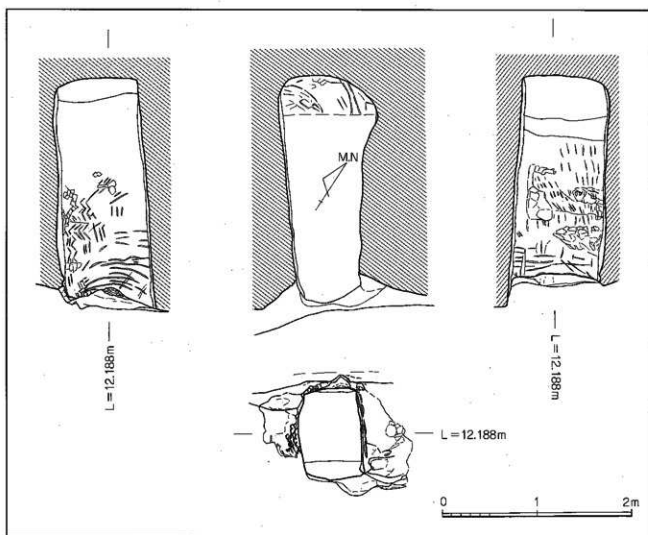
磨崖板碑の下部に、縦1.0m、横0.66m、奥行き2.45mの横穴状の遺構がある。入り口の形状は長方形に近く、床と壁、天井と壁の立ち上がりが直角に近く、穴の形状も長方形である。奥壁の工具痕はピッケルなどによるものであり、後世に拡張されている。壁・天井・床とも工具痕が明瞭に残り、鑿などの道具で彫られていると考えられる。入り口から向かって右側の壁に「伊倉」という文字が刻まれている(第56図)。調査前にはすでに開口しており、防空壕として使用されたとの地元の方の話もあり、内部にはガラスや陶器の破片が入っていた。しかし、入り口前からは、河原石と五輪塔の一部が検出され、磨崖板碑との位置関係からも、磨崖板碑に関連する遺構と考えられる。



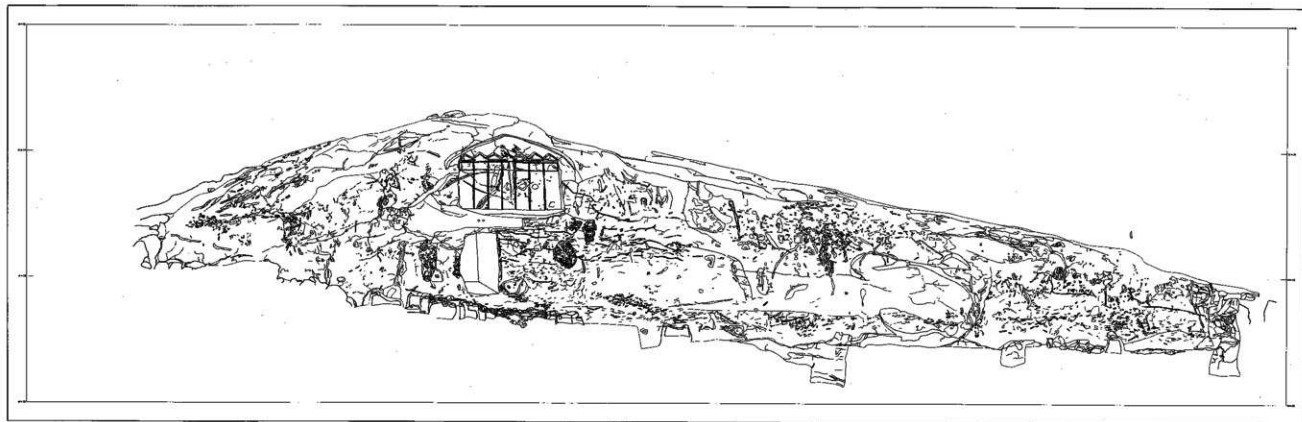
第56図 横穴状遺構壁面陰刻文字 (S=1/4)



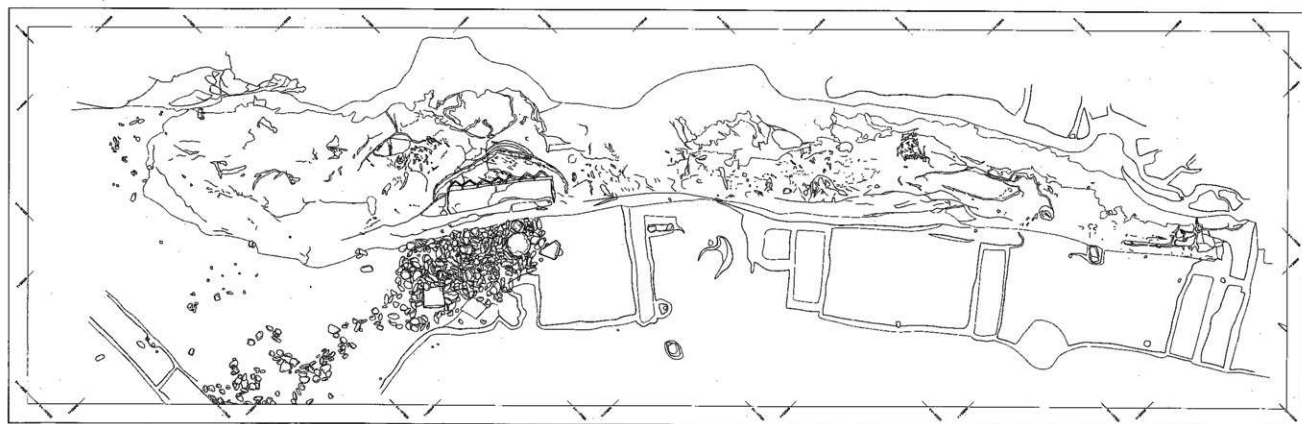
第54図 磨崖板碑正面図(3)



第55図 横穴状遺構実測図



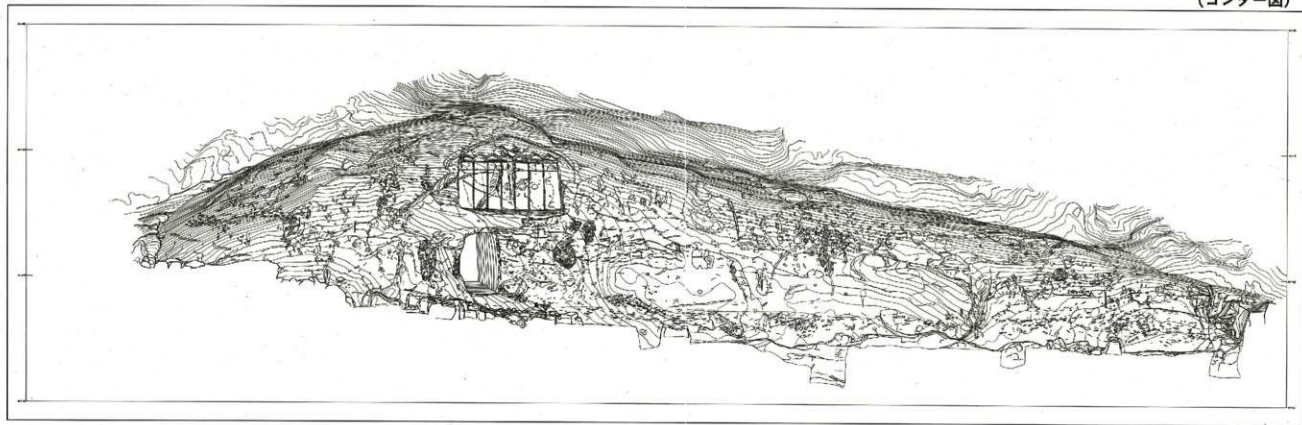
————— (立面)



————— (平面)

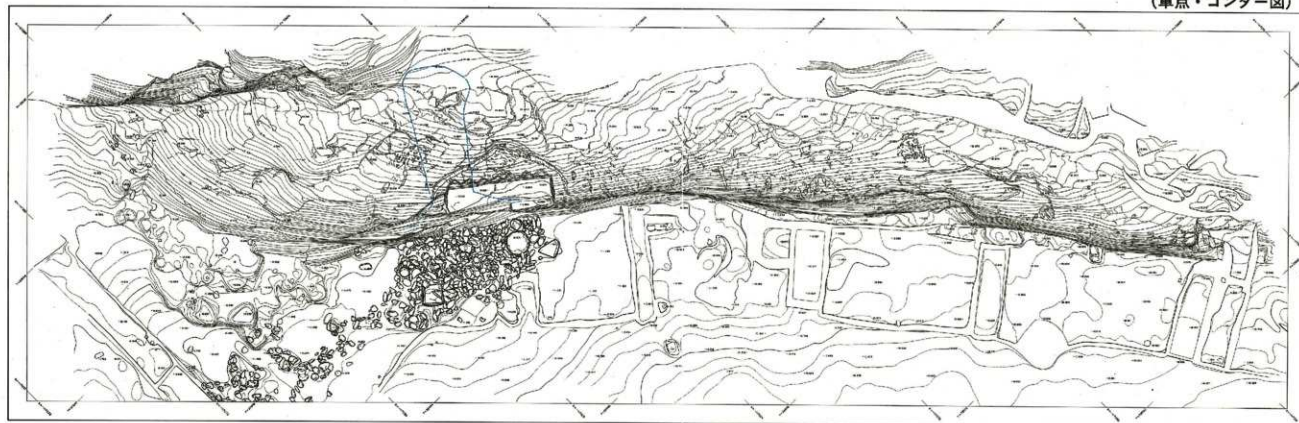
第52図 磨崖板碑立面図及び平面図(1)

(コンター図)



(立面)

(単点・コンター図)



(平面)

第53図 磨崖板碑立面図及び平面図(2)

#### (4) 出土遺物 (第57~63図)

B区では、掘建柱建物跡の柱穴・造成面・包含層から中世の土師器、輸入陶磁器が出土している。また、古代の遺物、古墳時代の須恵器が出土し、陶磁器類を表採している。これらのものを以下使用目的及び器種ごとに分け説明を行っていくことにする。

##### ①土師器 (35~193)

包含層とSB4・5の造成面及び柱穴内から土師器の坏・皿が出土した。特にSB4・5の基壇と考えられる造成面からは坏・皿の破片が多量に出土した。

坏は口径が11~15cmあり、12~13cmの口径のものが多い。外面・内面の調整は回転ナデであり、焼成は堅緻である。底部切り離し技法は糸切りであり、粘土の張り出しがあるものもある。形状は大きく4つのタイプに分けられる。

- (A) 底部と体部の境目が明瞭で、体部が直線的に伸びるタイプ。35~38と88~90、132~135である。36~38の底部には粘土の張り出しがある。133~135は底部が高台を有する感じに調整している。
- (B) 底部からの立ち上がりやや丸みもち、体部が直線的に外方に伸びるタイプ。39~43と91~96、136~142である。39~40の外面には工具によるナデの痕が明瞭に残る。41は粘土の張り出しがみられ、42の内面には工具によるナデの痕が残る。91と93、96、137~142の底部には粘土の張り出しがある。
- (C) 底部からの立ち上がり丸みもち、体部がふくらみ気味のタイプ。44~51と97~99、143~148である。44、46、49、50は粘土の張り出しがあり、44と49は高台を有する感じである。97の内・外面に赤色化している部分がある。98、99、146と148の底部に粘土の張り出しがある。147と148は内・外面とも色調が赤褐色である。
- (D) 底部からの立ち上がり丸みもち、体部中央で一段凹み、口縁部が外方へ伸びるタイプ。52~55と100、149~154である。52の底部の内面には、工具による同心円状の調整の痕が残る。100の底部に粘土の張り出しがある。

皿は口径が7~10cmで、かわらけと呼ばれる口径が7~9cmの小皿がほとんどである。外面・内面の調整は回転ナデであり、焼成は堅緻である。底部切り離し技法はほとんど糸切りである。かわらけと呼ばれる小皿の形状は、大きく4つのタイプに分けられる。

- (a) 底部からの立ち上がり丸みもち、体部がふくらみ気味で、口縁部の先端が丸みをもつタイプ。56~65と101~106、159~168である。56~65は底部が薄手で平らに調整している。102と103は底部内面の中心が凹み、104の底部内面はへそ状になっている。159~168の底部は凹んでいる。163は内・外面とも赤褐色であり、底部に粘土の張り出しがみられる。
- (b) 底部と体部の境目が明瞭で、体部が外方に伸び口縁部の先端が丸みをもつタイプ。66~73と107~110、169である。66~73の底部は厚く内面は凹みがみられる。107と118の底部内面は凹んでいる。169の形はひずんでおり、胎土に小石などが混入していたためか、底部に孔が空いている。

(c)底部と体部の境目が明瞭で、体部が丸みをもち、口縁部の先端が尖り気味のタイプ。74~78と111~123、170~178である。74~78の底部は薄く平らに調整されている。111~123の底部内面はへそ状にやや盛り上がっている。170と177の底部には粘土張り出しがみられる。

(d)底部と体部の境目が直線的で、口縁部の先端が尖り気味のタイプ。79~87と124~131、179~193である。79~87は底部が厚く内面は凹状であり、80は片口状である。124~128の底部内面はへそ状に盛り上がっている。131は色調が赤褐色系である。181~183の内・外面の一部は黒色化している。189は片口状である。

155~158は口径が9~10cmで、底部からの立ち上がりが丸みをもち、口縁部が尖り気味である。

風化気味である。

なお、SB 1~3が検出された西部をⅠ区、SB 4が検出された西部をⅡ区と分けて図版・観察表は掲載している。

## ②古代の遺物 (194・195)

包含層中から、古代の捏ね鉢が出土した。194は口縁部であり、口縁部外面に軸がみられる。内側に強く横ナアする。外面に粘土輪積みの痕跡が明瞭で、片口付きである。東播系か。195は底部から胴部であり、底部の切り離しがヘラ切りである。外面が黒色化しているが、全体的に風化気味である。

## ③古墳時代の遺物 (196~203)

古墳時代の須恵器が数点出土している。196は土師器の壺の頸部である。頸部はくの字に曲がり、内面に指押さえの跡がみられる。197は土師器の壺の口縁部である。196~197は風化が著しい。198は須恵器の壺の頸部である。199は土師器の壺の胴部である。200~202は須恵器の坏身である。200と201は立ち上がりが斜め上方に伸び、端部は丸く、段を有しない。202は立ち上がりが斜め上方に伸び途中から直に立ち上がる。天井部はヘラ削りを施し、体部は横ナアを施す。202の受部と胴部の間に一条の沈線が施される。203は須恵器の甕の胴部である。

## ④陶磁器 (204~211)

輸入陶磁器が5点出土し、他は表採した。204は青磁碗の口縁部で、外面に蓮弁文がみられ、中国宋代(13~14世紀)のものである。205は白磁碗の口縁部で、中国宋代(13~14世紀)のものである。206~207は中国(16世紀)の青磁碗である。206は口縁部~胴部で、外側面に下から上への花卉状の沈線が施される。207は胴部~底部で、外面に格子状の沈線が施される。208は碗の底部で貫入がみられる。縮緬高台で肥前である。209は唐津(16~17世紀)の折縁皿の口縁部である。210は白磁の瓶の底部である。内面にも施軸されているが、焼成不良である。中国(16世紀)のものである。211はお猪口の口縁~底部である。外面に草文が施される。産地及び時代は不明である。



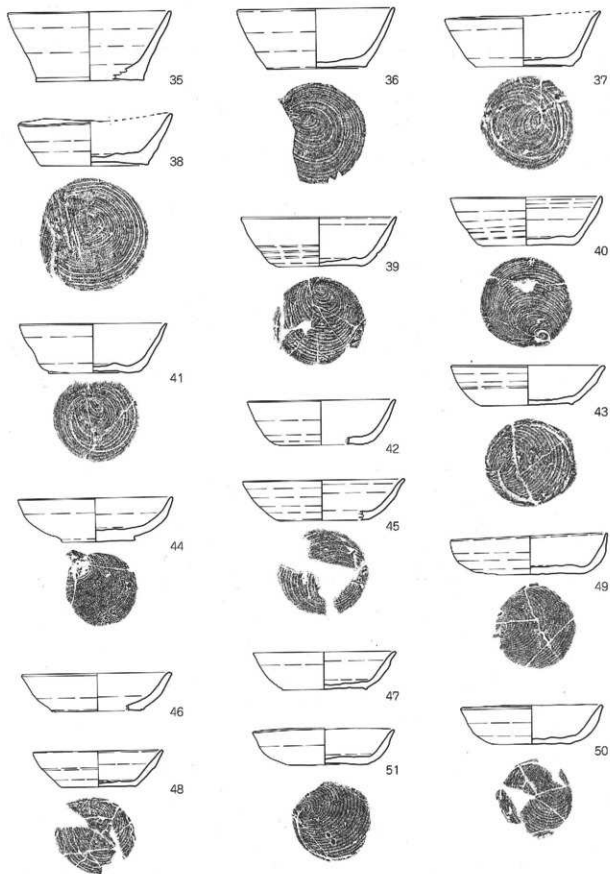
⑤その他 (212~215)

212は瓦器の壺の口縁部である。213は土鍾である。214は瓦質で形状が円筒形、孔が貫通しているが、器種不明である。215も器種不明であるが、内面に煤が付着している。

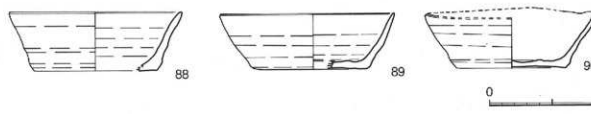
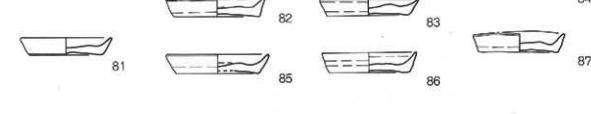
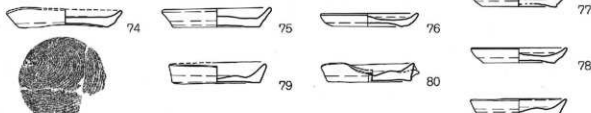
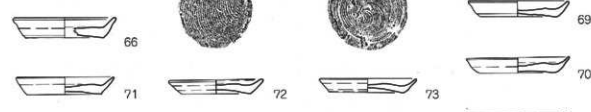
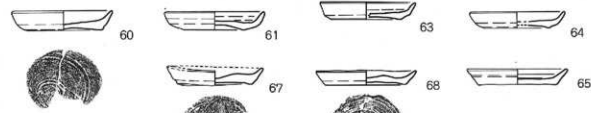
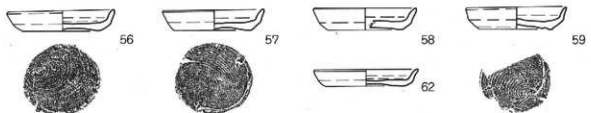
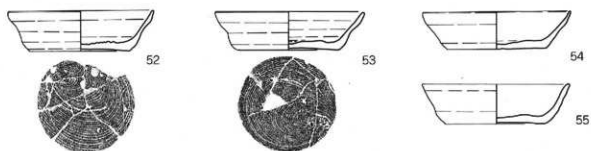
(注)

(1) 播磨定男『中世の板碑文化』1989年、東京美術

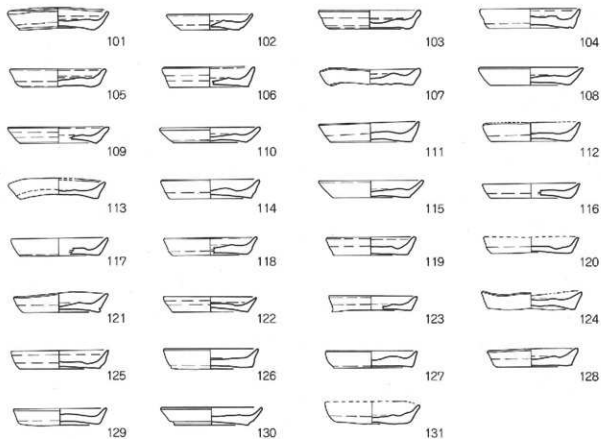
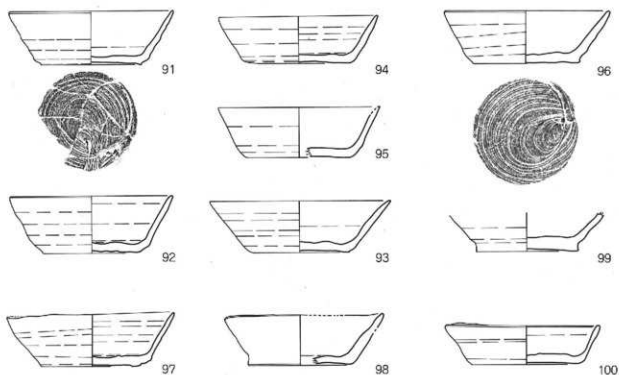
(2) 吉井敏幸氏のご教示による。



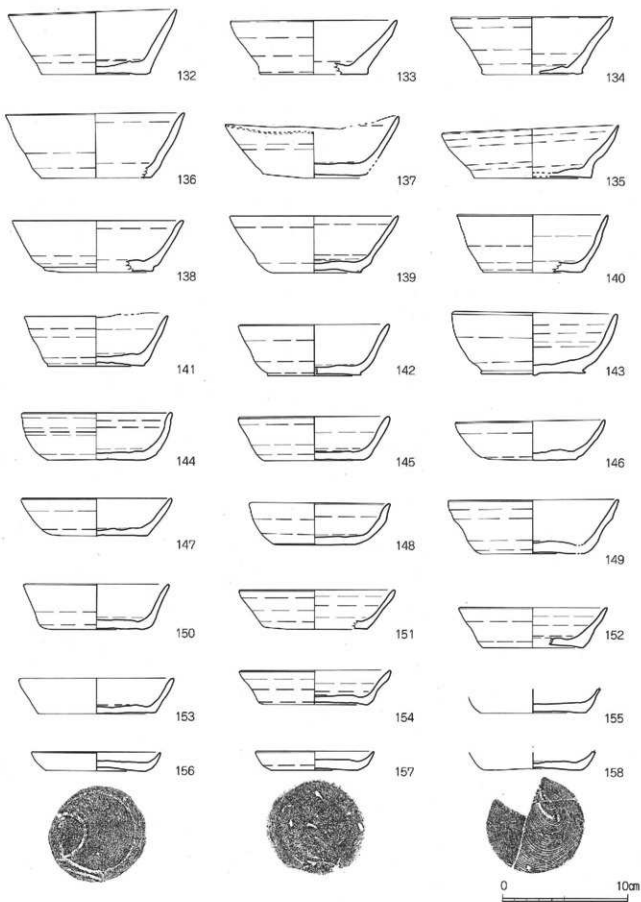
第57图 B区 出土土師器(1) <BI区>



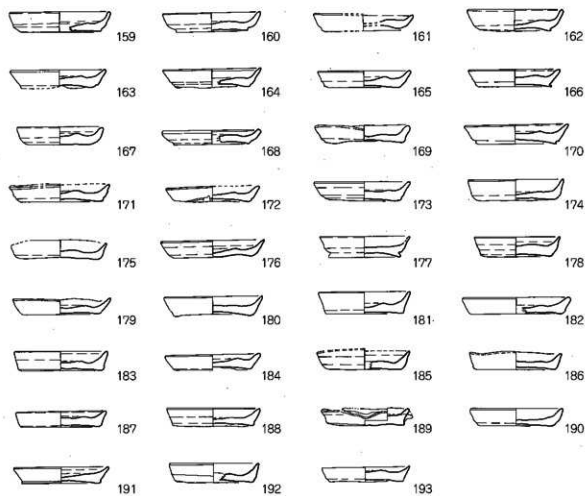
第58図 B区 出土土師器(2) <BI区>



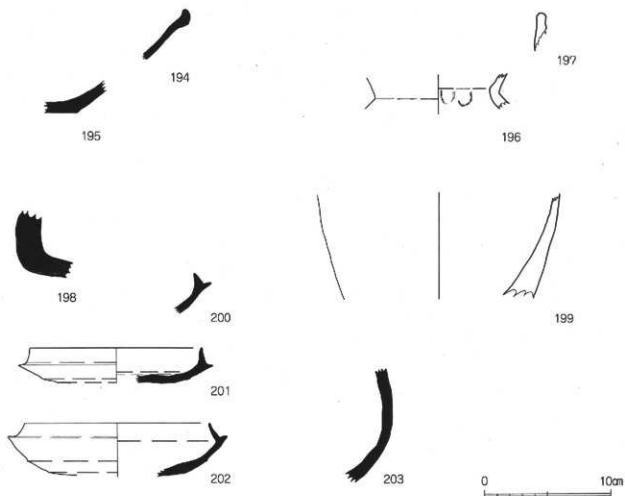
第59图 B区 出土土師器(3) < BⅡ区 >



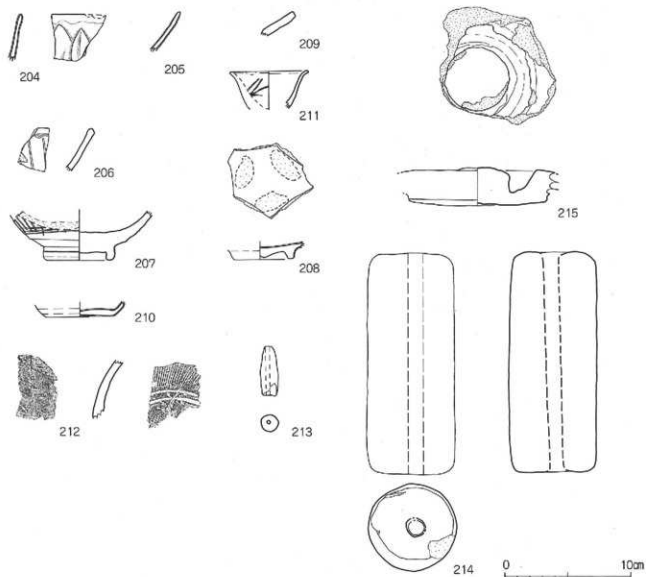
第60图 B区 出土土師器(4) <B II区>



第61图 B区 出土土師器(5) <BⅡ区>



第62図 B区 出土遺物(1)



第63图 B区 出土遗物(2)



第16表 B区出土土師器観察表(1)

\*( )は推定値。

遺物 番号	種別	器種・ 部位	出土 地点	法差 (cm)			口径・高さ		色調		胎土の特徴	底部	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
35	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(12.85)	(8.7)	(5.5)	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	3mm以下で赤褐色の砂粒を含む。	糸切り	
36	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(12.5)	(8.0)	4.75	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	微細な黒色-黒褐色の砂粒を含む。	糸切り	薄手。
37	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	12.3	7.8	4.4	刷転ナテ	刷転ナテ	淡黄 (2.5Y 8/3)	淡黄 (2.5Y 8/3)	1mm以下の赤褐色の砂子(鉄分)、微細な キラキラ光る黒砂粒を含む。	糸切り	薄手。 酸化斑。
38	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	12.1	8.5	4	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	微細なキラキラ光る黒砂粒を含む。焼丸。	糸切り	
39	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	12.3	6.9	3.95	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (10YR 7/4)	にぶい 黄 (10YR 7/4)	2mm以下で赤褐色の砂粒を含む。焼丸。	糸切り	
40	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	12.05	7.4	3.9	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	1mm以下で赤褐色の砂粒を含む。焼丸。	糸切り	
41	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	11.65	7.2	3.95	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	糸切り	
42	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(11.7)	(7.3)	(3.6)	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (10YR 7/3)	にぶい 黄 (10YR 7/3)	2.5mm以下の赤褐色の粒。微細な透明の硝石 を含む。	糸切り	
43	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	12.0	7.0	3.2	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	1mm以下の黒い微細砂粒を含む。	糸切り	
44	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	12.2	5.9	3.4	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	5~1mmの赤褐色の砂子と1mm以下の黒色 の砂子を含む。	糸切り	
45	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(12.8)	(7.4)	(3.2)	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	3mm以下で赤褐色の砂粒を含む。	糸切り	
46	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(11.9)	(6.8)	(3.0)	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	1mm以下で赤褐色の砂粒を含む。	糸切り	
47	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(11.1)	(6.7)	(3.0)	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (10YR 7/3)	1mm以下で赤褐色の砂粒を含む。	糸切り	
48	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(10.2)	(5.9)	(2.85)	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	3mm以下の赤褐色の砂子、1mm以下の灰色 の砂子を含む。	糸切り	形状が びつ。
49	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	12.35	7.2	3.3	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 7/4)	4mm大の赤褐色の砂子。微細な光沢のある 砂子を含む。	糸切り	
50	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	11.2	6.2	3.0	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	底部に1mmぐらいの黒褐色小粒(赤褐色)が みられる。径2mm以下の粒、光沢のある 黒色の砂子を含む。	糸切り	
51	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	11.1	6.4	2.9	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	光沢のある黒色の砂子。径2mm以下の赤 褐色の砂子を含む。	糸切り	
52	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	11.45	7.9	3.2	刷転ナテ	刷転ナテ	灰白 (10YR 8/2)	灰白 (10YR 8/2)	1mm以下で灰色-褐色の砂粒を含む。	糸切り	
53	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	11.85	7.9	3.05	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (10YR 8/2)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	2mm以下で赤褐色の砂粒を少量含む。	糸切り	
54	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(11.7)	(7.8)	(2.95)	刷転ナテ	刷転ナテ	灰白 (10YR 8/2)	灰白 (10YR 8/2)	2mm大の灰色-黒褐色の粒。微細な黒色 の砂粒を含む。	糸切り	酸化斑。
55	土師器	杯口縁- 底面	B1区 池田	(11.6)	(7.9)	(1.7)	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	最大3mmの赤褐色の鉄質土を含む(黒鉛小 粒)。	糸切り	酸化斑。
56	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	8.4	5.9	1.25	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	2.5mm以下で赤褐色の砂粒。透明な細小 砂子を含む。	糸切り	
57	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	8.0	6.1	1.6	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (10YR 7/3)	にぶい 黄 (10YR 7/3)	1mm以下の赤褐色の砂子。半透明の細小 砂子を含む。	糸切り	
58	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	(8.2)	(6.0)	(1.7)	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	1mm以下の赤褐色の砂子。微細な灰色の 砂子を含む。	糸切り	
59	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	8.0	5.7	1.8	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (10YR 7/3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1mm以下の赤褐色の砂子。半透明の細小 の砂子を含む。	糸切り	
60	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	(7.9)	(6.2)	(1.6)	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の砂子。微細な透明な 硝石を含む。	糸切り	
61	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	(7.8)	(5.0)	(1.5)	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	1mm以下の赤褐色の砂子を少量含む。	糸切り	
62	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	(8.1)	(6.2)	(1.3)	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	1mm以下の灰色-赤褐色の砂子。微細な半 透明の砂子を含む。	糸切り	
63	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	7.5	5.6	1.4	刷転ナテ	刷転ナテ	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の砂子。微細な透明の硝 石を含む。	糸切り	
64	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	7.4	5.2	1.3	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	にぶい 黄 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の砂子。微細な黒色の 粒を含む。	糸切り	
65	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	7.9	6.3	1.3	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (7.5R 8/4)	浅黄橙 (7.5R 8/4)	1~3mm程の赤褐色の粒を含む。	糸切り	
66	土師器	小皿 口縁- 底面	B1区 池田	7.98	6.19	1.6	刷転ナテ	刷転ナテ	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	焼丸。1mm程の赤褐色の砂子を含む。	糸切り	

第17表 B区出土土器器観表(2)

\*( )は推定値。

遺物 番号	種別	器種・ 部位	出土 地点	度量 (cm)			子・裏・支脚はか		色		胎土の特徴	底部	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
67	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.5	5.95	1.6	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/4)	赤い黄緑 (10R 7/4)	微細な透明の輝石、1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
68	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.95	6.5	1.18	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (10R 8/4)	浅黄緑 (10R 8/4)	3.5mm以下の赤褐色の粒子、1mm以下の灰色の粒子を含む。	赤切り	
69	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.9	6.1	1.3	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色・灰色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	
70	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	8.1	6.3	1.75	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (10R 8/4)	浅黄緑 (10R 8/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を少量、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	
71	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	(7)	(5.7)	(1.4)	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/3)	赤い黄緑 (10R 7/3)	1mm以下の灰色の粒子を含む。	赤切り	
72	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	(7.5)	5.5	1.1	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (7.5R 8/4)	浅黄緑 (7.5R 8/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
73	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.6	5.9	1.1	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (7.5R 8/4)	浅黄緑 (7.5R 8/4)	1mm以下の灰色の粒子を含む。	赤切り	
74	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	9.1	7	1.6	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	赤い黄緑 (7.5R 7/3)	1mm以下の灰・灰色の粒子を少量含む。	赤切り	
75	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	8.5	6.9	1.45	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	微細な赤褐色、3mm以下で赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
76	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.6	5.4	1	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (7.5R 8/4)	浅黄緑 (7.5R 8/4)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な半透明の輝石を含む。	赤切り	
77	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.7	5.85	1.25	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	1mm以下で赤褐色の粒子を含む、微細な半透明の輝石を含む。	赤切り	
78	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.6	5.75	1.2	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (5R 7/4)	赤い黄緑 (5R 7/4)	3mm以下で赤褐色の粒子、微細な灰色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	
79	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.55	1.65	7	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (7.5R 8/4)	浅黄緑 (7.5R 8/4)	5mm以下の赤褐色、灰色の粒子を含む、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	
80	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.3	6.7	1.55	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 6/4)	赤い黄緑 (10R 6/3)	微細な透明の輝石、1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
81	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7	5.7	1.4	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/3)	赤い黄緑 (10R 7/3)	1mm以下の灰色の粒子を含む。	赤切り	
82	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.9	6.86	1.37	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 7/3)	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
83	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.28	6.6	1.3	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/3)	赤い黄緑 (10R 7/3)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	
84	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.5	6.4	1.65	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (10R 8/3)	浅黄緑 (10R 8/4)	3mm以下の赤褐色の粒子、1mm以下の灰色、褐色の粒子を含む。	赤切り	
85	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	8.1	1.55	6.6	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (10R 8/4)	浅黄緑 (10R 8/4)	2mm以下の赤褐色・灰色の粒子を少量含む、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	
86	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.45	6.45	1.57	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 7/3)	赤い黄緑 (7.5R 7/3)	1mm以下で赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
87	土師器	小瓶口縁一部分	BⅠ区 北谷	7.2	6.3	1.8	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/3)	赤い黄緑 (10R 7/3)	微細な透明の輝石、1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
88	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	13.6	9.7	4.7	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/3)	浅黄緑 (10R 8/3)	2.5mm以下の赤褐色の粒子、微細な赤褐色及び赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
89	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	13.8	8.5	4.45	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/3)	赤い黄緑 (10R 7/3)	1mm以下の赤褐色・褐色の粒子を含む。	赤切り	
90	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	13.4	8.8	4.4	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (10R 7/3)	赤い黄緑 (10R 7/3)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	
91	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	13	7.9	4.3	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 6/3)	赤い黄緑 (7.5R 6/3)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
92	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	12.8	7.7	4.6	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (7.5R 8/4)	浅黄緑 (7.5R 8/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
93	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	14.35	7.95	4.1	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (10R 8/4)	浅黄緑 (10R 8/3)	1mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り	
94	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	12.55	8.1	3.75	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
95	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	12.8	8	4	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (7.5R 8/4)	赤い黄緑 (7.5R 7/4)	2.5mm以下の赤褐色の粒子、微細な灰色・透明な輝石を含む。	赤切り	
96	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	12.95	8.5	4.25	回転ナテ	回転ナテ	浅黄緑 (10R 8/3)	浅黄緑 (10R 8/3)	1mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り	
97	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	13.2	8.8	4.15	回転ナテ	回転ナテ	赤い黄緑 (2.5R 6/4)	赤い黄緑 (2.5R 6/4)	4mm以下で灰色の粒子、1mm以下で赤褐色の粒子を含む。	赤切り	内・外面とも赤褐色化。
98	土師器	坪口縁一部分	BⅠ区 北谷	12.5	8.15	4	回転ナテ	回転ナテ	灰白 (10R 8/2)	浅黄緑 (7.5R 8/3)	1mm以下の無灰色の粒子を含む。	赤切り	黒化焼附。

第18表 B区出土土師器観察表(3)

\* ( )は推定値。

遺物番号	模刻	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			手・・・・・		色 調		胎土の特徴	底部	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
99	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	8.1			回転ナデ	回転ナデ	灰青 (10R 7/3)	浅黄橙 (7.5R 6/2)	微細な赤褐色、灰色の粒子を含む。	糸切り	
100	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	12.2	8.4	3.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/4)	浅黄橙 (7.5R 6/4)	3mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
101	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.95	5.9	1.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/3)	浅黄橙 (10R 6/3)	3mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
102	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	6.7	4.7	1.25	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/3)	浅黄橙 (10R 6/3)	2.5mm以下の赤褐色の粒子、微細な灰色の粒子を含む。	糸切り	
103	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.9)	(6.3)	1.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/4)	浅黄橙 (10R 6/4)	底唇に7mmの浅黒小帯(赤褐色)があらわす。	糸切り	
104	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.9	6.7	1.55	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/4)	浅黄橙 (10R 6/4)	微細な灰色・褐色の粒子、光沢のある粒子を含む。	糸切り	
105	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.4)	(5.7)	1.45	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/3)	浅黄橙 (10R 6/3)	3mm以下の赤褐色の粒子、微細な灰緑・黒色粒子を含む。	糸切り	
106	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.7)	(6.3)	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	灰青 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な灰色・透明の輝石を含む。	糸切り	
107	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.8	6.8	1.25	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	灰青 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を少量含む。微細な灰色、透明な輝石を含む。	糸切り	
108	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	8.1	6.3	1.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/4)	浅黄橙 (10R 6/4)	1mm以下の赤褐色の粒子、灰色の粒子を含む。	糸切り	黒化灰緑。
109	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.1)	(6.2)	(1.3)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/4)	灰青 (10R 7/2)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
110	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.8	5.8	1.25	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/4)	浅黄橙 (7.5R 6/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
111	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.85	6.6	1.65	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/3)	浅黄橙 (10R 6/4)	2mm以下の灰色・灰色の粒子、微細な透明の輝石を少量含む。	糸切り後 へう切り 痕。	
112	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.6	6.2	1.45	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/3)	浅黄橙 (10R 6/3)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
113	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.6	6.2	1.55	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/3)	浅黄橙 (7.5R 6/3)	1~1.5mmの赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
114	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.7)	(6.4)	1.5	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	灰青 (7.5R 7/4)	1.5mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	糸切り	
115	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	8.25	6.1	1.35	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/3)	浅黄橙 (7.5R 6/3)	2mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	糸切り	
116	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.7	5.4	1.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/3)	浅黄橙 (7.5R 6/4)	微細な赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
117	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.5)	(6.2)	(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/3)	灰青 (10R 7/2)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	糸切り	
118	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.3)	(5.9)	(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/4)	浅黄橙 (10R 6/4)	1mm以下の赤褐色・灰色の粒子を少量含む。	糸切り	
119	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(7.0)	(6.0)	1.45	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	灰青 (7.5R 7/4)	2mm以下の赤褐色・灰色の粒子を少量含む。	糸切り	
120	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.5	6.2	1.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/3)	浅黄橙 (7.5R 6/4)	1~2mmの赤褐色の粒子を含む。	糸切り	黒化灰緑。
121	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.4	6.1	1.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/4)	浅黄橙 (7.5R 6/3)	微細な灰色・赤褐色の粒子、透明な輝石を含む。	糸切り	
122	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.35	6.1	1.2	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	灰青 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を少量含む。	糸切り	
123	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	6.95	6.2	1.28	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	浅黄橙 (7.5R 6/4)	2mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	糸切り	
124	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.8	6.8	1.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/4)	浅黄橙 (7.5R 6/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
125	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.7	6.3	1.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/4)	浅黄橙 (10R 6/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	底唇に孔有り。
126	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.5	6.45	1.65	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10R 6/4)	浅黄橙 (10R 6/4)	2mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	糸切り	
127	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.1	6.3	1.3	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	灰青 (7.5R 7/4)	1mm以下の赤褐色、透明な輝石を含む。	糸切り	
128	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.05	6	1.5	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (7.5R 7/4)	灰青 (7.5R 7/4)	微細な赤褐色・灰色の粒子、透明な輝石を含む。	糸切り	
129	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	7.35	(6.0)	1.35	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5R 6/4)	浅黄橙 (7.5R 6/4)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
130	土師器	小口縁・底唇	BⅡ区 D114	(8.0)	(5.8)	1.4	回転ナデ	回転ナデ	灰青 (10R 7/2)	灰青 (10R 7/2)	微細な透明の輝石を含む。	糸切り	

第19表 B区出土土器観察表(4)

\*( )は推定値。

遺物 番号	種別	器種・ 部位	出土 地点	法量 (cm)			口径・直径		口径・直径		色 調		胎土の特徴	底部	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面					
131	土師器	小皿 口縁部	BⅡ区 BⅠ内	7.48	5.55	1.75	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 7/4)	灰白 (10YR 7/6)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	形状がいびつ。 赤褐色系。		
132	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	13.2	8.6	5	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (7.5YR 7/4)	灰白 (7.5YR 7/4)	3mm以下で黒褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
133	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(13.1)	(8.6)	4.25	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/4)	2mm以下の赤褐色の粒子を少量、微細な黒色の粒子を含む。	赤切り			
134	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	12.7	8	4.6	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/3)	灰白 (7.5YR 7/4)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な黒色の粒子を含む。	赤切り			
135	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	14.9	9.25	3.9	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 6/3)	灰白 (10YR 6/3)	1mm以下で赤褐色の粒子を含む。	赤切り	形状がいびつ。		
136	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(14.15)	(5.1)	8.75	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/4)	1mm以下の褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り			
137	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	13.6	7.9	4	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/3)	浅黄褐色 (10YR 8/3)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	形状がいびつ。		
138	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	13.5	8.5	4.1	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (7.5YR 7/3)	灰白 (7.5YR 7/3)	1mm以下の黒色の粒子を含む。	赤切り			
139	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	13.3	7.4	4.5	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	2mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
140	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(11.7)	(6.8)	4.6	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 7/3)	灰白 (10YR 7/3)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り			
141	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	11.4	7.7	4	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 7/3)	灰白 (10YR 7/3)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
142	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(11.8)	(7.4)	4.1	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	2mm以下の褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り			
143	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	12.8	8.3	5.1	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 7/2)	灰白 (10YR 7/2)	1mm以下の赤褐色・黒褐色の粒子を含む。	赤切り			
144	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	11.6	7.5	3.8	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/3)	浅黄褐色 (10YR 8/3)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り			
145	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(11.8)	(8.05)	3.5	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	2mm以下の褐色・灰色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
146	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(11.7)	(6.95)	3.2	同転ナテ	同転ナテ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り	赤褐色系。		
147	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	11.6	7.9	3	同転ナテ	同転ナテ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の黒色の粒子を含む。	赤切り	赤褐色系。		
148	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	11	6.6	3.3	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 7/3)	灰白 (10YR 7/3)	4mm以下の赤褐色の粒子、微細な黒褐色の粒子を含む。	赤切り			
149	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(13.3)	(8.5)	4.3	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 6/3)	灰白 (10YR 6/3)	1mm以下の赤褐色・黒色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
150	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	11.3	8	3.65	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 7/3)	灰白 (10YR 7/3)	2mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石・黒色の粒子を含む。	赤切り	黒化灰味。		
151	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(12.25)	(8.0)	(3.15)	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/4)	1.5mm以下の赤褐色・黒褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
152	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(11.6)	(7.9)	(3.2)	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/4)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な黒褐色の粒子・透明の輝石を含む。	赤切り			
153	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(12.2)	(9.35)	2.85	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	2mm以下の褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り			
154	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	11.9	8.5	2.75	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/4)	2mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
155	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	8.25	7.9	1.5	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/3)	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な黒褐色の粒子を含む。	赤切り			
156	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	10.2	7.9	1.5	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/3)	微細な赤色・褐色の粒子を含む。	赤切り			
157	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	9.3	6.9	1.5	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 8/2)	灰白 (10YR 8/2)	1mm以下の赤褐色・黒色の粒子を含む。	赤切り			
158	土師器	杯 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	7.75	7.75	1.5	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/3)	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	2mm以下の褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り			
159	土師器	小皿 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	7.8	6.4	1.6	同転ナテ	同転ナテ	灰白 (10YR 7/3)	灰白 (10YR 7/3)	1mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り			
160	土師器	小皿 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	7.7	5.6	1.5	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/3)	灰白 (10YR 7/3)	1mm以下の赤褐色の粒子、微細な透明の輝石を含む。	赤切り			
161	土師器	小皿 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(7.8)	(6)	(1.5)	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/5)	微細な黒色の粒、透明な光沢粒。2mm以下の赤褐色を含む。	赤切り			
162	土師器	小皿 口縁部	BⅡ区 BⅡ外	(7.45)	5.6	1.75	同転ナテ	同転ナテ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	浅黄褐色 (10YR 8/3)	2mm以下の褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り			

第20表 B区出土土師器観察表(5)

\*( )は推定値。

遺物番号	種類	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			形状・装束・文様ほか		色		胎土の特徴	底部	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
163	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.45)	(5.9)	1.35	回転ナテ	回転ナテ	外	内	表面に5mm以下の黒色の粒子。1mm以下の黒色の粒子を含む。	赤切り	外面赤色化。
164	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.65)	(5.95)	1.5	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子と黒褐色の輝石を含む。	赤切り	
165	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.2)	(6.0)	1.3	回転ナテ	回転ナテ	外	内	黒褐色の黒色の粒子と透明輝石を含む。	赤切り	底部黒色化。
166	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.2)	(5.8)	1.38	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子。黒褐色の輝石を含む。	赤切り	
167	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(6.6)	(4.8)	(1.55)	回転ナテ	回転ナテ	外	内	3mm以下の赤褐色の粒子。黒褐色の黒色の粒子を含む。	赤切り	赤褐色系。
168	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.6)	(5.9)	(1.1)	回転ナテ	回転ナテ	外	内	黒褐色の黒色の粒子。透明輝石を含む。	赤切り	赤褐色系。
169	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.3)	6.25	1.45	回転ナテ	回転ナテ	外	内	2mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り	底部に孔あり。
170	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	8.25	6.5	1.5	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の黒褐色の粒子を含む。	赤切り	
171	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	8.2	6.6	1.4	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色・黒色の粒子。黒褐色の透明の輝石を含む。	赤切り	
172	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	7.3	6	1.18	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
173	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	7.55	5.8	1.5	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色・黒色の粒子を含む。	赤切り	
174	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.5)	(6.1)	1.75	回転ナテ	回転ナテ	外	内	4mm以下の赤褐色の粒子。1-1.5mmの赤褐色の粒子を含む。	赤切り	黒化斑跡。
175	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.5)	(6.05)	1.55	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1-1.5mmの赤褐色の粒子を含む。	赤切り	黒化斑跡。
176	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(8.15)	(6.2)	1.35	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色・灰色・乳白色の粒子を含む。	赤切り	
177	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.1)	(5.8)	1.68	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1-2mmの赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
178	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(6.7)	5.6	1.6	回転ナテ	回転ナテ	外	内	2mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
179	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	7.6	6.1	1.2	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子を少量含む。	赤切り	
180	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	7.75	6.2	1.55	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子と黒褐色の粒子を含む。	赤切り	
181	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.3)	(6.2)	1.7	回転ナテ	回転ナテ	外	内	黒灰 灰灰 1mm以下の赤褐色の粒子。黒褐色の輝石を含む。	赤切り	外面・内面 の黒色化。
182	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	8.3	7.2	1.3	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	黒化斑跡。
183	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.3)	(6.6)	(1.55)	回転ナテ	回転ナテ	外	内	2mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り	
184	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.4)	(6.1)	1.25	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1-1.5mmの赤褐色の粒子を含む。	赤切り	底部一帯 黒色化。
185	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.35)	(5.9)	(1.68)	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り	
186	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	7.25	6.5	1.5	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子。黒褐色の黒色の粒子を含む。	赤切り	
187	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.05)	(6.3)	1.28	回転ナテ	回転ナテ	外	内	黒灰。	赤切り	底部一帯 黒色化。
188	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.3)	(6.4)	1.45	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mmの赤褐色の粒子を含む。	赤切り	
189	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	6.9	6.2	1.3	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	片口。
190	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.2)	(6.4)	2.35	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の黒褐色の粒子。黒褐色の黒色の粒子を含む。	赤切り	黒褐色系化。
191	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(7.45)	(6.3)	1.3	回転ナテ	回転ナテ	外	内	1mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	赤切り	
192	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	(6.95)	(5.95)	(1.6)	回転ナテ	回転ナテ	外	内	5mm以下の黒褐色の粒子。1mm以下の赤褐色の粒子。黒褐色の透明の輝石を含む。	赤切り	内・外面 黒色化。
193	土師器	小皿 口縁- 底縁	B区 池田第 15号	6.9	5.8	1.2	回転ナテ	回転ナテ	外	内	2mm以下の黒色の粒子。1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	赤切り	

第21表 B区出土土器観察表

遺物番号	種別	器種・部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色		胎土の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
194	須恵器	控ね鉢 口縁部				横ナデ	横ナデ	灰 (7.5Y 6/1) ナリーブ灰 (5Y 3/1)	灰 (7.5Y 6/1)	2mm大の灰白色の粒子、黒褐色・灰白色の粒子を含有。	片口有り。
195	須恵器	控ね鉢 底部～ 胴部				横ナデ	ナデ	灰白 (5Y 7/1) 一部黒 (5Y 2/1)	灰白 (5Y 7/1)	すが大さく入っている。細小～5mm程度の砂粒を含む。	外面が酸化している。風化現象。
196	土師器	甕 胴部				横ナデ	ナデ	にぶい黄 (7.5YR 6/4)	にぶい黄 (7.5YR 7/4)	2mm以下の赤褐色の粒子、1mm以下の灰褐色・赤褐色の粒子と半透明の礫石を含む。	
197	土師器	甕 口縁部				ナデ	ナデ	にぶい黄 (10YR 6/4)	にぶい黄 (7.5YR 7/3)	4.5mm以下の灰褐色の粒子、2mm以下の褐色の粒子、1mm大の黒色の粒子を含む。	
198	須恵器	甕 胴部				ナデ	ナデ	ナリーブ灰 (5GY 5/1)	ナリーブ灰 (5GY 5/1)	2mm以下の褐色の充孔状と白色の粒子を含む。	
199	土師器	甕 胴部				ナデ	ナデ	にぶい黄 (10YR 6/3) 黄褐 (2.5Y 3/1)	にぶい黄 (7.5YR 6/4)	2mm以下の灰色の粒子、1mm大の黒褐色の粒子と黒色の充孔のある磁粒を含む。	
200	須恵器	坏身	14.6		4.1	回転ナデ	回転ナデ	灰 (N 4/1)	灰 (N 4/1)	2mm以下の褐色の粒子を含む。	
201	須恵器	坏身	13.6		2.8	回転ナデ	回転ナデ	黄 (5Y 7/3) 灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 6/1)	1mm以下の褐色の粒子を含む。	
202	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	灰 (10YR 5/1)	灰 (10YR 5/1)	2.5mm以下で白色の粒子、1mm以下で灰・赤褐色の粒子を含む。	
203	須恵器	甕 胴部				回転ナデ	回転ナデ	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	特長	

第22表 B区出土陶磁器観察表

遺物番号	器種・部位	区分	法量 (cm)			輸付・釉	胎土調	特徴			産地・製作年代	備考
			口径	器高	高台径			底径	文様・胎調	使割		
204	青磁碗 口縁部	磁器				青磁釉。	灰色。	外面に施す文。			中国宋代 (13～14世紀)	
205	白磁碗 口縁部	磁器				透明釉。	灰白色。				中国宋代 (13～14世紀)	
206	青磁碗 胴部～ 口縁部	磁器				青磁釉。	灰色。	外面面下から上への流丹状の沈			中国 (16世紀)	327と同一 個体か?
207	青磁碗 胴部～ 底部	磁器		5.4		青磁釉。	灰色。	粒子の比較。外面白化現象。 釉が剥けていないこの発色が多い。	施成不良。		中国 (16世紀)	
208	碗 底部	磁器		4.7		透明釉。	灰白色。	貫入有。釉に気泡を多く含む。	施成不良。		肥前 (17世紀)	
209	新緑 口縁部	磁器				透明釉。	暗灰黄色。	3mm以下で赤褐色の砂粒を含む。			越前 (16～17世紀)	
210	瓶 底部	磁器			6.4	透明釉。	灰白色。	内面も施釉。	施成不良。		中国 (16世紀)	334の 産地不明 から出土。
211	お箱 口縁部 底部	磁器	6.1			透明釉。	灰白色。	外：平文。321と同文。				

第23表 B区出土土物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	法量 (cm)				重量	胎土	備考
			口径	底径	器高	孔径			
212	瓦器	甕 口縁部						1mm以下の白色粒と微細な充孔粒を含む。	
213		土絲	4(全長)	1.4(幅)	1.3(厚さ)	0.3	6.4g		
214	瓦質	不明	16.5(全長)	6.9(幅)	6.95	1.1			
215		不明				3		1.5mm以下の褐色の粒子、1mm以下の灰白・赤褐色の粒子、微細な黒色の礫石を含む。	内面に煤が付着。

### 第3節 C区の調査

#### 1. 調査の概要 (第64図)

C区は、調査区の中央部に位置する高さ約1mの舌状の低い丘陵である。丘陵の東端は宮崎層群の岩盤である。調査前は畑として一時期使用されていたが、竹林であった。表土剥ぎ中に陶磁器類がみられ、表土の下層から古墳時代の須恵器が出土した。遺構としては、第2層から溝状の遺構が2本検出された。溝の埋土中から古墳時代の須恵器が出土した。また、宮崎層群の岩盤を3m×2m、深さ約1mに掘り込んだ遺構が検出された。この遺構については、戦後間もない頃、倉庫として使用していたとの地元の方の話があり、工具痕はビッケルなどの新しい道具によるものであることを確認した。

#### 2. 遺構と遺物

##### (1) 溝状遺構 (第66図)

C区の南端で幅約50cm、長さ約4.5mの溝とその溝から分岐する幅35cm、長さ2mの溝が2条検出された。溝はD区の2号横穴墓の方向に伸びているので墓道と考えられたが途中で消失している。また溝の上面では陶器類が出土していること、戦後間もない頃まで畑として利用されていたことから攪乱を受けているとみられる。現在のところ、時期・性格は不明である。

##### (2) 出土遺物 (第67～75図)

###### ①古墳時代の遺物 (216～228)

218は土師器でそれ以外は須恵器である。216は甕の口縁部から底部である。頸部がくの字に立ち上がり、口縁部が外反する。胴部最大径は上位にある。外面に格子目叩きを、内面には同心円叩きを施している。口縁の内面と胴部の外面に自然釉が付着している。同一固体と思われる口縁部がSY2内から出土した口縁部と接合された。217は器種不明の胴部である。外面に格子目叩きで、五条の凹線を施している。内面には同心円叩きを施している。218は甕の底部である。219～220は高坏の坏部～脚部である。脚部の中央に二条の沈線を施し上下に分け、長方形の三方透かしは沈線を切っている。坏部外面と脚部に自然釉が付着している。221は甕の頸部～胴部である。内外面とも横ナデで、肩部に一条の沈線を施す。222は提瓶の口縁部である。口縁端部は尖り気味であり、内外面とも横ナデである。外面に自然釉が付着する。223は蓋坏である。天井部は平坦で、天井部と体部の境目は甘く、緩やかに屈曲する。口縁端部は丸く、段を有しない。天井部はヘラ削りを、内面は仕上げナデを施している。224～228は坏身である。224～225は立ち上がりが斜め上方に伸び、端部は鋭く仕上げている。226～228は立ち上がりは斜め上方に伸び、端部は丸く仕上げている。天井部にはヘラ削りを、体部には横ナデを施す。227はヘラ記号を有する。

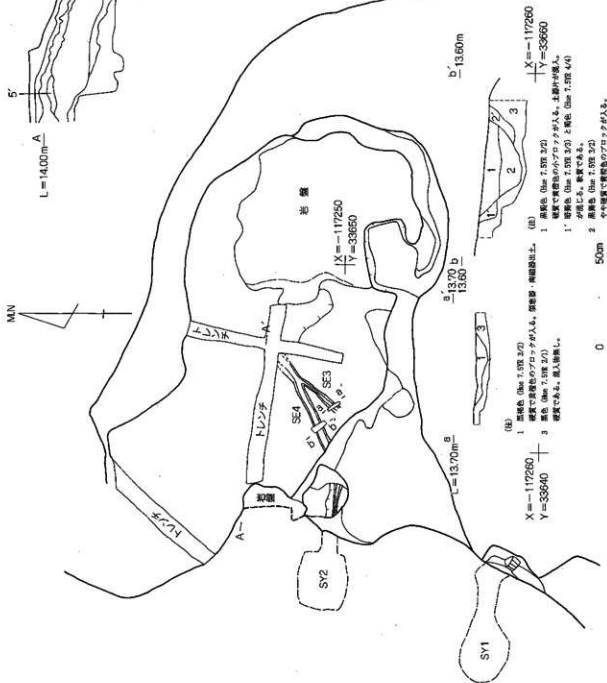
###### ②その他の遺物 (229～294)

陶磁器類を包含層で表採している。主なものについては図及び表に示すこととする。その他に「寛永通宝」が5枚出土している。290～291は江戸初期のものである。



- (B)
- 1 灰褐色 (厚 7.535 4/2)  
全中層で、淡褐色と褐色の胎子を少量含む。
  - 2 灰褐色 (厚 7.535 3/2)  
埋没でしまった感じである。淡褐色のフロクタクと褐色の胎子をまばらに含む。
  - 3 灰褐色 (厚 7.535 3/1)  
ばらばらと断片が多い。褐色の胎子を多量に含む。
  - 4 灰褐色 (厚 7.535 4/2)  
埋没で、淡褐色のフロクタクを含む。褐色の胎子を少量含む。
  - 4' 灰褐色 (厚 7.535 4/2)  
埋没で、淡褐色のフロクタクを含む。
  - 5 灰褐色 (厚 7.535 3/1)  
全中層で大部分を含む。淡褐色の胎子をまばらに含む。
  - 5' 灰褐色 (厚 7.535 3/1)  
全中層で、バヤウしている。褐色の胎子を少量含む。
  - 6 灰褐色 (厚 1035 3/2)  
全中層で大部分を含む。淡褐色の胎子を少量含む。
  - 7 灰褐色 (厚 1035 2/2)  
全中層で大部分を含む。褐色の胎子を少量含む。
  - 7' 灰褐色 (厚 1035 2/2)  
全中層で、バヤウした感じである。
  - 8 灰褐色 (厚 535 3/2)  
埋没である。
  - 8' 褐色 (厚 7.535 4/3)  
埋没である。

第65図 C区 土層断面図

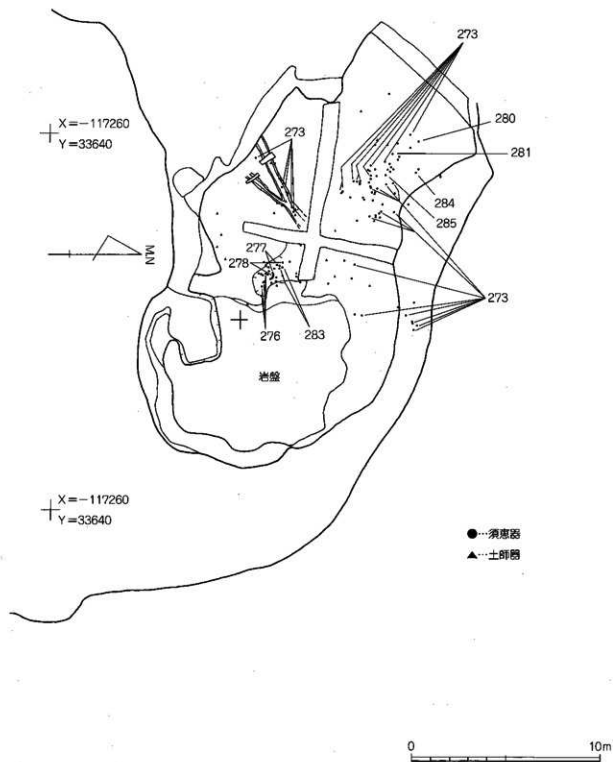


- (B)
- 1 灰褐色 (厚 7.535 3/2)  
埋没で淡褐色のフロクタクが少し入る。淡褐色・褐色の胎子を少量含む。
  - 3 褐色 (厚 7.535 2/1)  
埋没である。断片散見し、胎子を少量含む。
- (B)
- 1 灰褐色 (厚 7.535 3/2)  
埋没で淡褐色のフロクタクが少し入る。土層が少し入る。
  - 1' 灰褐色 (厚 7.535 3/2) と褐色 (厚 7.535 4/4)  
が混じる。断片である。
  - 2 灰褐色 (厚 7.535 3/2)  
全中層で埋没のフロクタクが入る。
  - 2' 灰褐色 (厚 7.535 3/2)  
埋没で淡褐色の胎子をまばらに含む。
  - 3 褐色 (厚 7.535 2/1)  
埋没である。断片散見し。

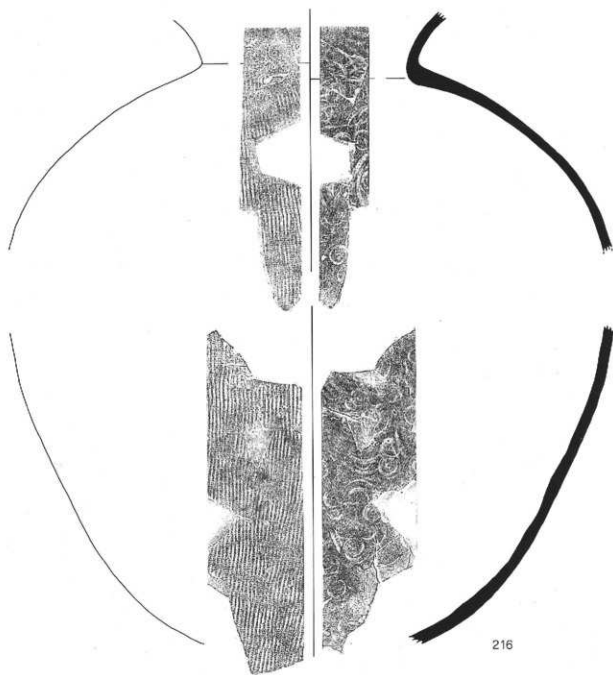
第66図 SE3・4 土層断面図

第64図 C区 連構分布図

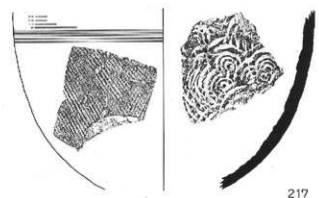




第67図 C区 遺物出土状況



216



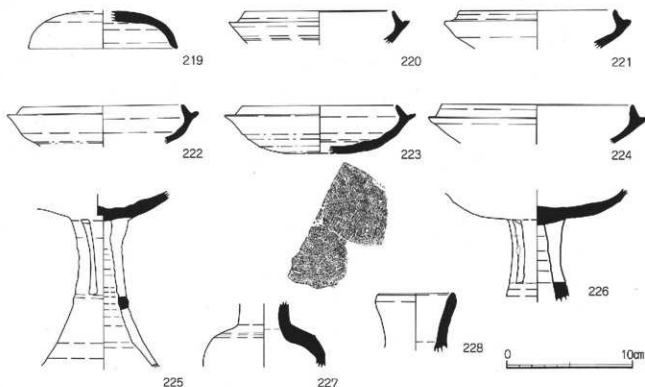
217



218



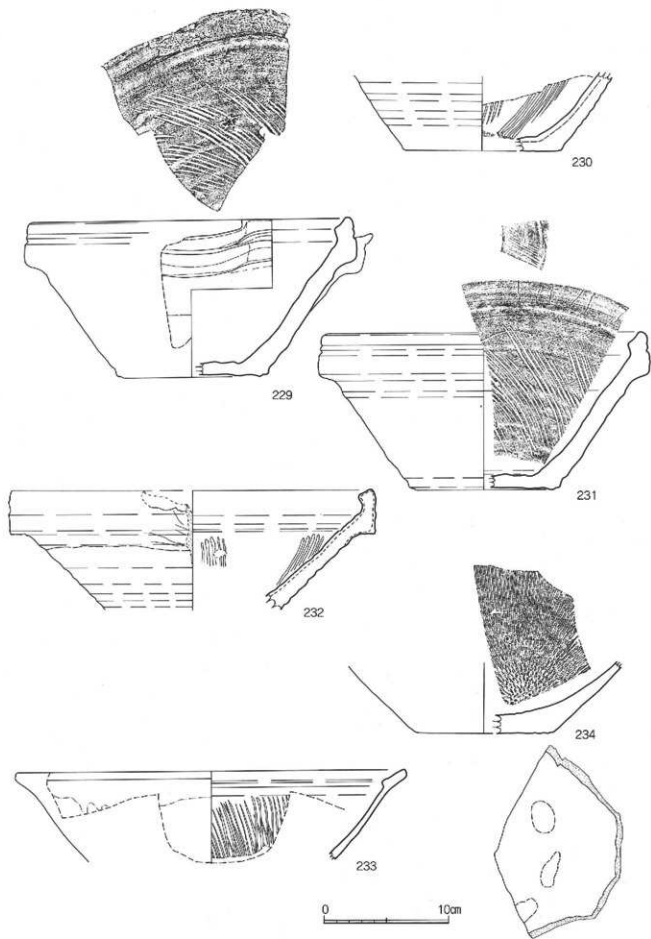
第68图 C区 出土土器 (1)



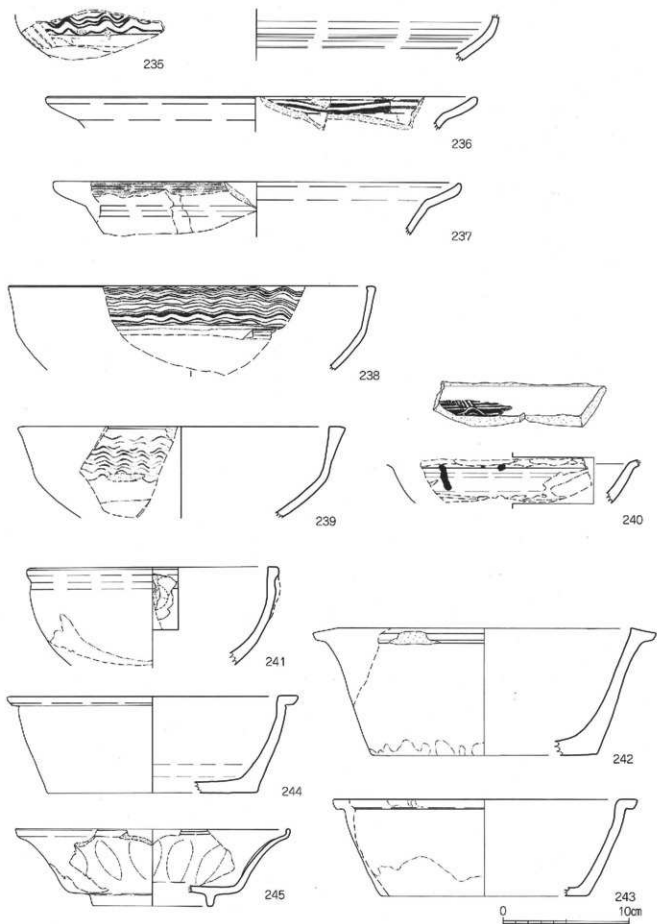
第69図 C区 出土土器(2)

第24表 C区出土土器観察表

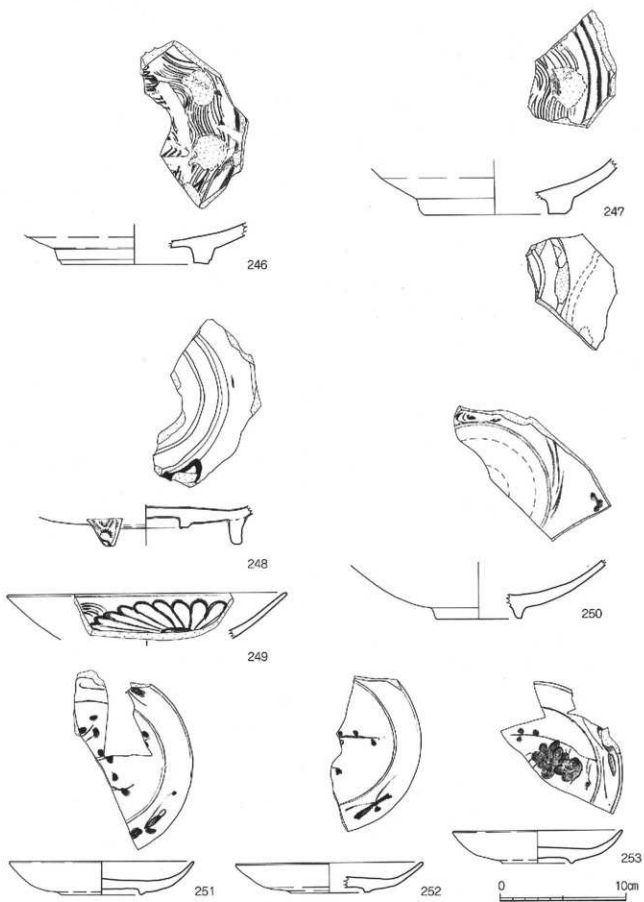
遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)		口径・底径		高さ		子法・調整・支脚ほか		色 調		胎土の特徴	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	外面	内面				
216	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層	21.8							唇口縁ナキ。平口ナキ。	同心円ナキ	灰黄 (2.5%Z)	灰黄 (2.5%Z)	7mm以下の白色半透明不定形軟散粒。1mm以下で黒色。白色の粒子を含む。	自然釉がみられる。
217	須恵器	不明 環状	C区 包含層								唇口縁ナキ	同心円ナキ	灰 (7.5%V)	灰 (7.5%V)	1.5mm以下の灰白色の粒子を含む。	
218	土師器	環状口縁・底足	C区 包含層								ナデ	ナデ	橙 (7.5%R/4)	橙灰 (10%R/1)	4mm以下の灰白色の粒子。3mm以下の赤褐色の粒子。1mm以下の透明な粒子を含む。	風化斑味
219	須恵器	環状	C区 包含層	11.8							横ナデ	横ナデ	灰 (7.3%V/1)	灰 (7.3%V/1)	黒点	
220	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層	11.8							横ナデ	横ナデ	灰 (5%V/1)	灰 (5%V/1)	黒点	
221	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層	12.4							横ナデ	横ナデ	灰 (10%V/1)	灰 (10%V/1)	1mm以下の白色の粒子を含む。	
222	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層	8.05							肩板ナデ	肩板ナデ	灰 (7.5%V/1)	灰 (7.5%V/1)	2.5mm以下の白色の粒子。1mm以下の赤褐色・灰色の粒子を含む。	
223	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層	12.4							肩板ナデ、ヘラナデ等	肩板ナデ	灰 (7.5%V/1)	灰 (7.5%V/1)	2.5mm以下の灰白色の粒子を含む。	
224	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層	15.2							横ナデ	横ナデ	灰 (7.5%V/1)	灰 (7.5%V/1)	1mm以下の粒子を少量含む。	
225	須恵器	肩板口縁・底足	C区 包含層								肩板ナデ 横ナデ	肩板ナデ 横ナデ	灰オリーブ (5%V/1)	灰オリーブ (5%V/2)	4mm以下の紅色の粒子。1mm以下の黒色の輝石と赤褐色の粒子を含む。	三方造かし。外面に自然釉。
226	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層								肩板ナデ 横ナデ	肩板ナデ 横ナデ	灰 (5%V/1)	灰オリーブ (5%V/2)	4mm以下の紅色の粒子。1mm以下の黒色の輝石と赤褐色の粒子を含む。	三方造かし。外面に自然釉。
227	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層								横ナデ	横ナデ	灰白 (2.5%V/1)	灰 (5%V/1)	1mm以下の白色の粒子を少量含む。	
228	須恵器	環状口縁・底足	C区 包含層	5.9							横ナデ	肩板ナデ	灰黄 (2.5%V/2)	灰黄 (2.5%V/1)	3mm以下に多い片層の粒子。1mm以下の灰白色の粒子を含む。	外面に自然釉。



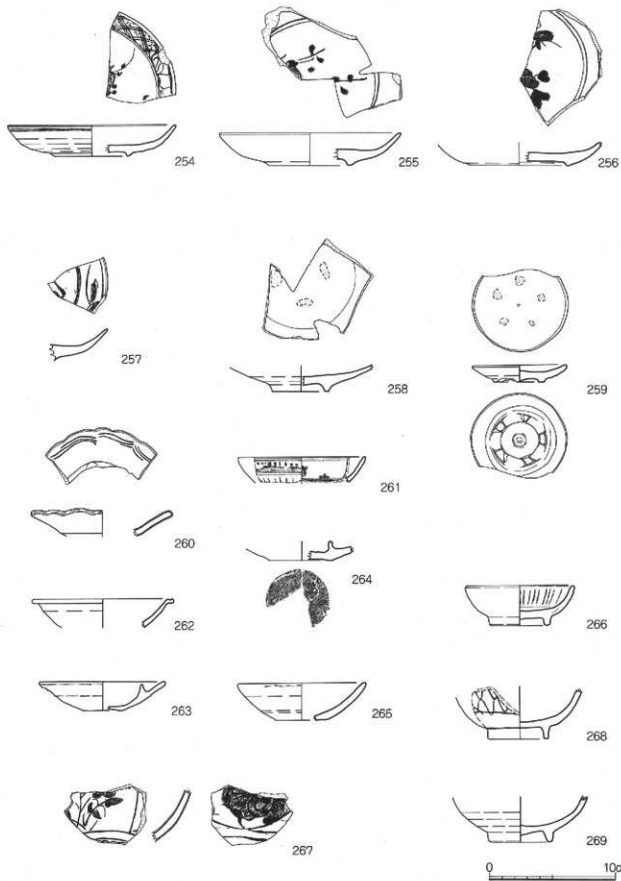
第70图 C区 出土陶磁器(1)



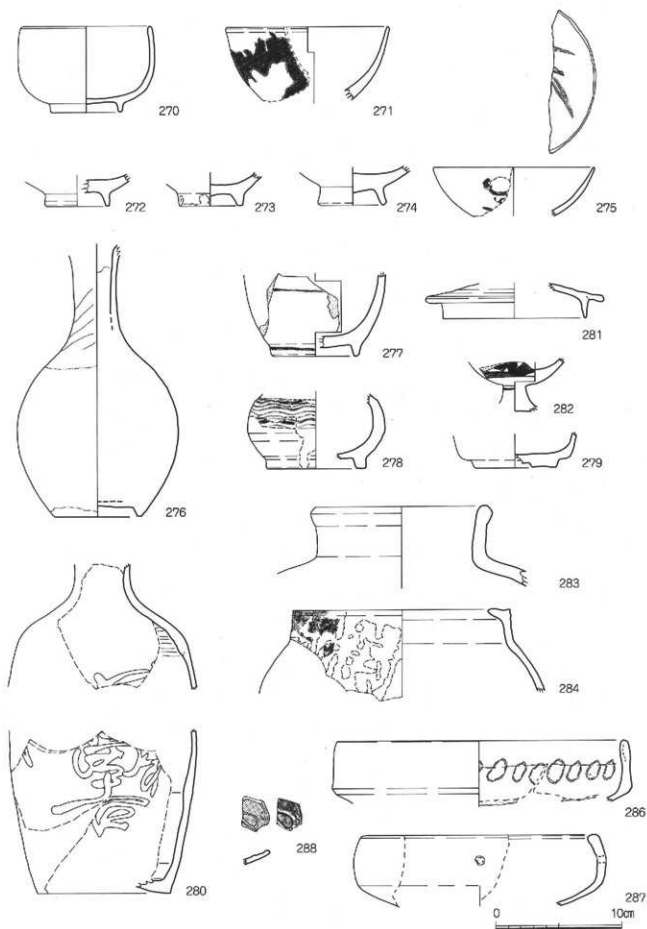
第71图 C区 出土陶磁器(2)



第72图 C区 出土陶磁器(3)

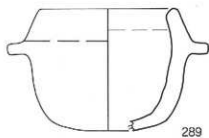
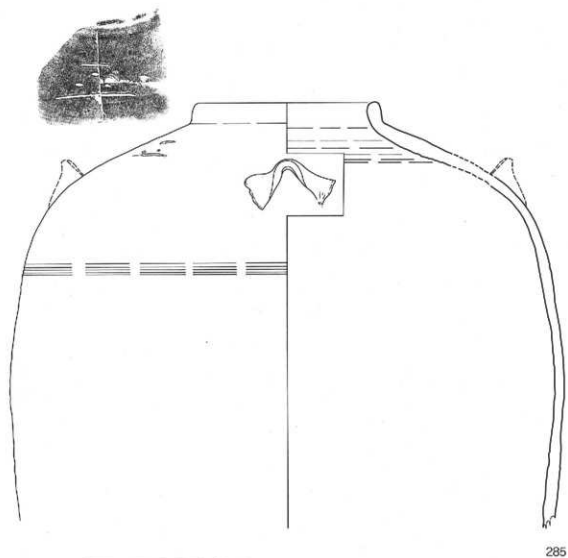


第71图 C区 出土陶磁器(4)



第74图 C区 出土陶磁器(5)





第75図 C区 出土陶磁器（6）及び遺物

第25表 C区出土陶磁器観察表(1)

遺物番号	種類・部位	区分	法量 (cm)			絵付・軸	胎十割	特 徴		産地・製作年代	備考
			口径	器高	高台径			底径	文様・胎割		
229	片口内縁口縁部一帯		(25.0)	(12.5)		(12.1)		赤褐色。片口部内縁自然焼。器目は7本1単位、上からみて互列りに施す。	輪轡・後口口縁部成形。	肥前(16-17世紀)	
230	片口内縁口縁部一帯					(12.8)		外縁赤色。内縁黒灰。器目は7本1単位、上からみて互列りに施す。	輪轡・後口口縁部成形。	肥前(16-17世紀)	
231	片口内縁口縁部一帯		(25.0)	(12.45)		(12.1)		外縁赤褐色。内縁黒灰。器目は7本1単位、上からみて互列りに施す。	輪轡・後口口縁部成形。	肥前(16-17世紀)	
232	片口内縁口縁部一帯		(28.8)					外縁赤褐色。内縁黒灰。器目は10本1単位、上からみて互列りに施す。	輪轡・後口口縁部成形。	肥前(16-17世紀)	
233	片口内縁口縁部一帯		(30.8)					鉄軸。器目は10本1単位、上からみて互列りに施す。	輪轡・後口口縁部成形。	肥前(17世紀後半)	
234	鉢鉢部一帯					(11.2)		外縁赤褐色。内縁黒灰。器目は10本1単位。	輪轡・後口口縁部成形。赤褐色。器目に11本あり。	肥前(17世紀後半)	
235	鉢鉢部	陶器						緑釉。赤。土に近い褐色。	外縁白土の粗毛目。その部分に厚く施釉。内縁黒く施釉。	肥前(17-18世紀)	
236	鉢鉢部一帯	陶器	33.6					透明釉。緑釉。赤。土に近い褐色。	外縁：緑釉削け直し。内面：白土粗毛目。	唐津式磁系(17世紀)	
237	鉢鉢部一帯	陶器	32.4					透明釉。赤。土に近い褐色。	外縁：口縁部付近のみ施釉。	唐津式磁系(17世紀)	
238	鉢鉢部一帯	陶器	28.9					透明釉。赤。土に近い褐色。	外縁：口縁部付近のみ施釉。口縁部に施釉を厚く施す。内面：透明釉。	唐津式磁系(17世紀)	
239	鉢鉢部一帯	陶器	26					透明釉。赤。土に近い褐色。	一層面に透明釉を厚く施す。その他：透明釉。器目は10本あり。口縁部に施釉を厚く施す。内：透明釉。	唐津式磁系(17世紀)	
240	鉢鉢部一帯	陶器						透明釉。赤。土に近い褐色。	白土粗毛目。	唐津式磁系(17世紀)	
241	鉢鉢部一帯	陶器	19.65					鉄軸。土に近い赤褐色。	口縁部削け直し。外縁：灰緑付近から底縁にかけて施釉。	薩摩系(18世紀)	
242	鉢鉢部一帯	陶器	23.2	10.1		18		赤茶褐色。男赤褐色。	外縁：底縁施釉。	薩摩系(18世紀)	
243	鉢鉢部一帯	陶器	24	7.75		16		黒褐色。土に近い褐色。	口縁部削け直し。内面：底縁付近から底縁にかけて施釉。器目は2本あり。	薩摩系(18世紀)	
244	鉢鉢部一帯	陶器	23.1	7.7		16.6		赤褐色。土に近い赤褐色。	底縁部：無釉。軸が完全に削けていない。	薩摩系(18世紀)	
245	鉢鉢部一帯	陶器	21.6	6.1	9.5			青磁軸。灰白色。	真入器。内外縁：透灰色。器目施釉。	薩摩系(18-19世紀)	
246	鉢鉢部一帯	陶器		11.6				透明釉。土に近い赤褐色。	外縁：無釉。内面：白土粗毛目。	唐津(17世紀)	
247	鉢鉢部一帯	陶器		11.3				透明釉で灰白色。土に近い赤褐色。	外縁：無釉。内面：白土粗毛目。	唐津(17世紀)	
248	二足付鉢鉢部一帯	磁器	6.5					青磁軸。灰白色。	内面：底縁施釉。軸切れ。脚部に染灰。内面：見込み外縁に施釉1条。	肥前系(17世紀)	
249	鉢鉢部一帯	磁器	21.9					透明釉。灰白色。染付。	内面：染付。口縁部施釉。	中国(16-17世紀)	256と同一体か?
250	鉢鉢部一帯	磁器	6.8					透明釉。灰白色。染付。	外縁：染付施釉。内面：染付。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	中国(16-17世紀)	
251	鉢鉢部一帯	磁器	14.5	2.7	6.25			透明釉。灰白色。染付。	内外施釉。内面：見込み外縁に2本の施釉を施す。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	中国(16-17世紀)	256, 259, 301, 302と同文
252	鉢鉢部一帯	磁器	14.6	2.4	5.6			透明釉。灰白色。染付。	内外施釉。内面：見込み外縁に2本の施釉を施す。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	中国(16-17世紀)	297, 299, 301, 302と同文
253	鉢鉢部一帯	磁器	13.45	2.6	5.6			透明釉。灰白色。染付。	内外施釉。内面：見込み外縁に2本の施釉を施す。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	中国(16-17世紀)	297, 299, 301, 302と同文
254	鉢鉢部一帯	磁器	13.2	2.5	5.8			透明釉。灰白色。染付。	内外施釉。内面：見込み外縁に2本の施釉を施す。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	中国(16-17世紀)	
255	鉢鉢部一帯	磁器	14.2	2.6	6.5			透明釉。灰白色。染付。	内外施釉。内面：見込み外縁に2本の施釉を施す。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	中国(17世紀前半)	297, 299, 301, 302と同文
256	鉢鉢部一帯	磁器	7.7					透明釉。灰白色。染付。	内外施釉。内面：見込み外縁に2本の施釉を施す。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	有田(17世紀前半)	297-299, 301, 302と同文
257	鉢鉢部一帯	磁器						透明釉。灰白色。染付。	内外施釉。内面：見込み外縁に2本の施釉を施す。器目は2本あり。見込み外縁に2本の施釉を施す。	中国(17世紀前半)	297-299, 301, 302と同文
258	鉢鉢部一帯	磁器	4.45					青磁軸。灰白色。	見込み器目。染付器目3付。	産地時期不明	
259	鉢鉢部一帯	磁器	7.2	1.4	4			透明釉。灰白色。	A-1やB-1。見込み器目。染付器目5。	中国(12-14世紀)	
260	鉢鉢部一帯	磁器	5.5					青磁軸。灰白色。	内面：口縁部に染灰の施釉。	中国(16世紀)	
261	鉢鉢部一帯	磁器	9.8					透明釉。灰白色。	内面：内面：無釉。	中国(16世紀)	
262	鉢鉢部一帯	陶器	10.4					透明釉。灰白色。	真入有り。	唐津(16-17世紀)	
263	鉢鉢部一帯	陶器	9.8	2.3		3.2		透明釉。灰黄色。	外縁：無釉。	産地時期不明	

第26表 C区出土陶磁器観察表(2)

遺物番号	器種・部位	区分	寸法 (cm)				給付・釉	胎土調	形 状		定地・製作年代	備考
			口径	器高	高台径	底径			支様・輪周	裝飾		
264	灯明皿 胴部～ 底面	陶器				4.9	赤褐色。					
265	灯明皿 口縁部～ 底面	陶器	10.05				透明釉。 若しくは 下へ輪 有釉施。	灰白色。	外面：口縁部付近以外無釉。		瓦板赤切り痕	唐津系 (18世紀)
266	香炉 口縁部～ 底面	磁器	8.4	3.2	4.5			灰色。	内面：口縁部に蓮弁文状の微細文。		高台付の口状 に類似す。	中国 (16世紀)
267	香付物 胴部～ 底面	磁器					透明釉。 染付。	暗茶褐色。	外面：花弁文、片蓮：花文文。全体 に貫入有り。外面に輪切れ。			中国？所産 (17世紀)
268	香付物 胴部～ 底面	磁器			4		透明釉。 染付。	灰白色。	外面：一重蓮目文。唇部：両内面に それぞれ委曲線を施す。		染付砂付物。	肥前(17世紀) 小崎焼？
269	香付物 胴部～ 底面	陶器			4.6		新釉。	にぶい赤 褐色。	貫入有。		染付物類？	肥前 (17～18世紀)
270	瓶 口縁部～ 底面	陶器	10.6	8.5	4.6		透明釉。	灰白色。	貫入有内面：口唇部から口縁部にか けて施釉。(染付細かす)。		帯形輪郭？	肥前 (17世紀後半)
271	海反碗 口縁部～ 胴部	陶器	12.6				透明釉。	にぶい黄 褐色。	貫入有。外面の縁に染入有。			肥前内野山 (17世紀後半)
272	瓶 底面	陶器			5		透明釉。	にぶい黄 褐色。	外面は縁が附けていない。底付は扁 形。			肥前 (17世紀前半)
273	瓶 底面	陶器			4.8		透明釉。	灰白色。	貫入有。高台の輪に染入有。底付 は扁形。			肥前内野山 (17世紀後半)
274	瓶 底面	陶器			4.9		透明釉。	灰白色。	貫入有。底付は扁形。			肥前 (17～18世紀)
275	瓶 口縁部～ 底面	陶器	12.7				透明釉。	淡黄色。	貫入有。外輪周と内輪周に色施。			陶器系 (18世紀前半)
276	香付物 胴部～ 底面	陶器				6.9	灰釉。	褐色。	釉薬が完全に附けていない。筒形底。			唐津系 (18世紀)
277	香付物 胴部～ 底面	陶器			6.7		透明釉。	灰白色。	内面無釉。外面輪切れがみられる。			肥前 (17～18世紀)
278	火入 胴部～ 底面	陶器			7.7		緑釉。	明褐色。	外縁面白土層毛目。底付は扁形で、 短す口縁。			肥前 (17～18世紀)
279	火入 底面	磁器			6.3		青緑釉。	灰色。	施成不良。短す口縁。			肥前系 (18世紀)
280	香付物 胴部～ 底面	陶器				10.4	透明釉。	灰黄色。	底面外面は扁形で砂目。			
281	土瓶 口縁部～ 底面	陶器	14.1				灰釉？	にぶい赤 褐色。	天舟部に施釉。施成不良。		見受けに染付 有	唐津系か 唐津系
282	香付物 胴部～ 底面	磁器					透明釉。 染付。	灰白色。	外：山水文？ 内面：1条。胴部上層 に施成し。			肥前 (17世紀後半)
283	瓶 口縁部～ 底面	陶器	13.5					黄灰色。	口縁部、胴部に自然釉。			肥前 (室町時代?)
284	瓶 口縁部～ 底面	陶器	17.2				灰釉。	褐色。	輪が附けていない。口縁部無釉。		内面に海心円状 の外に貫入有。	唐津 (16～17世紀)
285	三足 口縁部～ 底面	陶器	14.2				灰黄色。	赤褐色。	高脚付近に3条の沈線。		高脚に高脚？有 り。	唐津・唐津？ (19世紀)

第27表 C区出土焙烙観察表

遺物 番号	種別	器種・ 部位	法量 (cm)			胎 土	備 考
			口径	底径	器高		
286	土器	焙烙	23.7			2mm以下の赤褐色の粒子、4mm、1mm以下の白色透明の鉱物粒、微細な輝石を含む。	煤が付着。
287	土器	焙烙	18			2mm以下の褐色・黒色の粒子、微細な輝石を含む。	穿孔有。

第28表 C区出土土器観察表

遺物 番号	種別	器種・ 部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか	色 調		胎土の特徴	備考	
			口径	底径	器高		外面	内面			外面
228	土師器	皿 口縁部				ナデ	スタンプによる 赤土が散見。赤色 の顔料付着。	浅黄褐色	褐色	微細な黒色の粒子を含む。	

第29表 C区出土瓦器観察表

遺物 番号	種別	器種・ 部位	法量 (cm)			胎 土	備 考
			口径	底径	器高		
289	瓦器	香炉 口縁部 ～底面	10.9	4	9.7	1mm以下の黒色の粒子を多く含む。	底部内面に付着物有。

第30表 C区出土古銭計測表

番号	銭 名	出土地点	直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備 考
290	寛永通宝	表土	2.40	1.47	0.50	3.10	
291	寛永通宝	表土	2.35	1.30	0.55	1.80	
292	寛永通宝	表土	2.20	1.12	0.60	2.30	
293	寛永通宝	表土	2.40	1.36	0.60	2.50	
294	寛永通宝	表土	2.35	1.45	0.55	1.50	

## 第4節 D区の調査

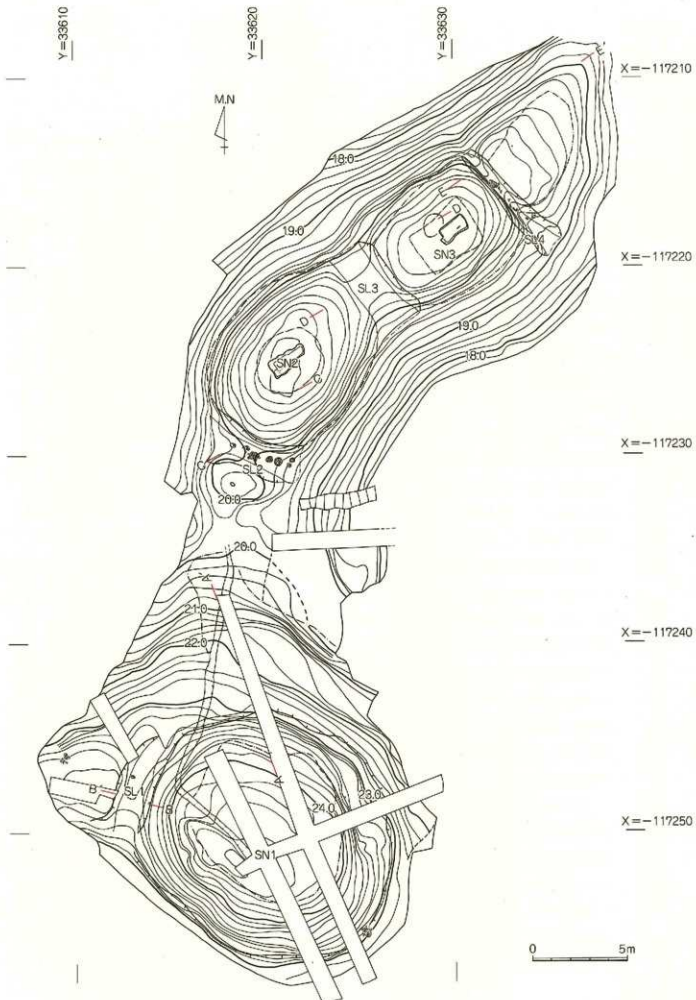
### 1. 調査の概要

D区は西側の標高20mの丘陵と北側の標高29mの丘陵に位置し、調査前は竹や樹木が茂っていた。西側の丘陵は一時期果樹園として利用されていたが、その後は放置されていた。竹木の伐採撤去を行い、頂上付近にトレンチを入れたが、頂上はすでに削平されており、すぐに地山層の風化した層になった。しかし西側で溝状のにじみが検出され、西端の切り株付近で6世紀後半代の完形の須恵器の坏蓋が出土した。また東端で土器埋設土坑を検出した。この丘陵を1号古墳とした。

北側の丘陵は駱駝の瘤状に2カ所に盛り上がりが見られた。南側の斜面より古墳時代の土師器の破片が出土していたので、尾根にトレンチを入れたところ、ほぼ中央部で尾根を二分する黒色の溝を検出した。また頂上の東端で土師器の高坏の脚部の破片が出土した。表土剥ぎを行ったところ、尾根を溝で区切った2基の古墳であることが確認された。この丘陵を西から2号、3号古墳とした。溝は東側と中央、西側にそれぞれ1本検出した。溝の埋土を除去したところ、2号古墳の西側の溝から古墳時代の土師器が4個体並んだ状態で出土した。3号古墳の頂上部からは土師器の高坏の脚部など、東端の溝からは土師器の壺、高坏の脚などが出土した。2号古墳の頂上部には主体部と思われる所に黒っぽいのにじみが確認された。竹の根が入り込み土色が非常にわかりにくく、壁面や床面もわかりにくく、作業は困難で掘りすぎてしまった。埋土を注意深く取り除いていくと長方形の掘り込みらしいものとなった。3号古墳の頂上部にも黒色のにじみがみられたが、埋土と地山の土の見分けが難しく、礫の量、土器片の有無、地山の岩の出方などで掘り込み面を決めた。

西側の丘陵の東斜面に開口した横穴があり、横穴墓の存在が考えられたので、数カ所にトレンチを入れた。丘陵は宮崎層群の岩盤が所々露出しており、開口していた横穴も岩盤に掘られていた。開口していた横穴の北側の岩盤に屋敷神があったが、移転後その岩盤の裏側にトレンチを入れ、崩落した土砂を取り除き、岩盤を露出させたところ羨門部の上部とみられる掘り込みを確認した。埋土状況を確認するためのセクションを設置し掘り下げていったところ、人頭大よりやや大型の岩石や河原石を積み上げて閉塞していることが確認された。すでに開口していた横穴墓を1号横穴墓とし、未開口の横穴墓を2号横穴墓とした。1号横穴墓は、倉庫として使用していたとの旧地権者の話もあり大幅に改変されていた。また北壁には防空壕が新たに掘られていた。入り口には岩盤を加工して階段がつけられており、ゴミなどが入り口に入り込んでいた。遺物などは残存していなかった。トレンチにより2号横穴墓は閉塞石とみられる岩石や河原石や羨門の一部が確認された。大量の土砂が羨門から前庭部にかけて流れ込んでおり、堆積状況を調べるためのセクションベルトを東西に設定して埋土を掘り下げていった。玄室内には竹の根が入り込んでおり、一部天井にひび割れがみられ、床面にも土砂が堆積していた。閉塞石を取り除いた後、土砂を取り除く作業を行った。土砂には遺物が混入している可能性があるため、土砂はふるいにかけた。この作業で耳環が1点出土した。土砂を取り除くと床面には河原石が敷き詰められており、副葬品とみられる須恵器や鉄器が出土した。

以下、各古墳、横穴墓の遺構・遺物の検出状況について報告する。



第76图 D区 1号·2号·3号古墳墳丘実測図

## 2. 遺構と遺物

### (1) 低丘陵部の古墳 (第76図)

#### ① 1号古墳 (第77~82図)

1号古墳は西側の丘陵部の頂上部に位置する。後世の耕作により削平されており、墳丘や周溝はほとんど失われている。そのために墳丘の形状や主体部などは不明である。

トレンチの断面の観察から、墳丘の構築方法は地山整形と考えられる (第77図)。

周溝は後世の削平によって一部を残すのみであるが、西部で残存している周溝の幅が残存する上端より約2mで底面幅約1.1mである (第78図)。

出土した遺物としては、残存する溝内から土師器の壺と須恵器の坏蓋の一部 (第79図) が出土している。また溝で区切られた西端の舌状の盛り上がり部で墓前祭祀に使用されたとみられる須恵器など (第80図) が出土した。南端では土器埋設土坑が確認され大型の土師器 (第81・82図) が出土した。その性格については、土器棺の可能性はあるが、墳丘の裾部から出土しており、土砂が流れ込んでおり遺構の確認が難しいこと、遺物の風化が著しいことなどから不明である。

その他に後世のものと思われる時期不明の溝が検出された。

#### ② 2号古墳 (第83~85図)

2号古墳は北側の丘陵部の頂上部にある2基の古墳のうちの西側の古墳である。風化のため墳丘部の大半は崩落しているとみられ、西端と中央部にある溝と主体部とみられる掘り込みを残す状態であった。

古墳は形状より楕円形の円墳と考えられる。墳丘の構築方法は土層断面の観察より、地山の風化した層の堆積がみられることから、地山整形と考えられる (第83図)。また盛り土は地山に主体部が構築されていることから低位に留まったと想定される。墳丘の規模は長径約9m、短径約8mの小規模なものと思われる。主軸方位は北50度東を指向している。

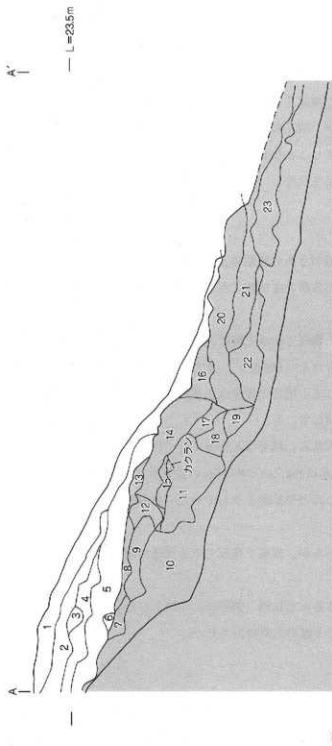
主体部は直接地山に掘り込んでおり木棺直葬とみられる。埋土は地山層に近く区別するのに困難であり、竹や木の根の影響をうけていた。主体部の掘形は約2.1m×約0.6mの長方形プランを有し、深さは確認面より約25cmであった。底面の状態はほとんど平坦面をなしていた (第84図)。主体部からは遺物は出土していない。

周溝は墳丘部の崩落などにより一部を残すのみであるが、西端で確認できる周溝の幅は残存する上端より約1.8mで底面幅約0.9mであった。

出土遺物としては、西端の溝からは土師器が4個体並んだ状態 (第85図) で出土した。またそれぞれ掘り込みとみられる穴が確認され、さらに西端で1個の穴が検出された。

#### ③ 3号古墳 (第83・86・87図)

3号古墳は北側の丘陵部の頂上部にある2基の古墳のうちの東側の古墳である。風化のため墳丘部の大半は崩落しているとみられ、東端と中央部にある溝と主体部とみられる掘り込みを残す状態であった。

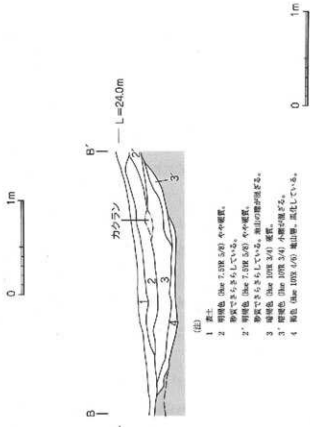


(注)

- 1 粘土 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。
- 2 土の塊状に硬い。
- 3 塊状を伴う。
- 4 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質。
- 5 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質。
- 6 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質。
- 7 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。
- 8 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。
- 9 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。
- 10 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。
- 11 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。
- 12 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。

第77図 D区 1号古墳土層断面図

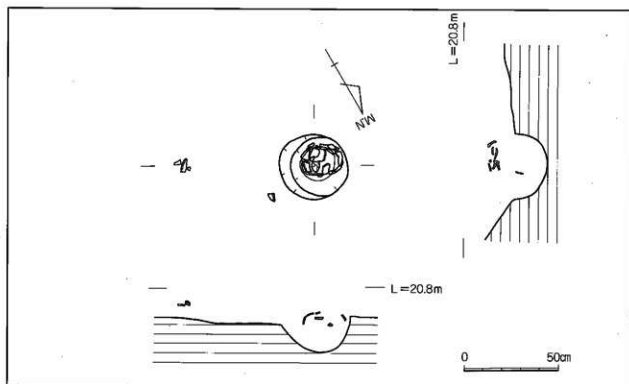
- 13 硬質 (Obs 100% 4/4) 硬質が強い。
- 14 硬質 (Obs 100% 7/6) 硬質が強い。
- 15 硬質 (Obs 100% 7/6) 硬質が強い。
- 16 硬質 (Obs 100% 7/6) 硬質が強い。
- 17 硬質 (Obs 100% 7/6) 硬質が強い。
- 18 硬質 (Obs 100% 5/6) 硬質が強い。
- 19 硬質 (Obs 100% 7/6) 硬質が強い。
- 20 硬質 (Obs 100% 7/6) 硬質が強い。
- 21 硬質 (Obs 100% 5/6) 硬質が強い。
- 22 硬質 (Obs 100% 5/6) 硬質が強い。
- 23 硬質 (Obs 100% 5/6) 硬質が強い。



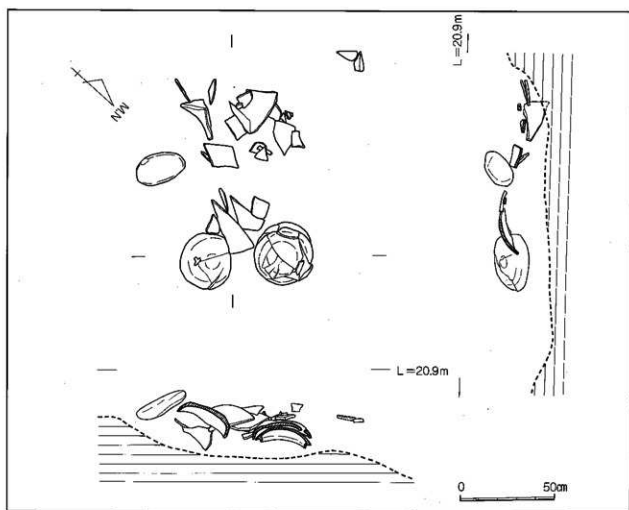
第78図 D区 1号古墳1号周溝ベルト土層断面図

- 1 粘土
- 2 硬質 (Obs 7.00% 5/6) やや硬質。
- 3 硬質 (Obs 7.00% 5/6) やや硬質。
- 4 硬質 (Obs 100% 3/4) 硬質。
- 5 硬質 (Obs 100% 4/6) 硬質が強い。

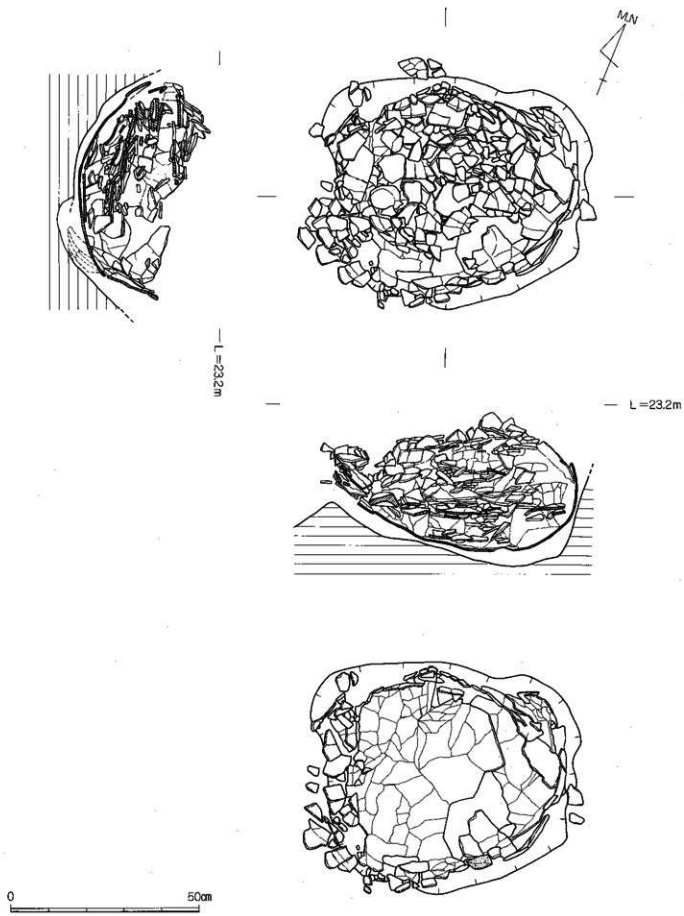




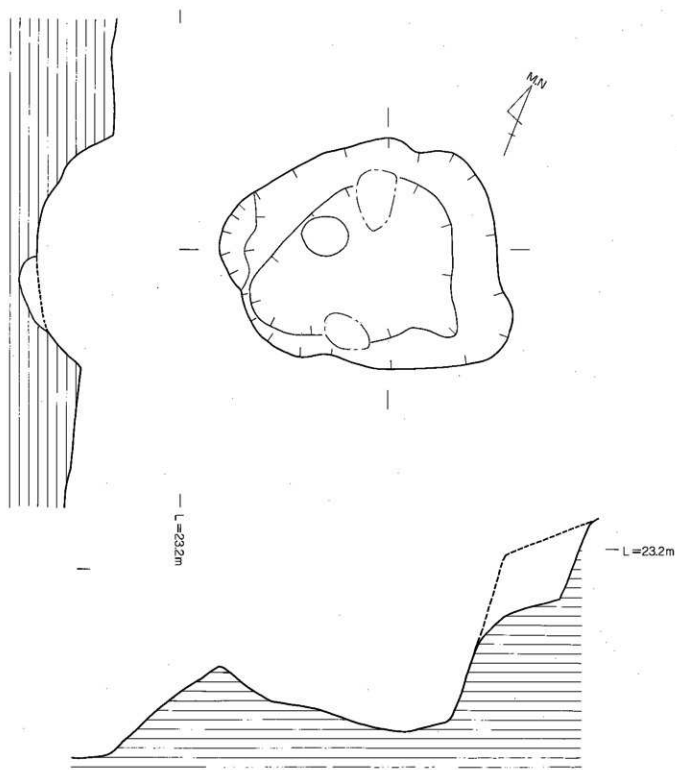
第79图 D区 1号古墳1号周溝内出土土器実測図



第80图 D区 1号古墳墓前祭祀遺構出土土器実測図

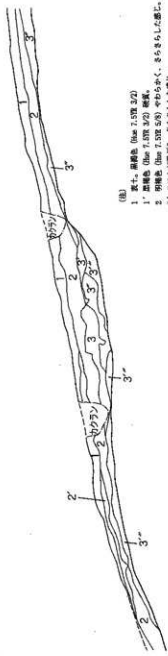


第81图 D区 土器埋設土坑内出土土器实测图(1)



第82图 D区 土器埋設土坑実測図(2)

C' | — L=21.2m



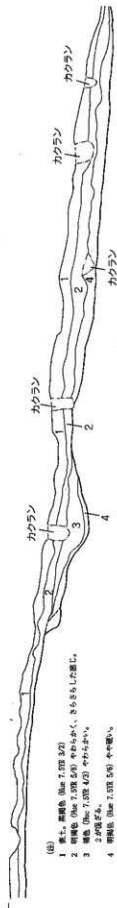
- (註)
- 1 黄土、黒褐色 (厚 7.5m 3.7)
  - 2 砂褐色 (厚 7.5m 3.7) 砂質、
  - 3 砂褐色 (厚 7.5m 3.8) やわらかく、さらさらした感じ。
  - 3' 上に1が厚まる、さらさらした感じ。
  - 3 砂色 (厚 7.5m 4.7) やわらかい。
  - 3' 2が厚まる、やや砂質。
  - 3' 2に砂質が厚まる。
  - 3' 2に砂質が厚まり、やや砂質。
  - 3' 2に砂質が厚まり、やや砂質。
  - 3' 2に砂質が厚まり、やや砂質。

D' | — L=21.4m



- (註)
- 1 黄土、黒褐色 (厚 7.5m 3.7)
  - 2 砂褐色 (厚 7.5m 3.8) やわらかく、さらさらした感じ。
  - 2' 2に砂質が厚まる。
  - 3 砂色 (厚 7.5m 4.7) やわらかい。
  - 2が厚まる。
  - 4 砂褐色 (厚 7.5m 5.6) やわらかい。
  - 黄土の層が厚まる。

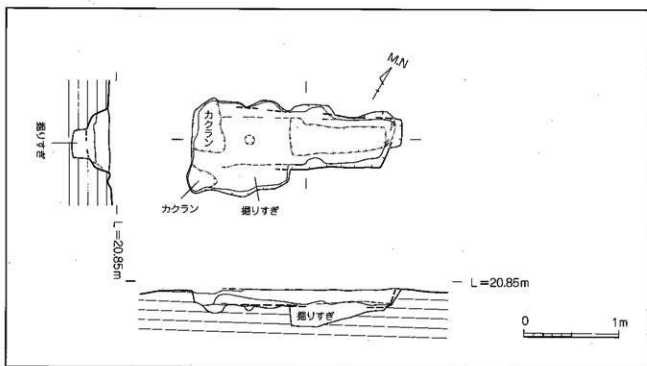
E' | — L=20.8m



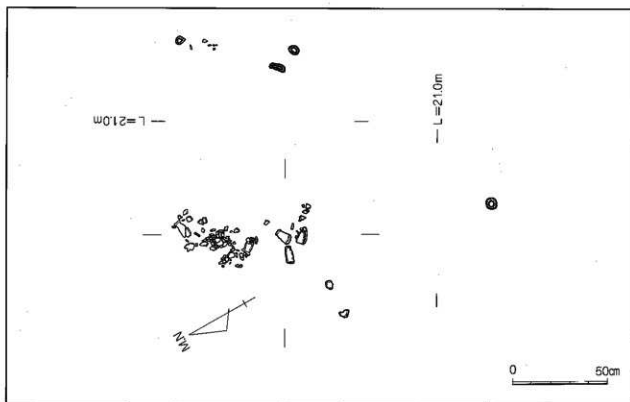
- (註)
- 1 黄土、黒褐色 (厚 7.5m 3.7)
  - 2 砂褐色 (厚 7.5m 3.8) やわらかく、さらさらした感じ。
  - 3 砂色 (厚 7.5m 4.7) やわらかい。
  - 2が厚まる。
  - 4 砂褐色 (厚 7.5m 5.6) やわらかい。
  - 黄土の層が厚まる。

第83図 2号及び3号古墳ベルトル土層断面図

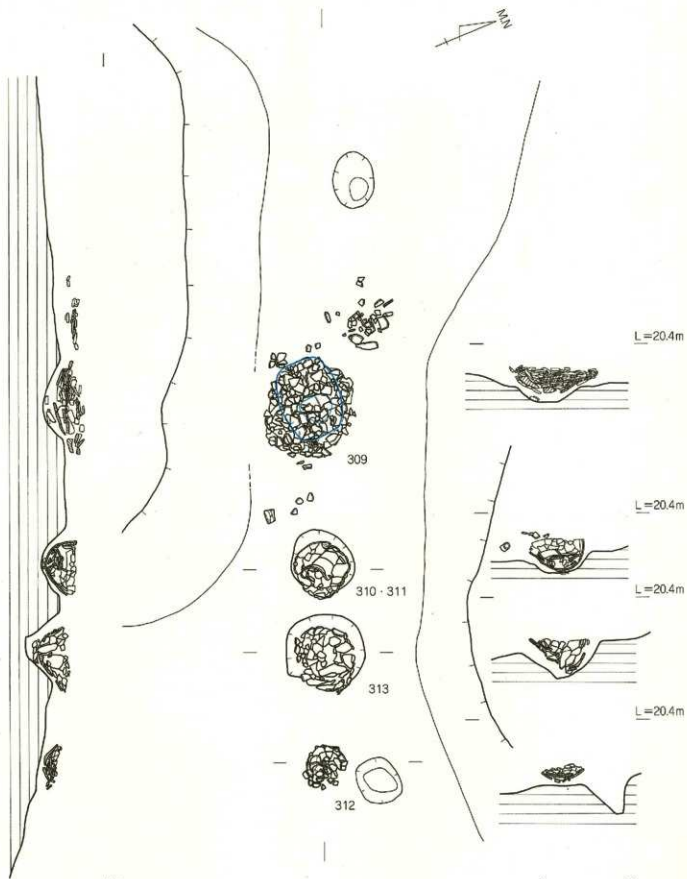
0 1m



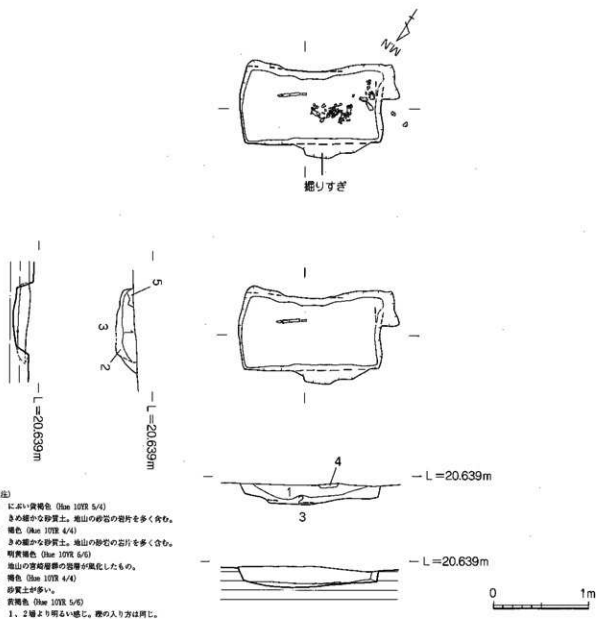
第84図 D区 2号古墳主体部実測図



第86図 D区 3号古墳主体部上出土遺物



第85图 D区 2号古坟2号周沟内遗物出土土器实测图

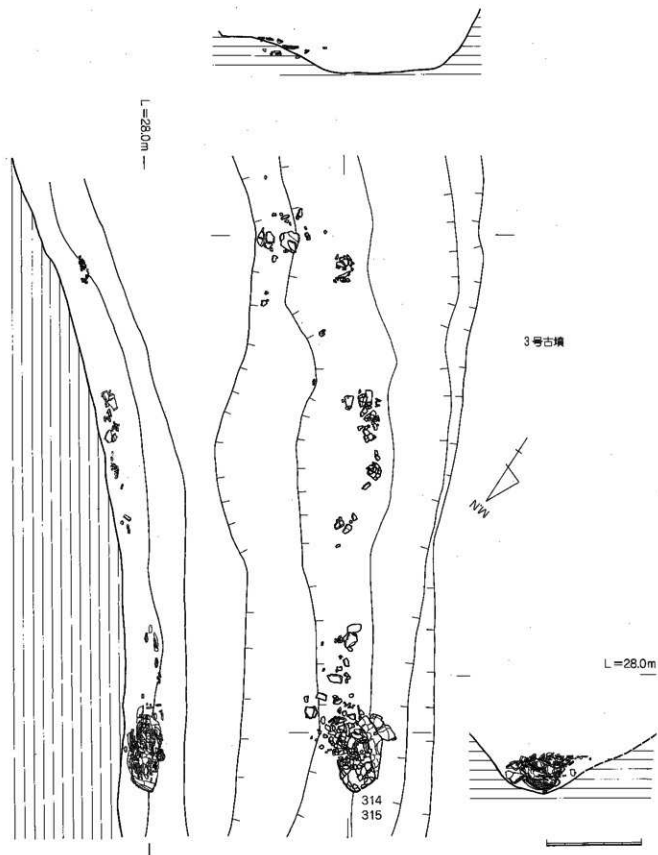


(注)

- 1 におい黄褐色 (土色 10頁 5/4)  
きめ細かな砂質土。地山の砂礫の混入を多く含む。
- 2 褐色 (土色 10頁 4/4)  
きめ細かな砂質土。地山の砂礫の混入を多く含む。
- 3 明黄褐色 (土色 10頁 5/5)  
地山の窪地層の混入が顕化したもの。
- 4 褐色 (土色 10頁 4/4)  
砂質土が多い。
- 5 黄褐色 (土色 10頁 5/4)  
1、2層より明るい感じ。壁の入り方は同じ。

第87図 D区 3号古墳主体部実測図

L=28.0m



第88图 D区 3号古墳4号周溝内出土土器实测图



古墳は形状より方墳と考えられる。墳丘の構築方法は土層断面の観察より、地山の風化した層の堆積がみられることから、地山整形と考えられる(第83図)。また盛り土は地山に主体部が構築されていることから低位に留まったと想定される。墳丘の規模は長軸約9m、短軸約8mの小規模なものとみられる。主軸方位は北50度東を指向している。主体部の上部から土師器の高坏の脚などが出土(第86図)しており、祭祀などを行ったものと考えられる。

主体部は直接地山に掘り込んでおり木棺直葬とみられる。主体部の掘形は約1.5m×約0.76mの長方形プランを有し、深さは確認面より約11cmであった(第87図)。底面の状態はほとんど平坦面をなしていた。

周溝は墳丘部の崩落などにより一部を残すのみであるが、2号古墳との間にある周溝の幅は残存する上端より約2.6m底面幅約1.7m、東端の周溝の幅は残存する上端より約1m底面幅約0.5mである。

出土遺物としては、主体部の上部から土師器などが多数出土した。東端の溝から土師器が出土(第88図)した。また主体部より鉄剣が1点(第88図)出土している。

## (2) 横穴墓(第89図)

### ① 1号横穴墓(第90図)

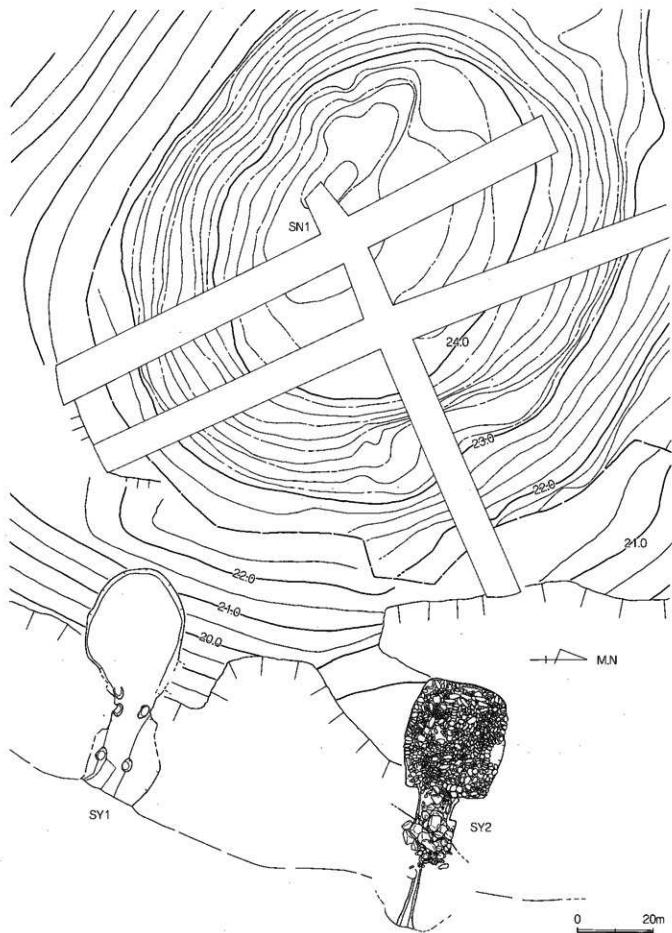
SY1は、東方向に開口している。戦時中には防空壕として、戦後は倉庫として一時利用されていたという経緯があり、内部には、空間拡張のための改変が大幅に行われていた。調査開始時には、前庭部とみられる部分に崩落土や生活用品などのゴミ類が堆積しておりそれらを除去していった。すぐに床面になり、後世のものともみられるピットや溝が確認された。すでに開口していたこともあり、遺物などは残存していなかった。玄室内の奥壁や側壁には棒状のものを差し込んだと考えられる奥行5cmほどの穴があり、これは倉庫などに使用された際に棚などを支えるためのものとみられる。しかし注意深く観察すると奥壁と側壁や天井の一部に工具痕が残っており、羨門部分と前庭部の間に閉塞石はめ込み用とみられる溝の痕跡が確認された。また羨門部分と前庭部の間は段違いに削り出されており2段の筋縁と考えられる。改変を受けているために推定ではあるが、玄室の天井はドーム状とみられる。

1号横穴墓の計測値は、改変を大幅に受けているので不明であるが現況で、玄室幅約2.5m、玄室奥行約3.1m、羨道の長さ約0.6~0.7m、前庭部の長さ約2.35m、天井部の高さ約1.4mである。

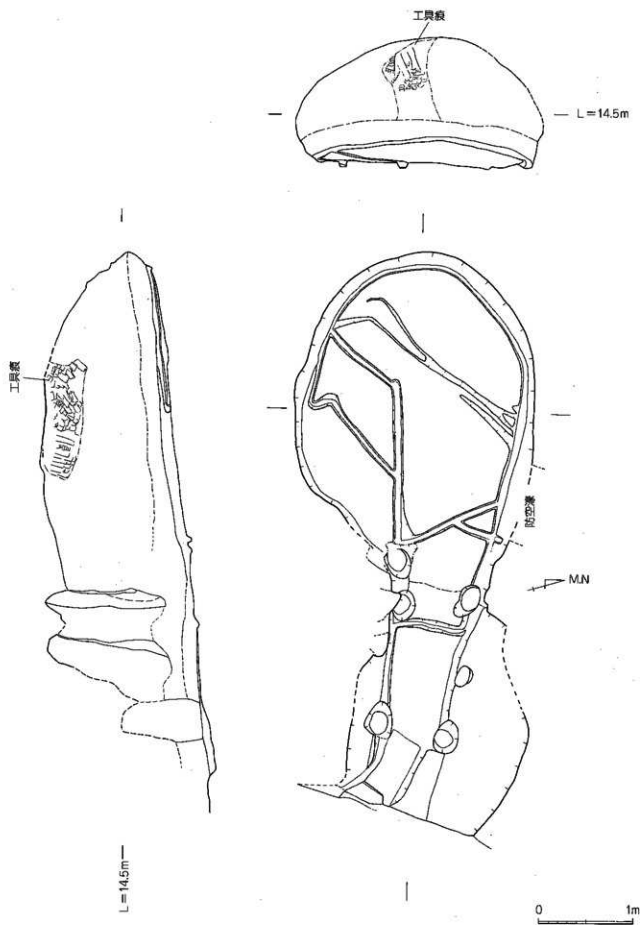
### ② 2号横穴墓(第91・92図)

2号横穴墓は東方向に開口している。1号横穴墓の北側に位置する。前面に屋敷神が安置されていたために大部分は削平されたとみられ、前庭部とみられる部分はすでに失われていた。そこで屋敷神の置かれていた岩盤を掘り下げると溝状の掘り込みが確認され、前庭部の底部が一部残存していることが確認された。

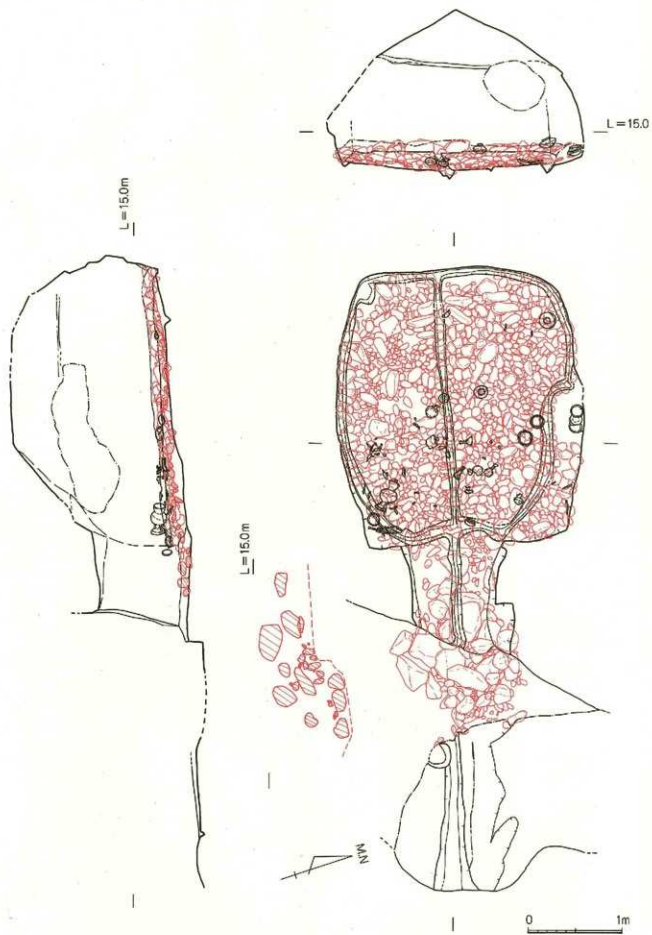
閉塞施設は、人頭大よりやや大型の岩石や河原石を積み上げて閉塞部としている。上層は地山層の崩落土が堆積しており、上部は完全に塞がれていなかった。最下層に人頭大の岩石を岩盤の排水



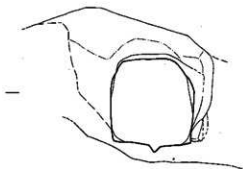
第89图 D区 1号·2号横穴墓分布图



第90图 D区 1号横穴墓实测图

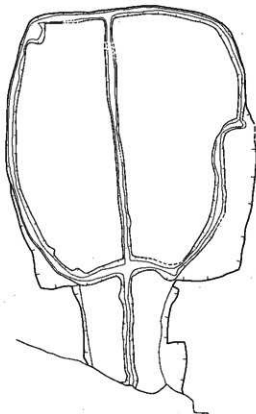


第91图 D区 2号横穴墓实测图(1)



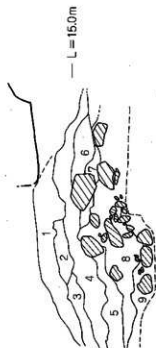
<正面>

— L = 15.0m



<完備状況>

第92図 D区 2号横穴墓実測図(2)



(注)

- 1 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) まらまらした感じ、井の堀が入り込み壁を形成。
- 2 灰土の土が厚敷きしたものか?
- 3 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) 堅實、井の跡の堀が入り込ん。
- 4 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) 堅實。
- 5 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) 堅實。
- 6 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) 堅實、
- 7 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) 堅實、
- 8 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) 堅實。
- 9 埴輪色 (Hm. 100g 3/2) 堅實、

0 1m

<新加坡出土新加坡新加坡>

溝に向かって直線上に配置していることが確認された。

玄室内には入り口部分に羨門から流入した黒色の土砂が、奥壁側から玄門にかけては崩壊した壁面、天井の岩盤片などの土が堆積していた。羨道は、壁側の左側で96cm、右側で84cm、高さ100cmを計る。玄室は長さ2.85m、奥壁幅約2.5mで、妻入りで隅丸方形に近い平面プランを呈する。天井は寄せ棟で、幅約2cmの軒線が側壁から奥壁へ巡る。床面には幅約7~18cm、深さ10cmを計る排水溝が中央部と周囲の壁に沿って設けられている。中央の溝は、羨門中央部を経て、前底部まで延びている。床面は、奥壁に向かって約3.5度の傾斜があり、扁平な河原石を敷き詰め礎床としている。礎は、溝上部に蓋をする形で敷設された痕跡が一部確認され、その間を埋めて並べられたと考えられる。奥壁側には、人頭大よりやや大きい長楕円の石が使用されている。

出土した遺物は、玄室内で須恵器、土師器、鉄器などの鉄製品、耳環・玉などの装身具が出土している。遺物は、左袖間に鉄製品が最も多いが、流入した土砂により破片となっており、完形品についても原位置とするのには困難な状況である。右側壁中央床面に、岩盤を掘り残している部分があり、須恵器坏蓋3個、土師器坏2個が置かれていた。

### (3) 出土遺物 (第93~100図)

#### ①古墳時代の遺物 (295~406)

低丘陵部の古墳からは土師器と須恵器が出土している。295~301は、須恵器の坏である。295~297は蓋で、295と296は完形である。295の外面の調整にヘラ削りがみられる。297は口縁部である。298~301は身で、298が完形である以外は、口縁~胴部である。298の外面の調整にヘラ削りがみられる。302は須恵器で器種不明の口縁部である。303~336は土師器である。303と304は壺でそれぞれ口縁部~胴部と胴部~底部で同一個体である。口縁部の立ち上がりは直立である。風化気味であり内面が黒変しており平底である。305は器種不明の口縁部である。306と307は壺の頸部~胴部と胴部~底部であり、同一個体である。頸部に刻目(絛縄)突帯を一条もち、底部は上げ底気味である。308は器種不明の底部である。309は壺の頸部~胴部である。内外面とも調整はハケメである。310は壺の口縁部~胴部、311は胴部~底部である。口縁は内湾気味に直口し、胴部に張りが見られる。風化が著しい。底部は丸底に近く、焼成後穿孔している。312・313は器種不明の底部である。312の底部は焼成後穿孔している。313の底部は丸底に近い。314と315は二重口縁をもつ壺の口縁部~胴部、胴部~底部である。同一個体である。口縁部は広がり気味に立ち上がる。胴部に張りがある長胴形とみられる。風化気味であり、底部は丸底に近い。焼成後穿孔されている。316と317は埴である。316は頸部で、頸部のくびれはくの字である。317は肩部~底部で丸底である。318~323、326、327は高坏の脚部である。いずれも膨らみをもつエンタシス状である。324は高坏の坏部である。326は裾部である。329は器種不明の口縁部である。330と331は壺であり、330はくの字形の頸部、331は内湾気味の口縁部である。332は壺の口縁部である。333~336は器種不明の底部である。333と334は平底であり、333は上げ底気味である。335は丸底に近い。

2号横穴墓からは、玄室内から土師器、須恵器、鉄器、装身具が出土している。337~352は須恵器である。337~339は坏壺である。337は口径13.0cm、器高3.9cmを測る。天井部が平坦で、ハラケ

ズリを施している。口縁部はやや外側に広がり、口縁端部がやや尖り気味になっている。338は口径3.7cm、器高4.5cmを測る。形状は天井部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し、口縁端部付近で垂直に近い形で下がる。口縁端部は外傾し、天井部にはヘラ切りの痕跡が残る。337・338にはそれぞれ「×」・「U」のヘラ記号が施されており、玄室北側中央部の削り残された石の台の上に353・354の坏(マ)とともに重なり合って出土している。339は口径12.4cm、器高4.3cmを測る。形状は天井部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し、口縁端部は丸く仕上げられて、天井部にはヘラ切りの痕跡が残る。玄室西側で出土している。340~342は坏身である。340は受径部15.6cm、口径12.8cm、器高3.8cmを測る。底部がやや平坦で、口縁部がやや斜め上方に伸び、口縁端部付近で垂直に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられている。口縁端部外面には1条、受部内面には2条の沈線が巡っている。341は受部径14.5cm、口径11.5cm、器高4.0cmである。底部は丸みを帯びており、口縁部は中程まで斜め上方に伸び、そこから垂直に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられている。340・341は玄室北側の中央部の出土である。342は受部径13.6cm、口径11.0cm、器高4.1cmを測る。底部は丸みを帯びており、口縁部は中程まで斜め上方に伸び、垂直に立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。天井部には「/」のヘラ記号が施されており、玄室南東隅で出土している。343と344は蓋壺である。343は口径10.0cm、器高3.4cmを測る。天井部は平坦で、口縁部がやや斜め方向に屈曲し、口縁端部はやや尖り気味である。354の坏(マ)の中に固着した状態で、玄室北側中央部の削り残された石の上から出土している。344は口径10.0cm、器高3.2cmを測る。天井部はやや丸く、口縁端部付近で垂直方向に下がり、口縁端部は外傾する。玄室の南東隅から出土している。345~347は短頸壺である。345は口径8.2cm、器高8.6cmを測る。形状は底部から2/3で「く」の字状に屈曲する。肩部から体部上半にかけてカキ目が施されており、玄室の北西側で出土している。346は口径6.5cm、器高6.3cmを測る。最大径は体部の中程にあり11.0cmを測る。肩部と体部の境がわずかにあり、口縁端部は平坦でやや外傾する。347は口径6.9cm、器高9.7cmを測る。最大径は体部の中程にあり13.6cmを測る。肩部と体部の境は不明瞭で丸味を帯びた形状である。346・347は玄室中央部で出土している。348は提瓶である。口径4.7cm、器高14.6cm、最大径14.6cmを測る。口縁部はやや斜め方向に立ち上がり、2/3の位置でやや内径し、端部付近で上方に伸びる。口縁端部は丸く仕上げられている。体部の形状は正面から見ると円形で、横から見ると長い楕円形である。肩部外面にはボタン状の把手が付き、口縁部から頸部にかけては横方向のカキ目、体部には同心円状のカキ目が施されている。玄室中央部で出土している。349は甗である。最大径は体部の上方にあり9.0cmを測る。体部は球形に近い形状で、底部から2/3の位置でやや内側に屈曲する。屈曲部分には2条の沈線を巡らせ、それを切って円孔が穿たれている。頸部はやや外反する。玄室北側の羨道部側で出土している。350は無蓋高坏である。口径11.9cm、器高17.0cm、底径11.8cmを測る。坏部は基部から丸身を帯ながら、立ち上がり、口縁部がやや外側に広がる。口縁端部は丸く仕上げられている。坏部下半には二本の稜が巡り、その間にヘラ描き斜線文を巡らせている。脚部の方形三方二段透しは沈線を切っており、脚部端部は上方につまみ出されている。玄室中央部の羨道部側で出土している。351は脚付長頸壺である。口径は11.3cm、器高は30.4cm、底径は15.3cmを測る。最大径は体部の上方にあり17.6cmを測る。口縁部は頸部からやや外反し、中程でわずかに角度を変え

端部付近で上方に伸びる。口縁端部は内傾する。体部の上半部にはカキ目が施され、中程には平行タタキを施した後に指で押さえた痕跡が残る。胸部は大きく外反し、上から2/3の位置で稜を持ち内湾している。方形三方二段透しは沈線を切っており、脚端部は外傾する。体部外面の下半に窯体のもと思われるスサの痕跡が見られる。支室の南東隅から出土している。352は甕の口縁部～肩部である。口径は24.0cm、頸部径は18.0cm。頸部は「く」の字状に外反し、口縁端部は平坦でわずかに中程で凹む。肩部の内外面にはそれぞれ同心円タタキ・平行タタキが施されている。支室内中央部から出土している。

353～355は土師器の坏(ワ)である。353は口径15.7cm、器高7.3cmを測る。354は口径13.0cm、器高6.2cmを測る。355は口径10.0cm、器高5.0cmを測る。形状はすべて底部にやや小さい平坦面を持ち、底部から2/3の位置で内側に少し屈曲し、わずかに端部が外反する。353には口縁部内面に赤色顔料が塗布されており、支室中央部で出土している。354・355は支室北側中央部の石の台の上に337・338の坏蓋とともに重なり合って出土している。なお、354の中には343の壺蓋が固着した状態で出土している。

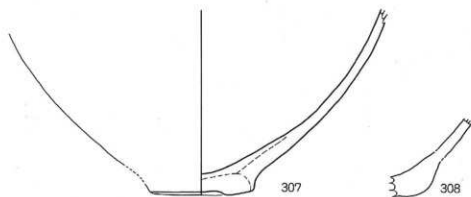
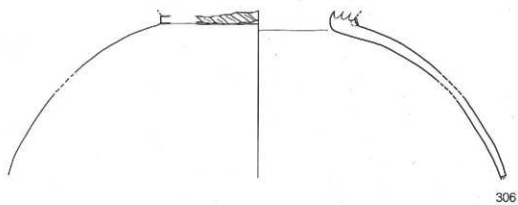
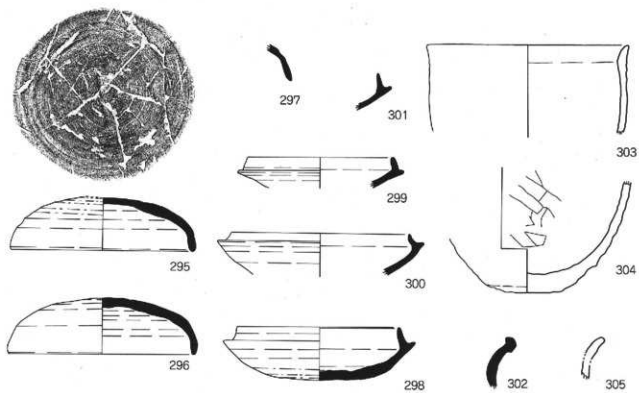
なお、2号横穴墓から出土した鉄器などが多数出土したが実測可能なものは46点であり、所見や計測値については、第33・34表を参照されたい。

また、切子が5点出土しており、計測値については、第35表を参照されたい。

## ②その他の遺物(407～411)

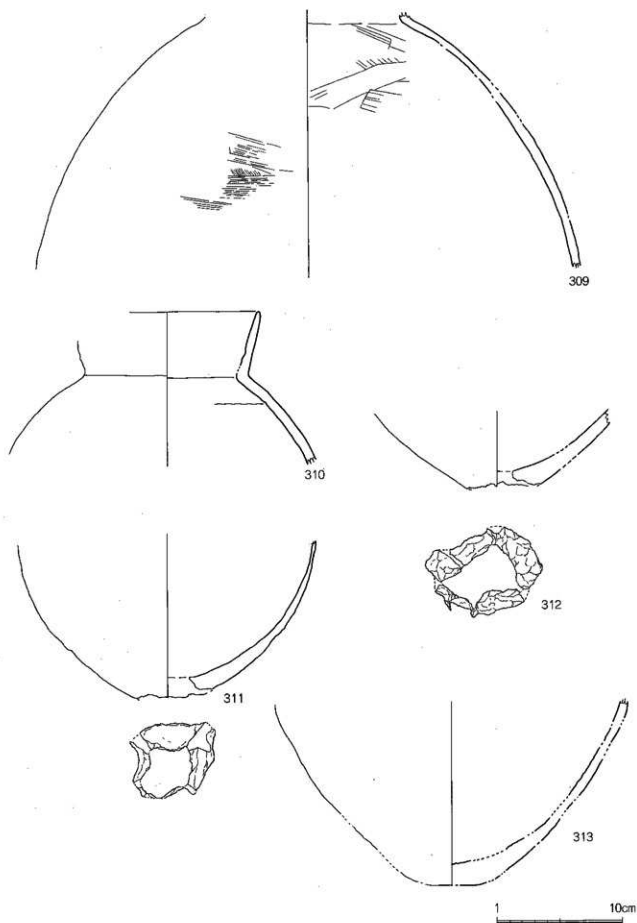
その他の遺物として、「寛永通宝」が5枚出土している。



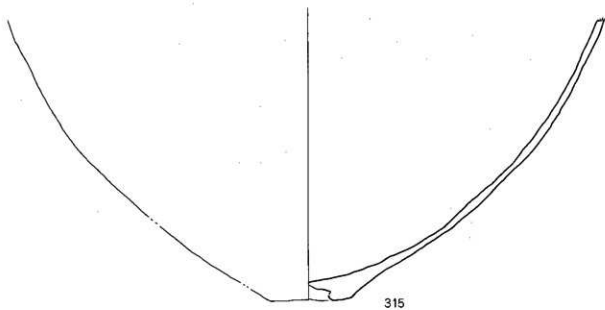
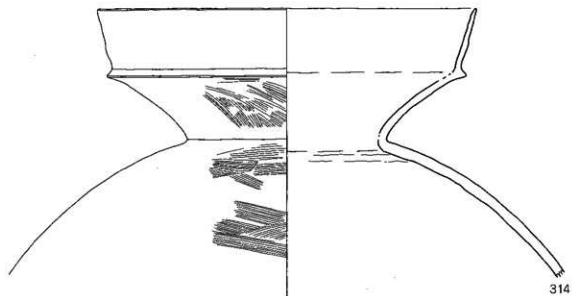


0 10cm

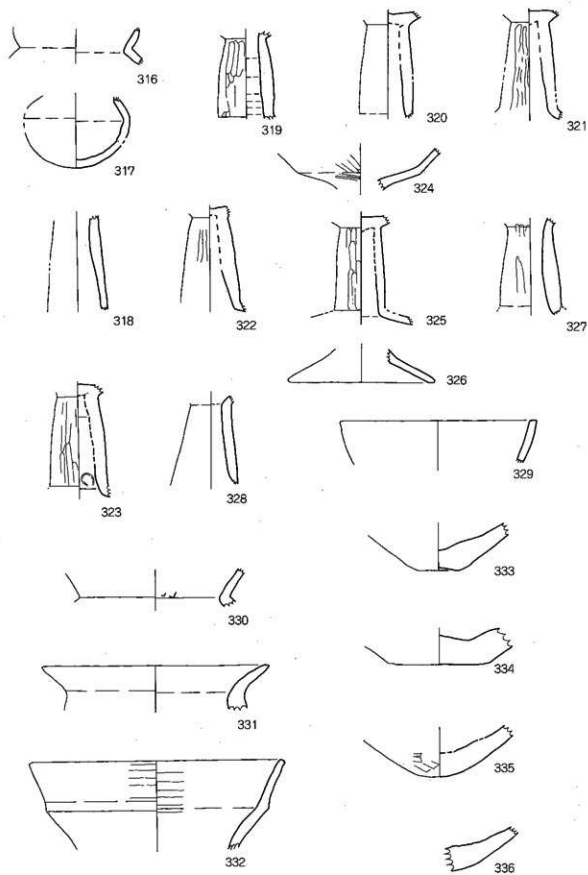
第93图 D区 出土遗物(1)



第94図 D区 出土遺物(2)

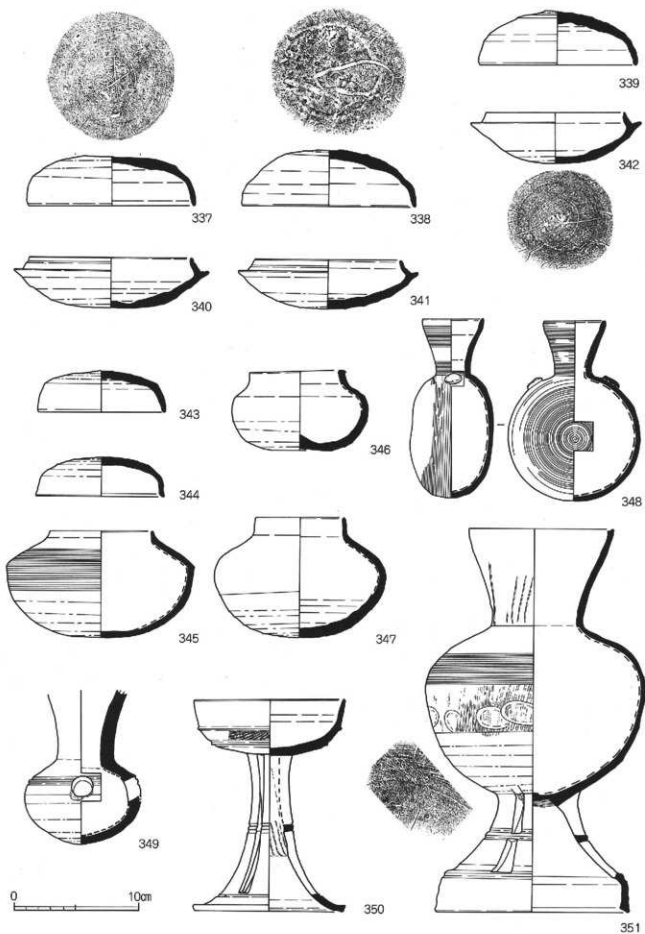


第95図 D区 出土遺物(3)



0 10cm

第96图 D区 出土遗物(4)



第97图 D区 2号横穴墓内出土土器(1)